798-167
1200501607594
798
167

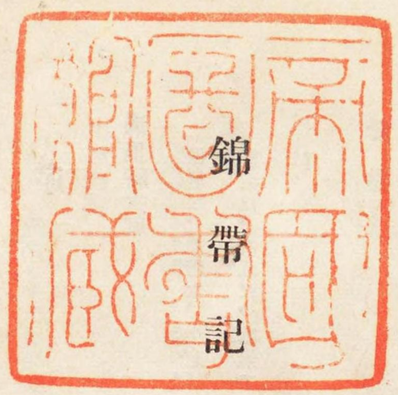
讀花全集

壹

798
167

目次

錦帶記（明治三十二年二月）……一
さら〳〵越（明治三十二年二月）……一四一
湖のほとり（明治三十二年四月）……一六一
湯島詣（明治三十二年十一月）……二三九
幻往來（明治三十二年十一月）……三八一
名媛記（明治三十三年一月）……四〇九
弓取町人（明治三十三年一月）……四二三
白羽箭（明治三十六年十一月）……四四一



錦帶記

高野聖（明治三十三年二月）……五七三
海の鳴る時（明治三十三年三月）……六五一
湯女の魂（明治三十三年五月）……六六五

序

浦里時次郎

「傲慢な。無禮な、生意氣な、店子を取つて占めようといふのに、其の身裝ではあまり質素だ、内端だ、陰氣です。一つ花々しく行りませんか、若返つて緋絨の鎧といふのだ。

鎌造

「お前方は、此虹を、不思議だの希代だのというて騒ぐ前に、赤い花、翠の草、紫の雲、白い蝶々を見て、何故吃驚しないんだ。

お澄

「浦里さん、あの、若旦那様でせう。きつと又、お晝寝なんですよ。

源

「こんな長屋は、土龍が持上げると、宙に上つて、蝙蝠の羽に乘つて、飛じまひますぜ、可恐い。

辰

「そ、そ、そ、それが不可え、ちよッ不可えなあ。小汚えぢやあねえか。誰が掃除をするんだ。ぢゞむだつて叱言をいつてる内に、鼻紙を棄てる奴もねえもんだ。

お禮の母

「何がよ、何うしたといふんだよ。いゝえさ、何が何うしたといふんだよ。

相良阿禮

「何ね、蔭ぢやあ、あんなことをいひますけれど、私が今まで爲置いたことで、相良といふので、お禮といふので、づつと出れば辰なんぞに。

一

前後五六町が間、日中暑さの爲に人足の途絶えた巣鴨の通、最些とで庚申塚に成らうといふ板橋街道は、駒込、白山のあたりから深く地に印した荷車の轍の跡が、遙に絶間なく北に向つて、二筋續いて居るが、町幅の廣い處では縱横に入亂れて、筋と筋とが重り合ひ、恰も鼓の調の緒を眞中で絞つたやうな、泥は煎り附き、砂利が熱して、彈き破れはしないかと思はるゝ赭黑い地の、二岐に分れた辻の角、片側は往來から弓形に大く入込んだ邸の門の前で、爰も未だ水を打たず、邊に一滴の濕もない。遙か南の交番に立つた巡査の洋劍の色も、日に焚けて朱の棒の如くに見える、八月十二日午後三時半の太陽を一葉の遮るものもない、露出しの郵便函、塗たての新しいので、いきれの立つ、ペンキの臭の眞黑な中に、片肱をついて、頰を支へ、右手に鉛筆を持ちながら、葉書をぢつと見て居る學生があつた。

赤ッ茶けた、ごは〳〵した、鍔廣の麥藁帽を頂いたが、一着した金釦は冬服で、肩のあたり、胴のあたり、窄袴の折屈など、立居に擦れたのが薄くなつた、其處から汗が染んで居る。脊の高い痩せたのが、身を斜に、眞直な郵便函に凭れてるから、これを炎天の澪標といはう。

暫時は此澪標、草木は勿論、萬有皆動かず、そよとの風もなかつた。

唯見ると、太陽が凸凹な地に激して、其の光線は脈を打つて搖いだが、今此の學生が葉書を買つた、郵便物の取扱をする、曲角の質屋の土藏の屋根の鬼瓦が、眼をぐる〳〵と廻して、口が碎けようとして地震した。

渠はふと心付いたやうに、持つてた鉛筆を耳に挾んで、郵便函に頰杖したまゝ、件の葉書を左の乳のあたりの衣兜に納れると、同じ衣兜に插して居た平骨の扇を拔いて取り、母指の先と人指指と兩手で要を押しながら、一間々々扇を繰出すが如く開いて、胸のあたりを泰然と煽いだ。

されば東京の一端を通じた、暑さで人通のない、板橋街道の中ほどに、唯一ッ白い扇がひらひらと動いて居る。頓て學生は頰杖を脫して、手を添へて、丁寧に扇を疊み、靜かに其を衣兜に插して、上を一ッ壓へたが、其手で葉書を引出しつゝ函の上に乘せた。それから膝と膝を絡めて居た細長い脚を解いて、くるりと向をかへると、背向になつて葉書に臨み、耳なる鉛筆を取つて、さら〳〵と書いた。其まゝ投函するつもりであらう。學生は五六行認めて、鉛筆の先を突立てるやうにして一寸休む。

廣い額から點々と汗が垂れるので、急いで手の甲で、眉間を一太刀といふ構へで押へた。けれ

ども、指を傳つて血を絞つたやうな汗は留まらず落ちた、葉書の面の處々。

二

別に仔細もないことを、學生は何を狼狽へたのか、慌しく掌で葉書を横ざまに拭つたので。何條堪るべき、鉛筆の墨は一刷刷いたやうにかすれて、薄い墨流しになつて兀げた。字の消えた痕を手で押へて瞻つて居ると、また汗が垂れて彌が上に落ちた。

此爲に學生は、＝汗流れて書けず候＝と認めて、筆を留めることにしたが、其汗流れて書けず候を記し果てると、薄髯の生えた口許に苦笑した。鉛筆は葉書でくる〳〵と卷いて、又衣兜の中に摑み入れて、再び衣兜から取出したのは、マッチと、それから馬尼剌煙草、Isabella と稱へて薫の高い、此の匂を嗅ぐと、日本人は何となく、硫黄ヶ島を聯想する、硫黄の燃えるやうな煙を吹出しながら、今まで郵便函に建掛けてあつた、自然木の杖を取つて脇の下へ高くあげて、肱を鍵形に曲げて、しつかり搔込むと、同時に片足を出して、てく〳〵歩行き出した。麥藁帽に打つた帝國大學の徽章は、射照らす光線に輝いて、口髯を篦めて横ざまに頰を撫でる Isabella の烟は、縷々として長く其背後に靡く。

前途から旅裝束、二三度水を潛つたと見える久留米飛白の褪せたのを端折つて、脛脚に表打の

低い下駄、紺足袋穿で、角帶を締めた、胸を擴げ、釦三ッばかり露はして襯衣を着て。眼の色の濁つた、鼻の低い、色の淺黑い、伸びた髪を額に懸けて、帽子を被らず、蝙蝠傘を翳して、熱砂の中をすた〳〵遣つて來たものがある。

扮裝恰好、さまで長途を來たものとは思はれぬ。八王子、國分寺、其邊からであらう。

渠は學生に行逢ふと、汗の染むだ眼を瞬いて、上眼使ひをして、何か落着かない風、きよときよとした顏を仰向けて、

「え、、些少お尋ね申しませう。」

無言で學生は足を揃へて、すつくと停まる。

男は挨拶もしないで、

「平長といふ方、御存じではなしかね、」といひかけて、傘を横に取つて、頰の汗を拭いた。

「何です、平長といひますか。」

「巢鴨の親分さんでおいでなさんすのでござんすが。」

「知りませんな。」

と決然として答へた。學生は卷煙草の灰を、脇挾んだ杖の柄に當てて、拂いて落すを合圖に、窄袴の膝を突張つて眞直に足を出して、圓規を一杯に開いた如く大跨に歩行いて行く。

三

……番地は、十九軒棟割の貧乏長屋で、鍵形に建連る、一方は隣の垣根で、長方形をなした路地の中に松の樹を植ゑてある。枝の差出た下は、小蔭で、其處に車井戸。

井戸の傍に一軒、門の附いた、別な住居がある。此の前へ來て學生は其の喫さしの煙草を棄てた。

「御免、御免なさい。」

内では默つて應じない。

「失敬、御免なさい、失敬。」

とまた呼むだが、同じく返事をしないので、學生は考へながら、其の大な靴を二ツ三ツ砂に擦つた。

暫時して。

「失敬、時さんは居ませんか、時さん、時さん。」と姿勢を正しくしていつた。蟬の聲ばかり、風をして震動せしむるが如くに聞える。

疾には通じさうにもないので、學生は立直つて、大股に歩いたが、一列ある長屋のはづれの、

トある格子戸の前に立つて、顏を近々と差寄せて、

「失禮、少々伺ひたいんですが。」

「何ぞ用かね。」これは直ちに應じたが、其の聲は錆のある、痰の引懸つたやうな、疲れたらしい、且つ咳ぴたものであつた。

學生は意外に便を得た樣子で、門ながら腰を屈め、

「其の、お隣ですがね。」

「用かね、用があるなら其處からいひなさい。お目に懸らんでも解るぢやらう。」

見れば、此日中を閉込んで居るらしい。薄暗い家の中から、膠なく、繼穗なく、斯う答へた。

こんな調子に對しては餘り込入つた筋の談話を爲し得らるゝものではない。極めて簡單に、極めて眞率に、直截して其要をいふべきだけれど、郵便函の上で鉛筆で葉書を書くにも扇使をする人物であるから、

「左樣、お目に懸りませんでも解るんです。」

といひかけて少し聲高く、

「お隣ですがな。」

「貸家かね、あれは何ぢや。別に奥はないので、奥は覽なさる通畠ぢやが、家主の婆がな、全然

いの字も讀めぬから女が書いて寄越したのを持つて來て取違へて貼つたのぢや。木戸の處には唯（かし家）としてあるぢやらう。あれを隣家へ貼つてな、（奥に貸家あり）といふ方を木戸へ出して置く譯ぢやに、文盲であべこべにしたで、皆が迷ふよ。貸家は隣だけで、奥にはないのぢやで、捜したとて見附かりはせぬ。見るならば見なさい、六疊と三疊で建具は附いて居るが、疊は臺なしぢや。其まゝで好くば一兩二分、疊を入替へれば其上に一分價が上る。孰にせい、三月分前店賃で取るといふ强慾ぢや。家主がいふまゝに取次ぐぢやからな、誰も借手はありやせぬ。あたりまへなら、一月分前店賃で一兩がものぢやよ。惡いことはいはぬで、爲にならない、損ぢやから、止めにさつしやい。」

全然思ひも懸けぬことを、立續けに聞かせられる。

四

此長屋十九軒の中に、男ばかりで暮らすのは、此差配と、隣家の浦里が住居のみ。若夫婦に、其の母と思はるゝ年寄の居る内もあれば、姉と妹と女親と三人で、主人は行ツ切に砲兵工廠を稼ぐのもある。

年は二十で美しいといふ評判のが、產後に亭主に死別れた哀な孀から、嬰兒を貰つて、牛乳で

育てて、慳な女房と、優い亭主と二人が世帶で、朝から腕車を曳くのがあり、また旗本の女で御殿に奉公をしたのが、出入の植木屋と出來合つて、駈落をした、それからさま〳〵の苦勞を仕拔いた擧句、今は寄る年波の老夫婦も居る。十三を頭に小兒が六人、女房が駄菓子を賣つて、亭主が足袋を刺す、他に職人が二人、同じく寢泊をする、痞せた車夫が一人、これが近い頃肥つた嫁を取ると、來た月から孕むだ。大抵此夫婦ばかりでも家中充滿にならうのに、搗てて加へて千葉縣の在所から女房の緣續だといふ十八九の女で下女を志願で出て來たのが居る。のみならず、店には古足袋が堆い。まだ〳〵微塵棒、かりん糖、ぶつ切飴、鐵砲玉などを竝べて、外に、此夏から心太と甘酒を賣出したから堪らない。

店前に竝べた二脚の腰掛は、甘酒心太の客のために備へたのだから、狹いといつて、これへ乘つて團扇使をする數ではないので、隣地面の華族の邸の塀と、廂合との間の地の上へ筵を敷いて、内から溢れ出した徒が土人形のやうに坐つて居る。

隣には、ぼてふりの七といふのがあつて、祖母と二人の暮し、魚と大く書いた腰障子の傍の盤臺は干乾びて、鰺の干物と、なまり節と、何ういふ取合せか知らぬ襤褸切が賣つてある。それから女房が身を投げて、殘つた小兒が二人、父親は病氣で寢て居るのもある。看守やら、仕立屋の職人やら、日傭取。無いのは三味線を彈く新造ばかりで、老若男女打交ぜて八十人有餘の中に、

既にいつた男ばかりの世帶といつては、差配と浦里の二軒に過ぎない。

同一男ばかりの住居だけれども、浦里の家は夜も明くつて、差配が住居は晝といへども暗いのである。

敢てものの色の白きを以て、これを明いといふのではないが、浦里の家は疊も白く、障子も白く、壁も白く、蚊屋の釣手の紐も白く、夜は洋燈の火屋も白い。第一時次郎の色も白い。黑いものといつたら、渠が髮と、疊の緣、唐紙の引手、其等であらう。

たとひ外出をして留守な時も、大戸は閉めず、雨戸も繰らず、引窓も塞がないで、開け放しの室の內は、ものの影もなく、何時でも明い——花の頃——青空の日中、格子戸が開いてたから、遠慮なしにずッと入ると、誰も居ないで、火鉢の火も消えて居た、櫺子窓を透す樹立の影で艶々と見える机の上へ、風あるともなく、春晝寂として何處のか花片がちら〳〵と靜かに散つた。

多時見て居ても、人氣勢がせぬので、其まゝ立汐なく悄々と極の惡い思をして引返したことの覺があるので、今日は晝寢と見當を着けぬでもないが、案外な男だからと、學生は斯うやつて樣子を聞きに差配が門に立つたのである。

五

「えゝ、其何んですが實は、」天日に曝されて思はく違ひな貸家の談話を長々と聞かされながら、遮つて用事を打出すでもなかつた學生は、對手が句切るのを待構へて、此處ぞと口を聞いたらしいが、(其何んですが)とばかりで一向要領を得なかつた。

薄暗い中から、これはまた性急で、

「家賃や何かは今云うた通ぢやがな、惡いことはいはぬ。大體なら止めた方が可いよ。家主が因業ぢやに、其にこんな長屋に住つしやることはない、雨は漏る、根太板は朽ちて居る、些とも手入をせぬで打遣放しぢやから、」と益々行違つて居る。堪兼ねて口を入れて、

「いえ。」

「何、其れは望みなら何も斷つて不可ぬとはいはぬぢやがな、家賃が一兩二分、可いか、前拂で三月分だけ引越して入る時取上げる。そして御家內は幾人ぢや、あんなに汚うても女房のない人には貸してくれるなといふのぢやから。それから勤人か、稼ぐのか、其處等も善く檢べた上で世話をしろと申すぢやから。」

といひかけて、座を立つ樣子。學生が慌しく、進むで何かいはうとする時、出て來て煤けた上り框の障子を開ける。

汚點だらけな、額際の短い、黑ずむだ顏。眉毛の太いのを寄せつゝ、格子戸の內へ顯れた時、

かた〳〵と鼠の駈け廻る音が聞えた。

差配は苦り切つた顏色で、其の窪むだ鋭い目で屹と見ると、其まゝ瞑つて、彼の太い眉を顰めながら、一文字に口を結んで、悠然と空嘯き。

「書生ぢやな。」といつて吻と呼吸をする。

「左樣です。」と、此方は決然たる趣で、恰も自分の疑はしい胡亂なものでないことを、言ひ顯すが如く、勇ましく云つて門近く寄つた。

「御家內はあるのか、お前樣が好くてもな、女小兒には辛抱が出來まい、氣味を惡がるよ。殊にお隣づからぢやから。」

と眉を顰めたまゝ、目を瞑つたまゝ、空嘯いたまゝで、居ながら千里の果に思を馳するやうな形でいつて、また苦々しい顏をした。

お隣づからといふ、この隣の貸家一棟には、人の住みついたことがつひぞ無い。大方は型の如き此差配の應對と風采と、顏色に、頭から恐れて遁げるのだけれど、中には覺悟を極めて借りるものもあるが、一月とは指かず越して行く。窓が七ツあるのでもなく、疊の裏に血が附いて居るといふでもなし、天井に大蛇が棲む數でもないが、壁一重の差配といふものが、其人物も、其家も、間近なものには如何にも不氣味で、我慢がし切れない所爲で。

氣が付いたらば覗いても知れよう。薄暗い、濕臭い、間狹な中に垂籠めてて、大ぴらには吹く風も通さうとはしない。其に鼠の巢窟だといつても可い、長屋中の鼠は皆差配が處に屯して、夜になると方々へ稼に出る。天井裏はいふまでもない、押入から板を貫いて、鴨居に通ふ穴ばかりも指を折つて數へらるゝ。壁の中から尾を出して引込むのもあれば、襖の間から天窓を顯はして出て來るのもあり、ごそ〳〵と遣り、きち〳〵と云ふ。

六

元來三味線を彈く新造は居らない部落であるから、戀の痴話文なあ、といふ筋はないけれども、手拭だ、鷄卵だ、石鹸だと、夜な〳〵家毎に紛失する。それ、何か見えなかつたら、煤拂まで待つには及ばぬ、差配さんの家へ行つて天井裏を搜して來い、といつたやうな譯のもの。

貯のない住居だから、壁に釣した鯡から蛆が湧いて溢れはしないが、鼠の兒は疊の上へぼたぼた落ちて來るさうな。いたづらものの路は四通八達、それを狙つて、裏の空地の叢から、ずるずると蛇が來て、晝間鼠を追廻す、凄い音。

つい此間も、要害を知らぬ屑屋が、御拂はと、水口の戸を開けたが、啊といつて後へ退つた。其は流許の土間から板敷へ渡り、ぐたりとして伸びて居たのが、屑屋が顏を出したトタンに鎌

首を擡げ、暗い處で、銀色に青い滑のあるのが、一畝畝ると、紅い舌を吐いたのである。

屑屋は男だから立直つて、

（もし〳〵、飛んだものが、へゝゝゝ、）と氣味の悪い笑を出した頃には、蛇の胴體が脈を打つて、落板の上へ傳はつた。其まゝ奥の方へ摺らうとする。

（蛇が、蛇が、もし、あれ、大變だ）とけたゝましく呼懸けると、内から落着いた、錆のある、沈んだ調子で、

（戸外へ出ると長屋中騒ぐでな、ぴつたりと閉めて行け。）とさういつた。

語を換へていへば、蛇を閉込むで呉れろ、といふことと大差はないので。

若し其蛇が渠の足に這上らうとも、差配はきちんと坐つた其膝を崩しはせまい。朝は三時四時頃から起きて居る。夜は十二時一時までも床に就かない。長い時間、内職をするでもなし、衣の破を繕うて居るでもなし、書籍を讀むで居るでも無からう、新聞を借りに出た話も聞かず、目刺を買ひに行つた例なし、芋を掘りに行く姿も見ない。如何、鼠は夥しくても胡麻の油であげるでもあるまい。まさかに青大將を茹るのでもなからう。

これが第一不氣味である、試みに思へ！　蛇も蓋し活てるのより、死だのより、殺した骸の枝に下つたのが獨で動いてる方が氣味が悪い。嘗て守宮を殺したものが、死骸を瓦屋根に打遣つたが、炎天に溶けもせず、夕立に流れも去らず、六日七日腹を出して仰向いて居るので、取つて棄てようと火箸で挾むと、びく〳〵と蠢いて赤い口を裂けたやうに張切つて開けたので、身震した。粟一粒、水一滴も當がはないで、燒土の寶へ一百人押重ねて蓋をして蒸したのを、六十日目に開けて見ると、いきれ臭い死骸の下から、眞蒼になつて、ひよろ〳〵と一人死なないで出たとせよ、其が絹絲の如く瘠細つた自分の命懸の戀人でも、意外と、恐怖で、絶叫しないでは居られぬ道理なり。

七

要するに木葉を絡ひ、霧を吸ひ、霞を飲んで、人跡絶えた深山に住む仙人は神聖に感じらるゝ。薄暗い中に、小さな天窓で、額の狹い、薄毛の生えた、肩の細い、腹の膨れた、手足の瘠せた、五十餘の、何を食ふともなく、何を爲るともなく、鼠と蛇とが天井から鴨居を拔けて、疊の上を行違ふ裡に、口を結んで、眼を閉ぢて、寂然として空嘯いて居る差配は氣味が悪い。何として壁一重隣に枕して寢られよう。

單にそればかりではない、隣のものばかりでなく、二年三年馴れたらば知らず、長屋中が寢覺を悪がるのは、小兒が南京花火を焚いても、先んじて注意をしなければならない差配が、疊の上

で、火を弄ぶ珍事である。此節は夜になると、此長屋の中に天理教に固まつた目の縁の黑い、瘠ぎすな、四十恰好の丸髷の女房が、近所なる信者を集めて小兒まじりに、ぐるりと輪になり、團扇使ひをしながら、亭主は片肌脫ぎながら、同音に哄と、あしきをはらうてと唱へ出す時分から――（買物に出た小提灯が路地へ入つて格子戸がが〳〵として消える。）（足袋屋が裏口を閉めて戸外の腰掛へ吹かれに出る。）（稼に出て居た車夫が空車を引込むと井戸端に釣瓶の音、白々と露を降らす銀河の下でざぶ〳〵と汲覆して、足を洗つて靜まる。）（貰兒が牛乳をしやぶる。）（彼の身を投げた女房の家で、亭主が病の床に呻吟くのが聞える。）（角家の看守の闇で、近い頃娶つた二度目といふのが、晝間井戸端で水を汲むに、人目を恥がつて顏を背けて、身體を斜にしながら、手桶に引張られて、ちよこ〳〵走に遁げ込む樣子とは打つてかはり、いゝ年紀をした旦那を擬まへて、先のお光さんはお美しくして在らつしやいましたツてね、何うせね、といふ腕前。大肌脫で乳の上にまで白粉をした先妻に手を燒いて、發心悔悟の上、今度の嫁を娶つた、口髯のある、のッとした、脊の低い、克明なのが、これ、そんなことをいふと、隣のが幽靈だぜ。もう！とぼやけた音で牛の聲色。あれ、などと、痴話がはじまる。）（板橋通のそゝりが聞える。）（犬が吠える。）（巡査が歩行く。）――時分にいたるまで。

煙草も飲まぬ差配だけれど、何の時も火種を絶やさず、指で抓むか、火箸で取るか、炭火の大

なの、小なのを、疊の上へ並べては土瓶の口から水を懸ける、灯は點けないから眞闇にブス〳〵と烟るトタンにぢゆつと一ッ消える、又始める、更に疊に抓み出して、再び水を懸ける、更めて又燻る。恁ることが連夜である。今に彼の業が滅する時、塗つた盥に水を張つて、汚點だらけな顏を移すと、相好變じて惡鬼となり、水の中から炎が燃えて、其まゝ姿を搔消すので、其までは あゝやつて、怨のあるものを呪ふのだといふ、彼の天理教の女房は、略其の消息を知つて居る。

八

此女は犬の遠吠、鷄の宵鳴、天火、野鐵砲、鼬の道切、湯屋で聞く寺の鐘、人魂、山路の女の脫髮、路地に落ちた黃楊の櫛、濱邊へ豆腐が降つたこと、千代の發句、虹のこと、曆の中段、星の黑白。すべて三世相を心得たもので、差配は、お禮といふ、私窩で、高利貸で、此長屋の家主にあたる名代の婦人に、因緣づくの怨があるため、あゝやつて、水火の行を修して居るのだといふことを知つて居る。呪はれるものの住居は下谷だけれども、其業、其顏、其樣子、長屋は不殘氣味を惡がる。

恁る差配の薄暗い姿を見ては、如何に綽々として炎天に餘裕のある大學生も、周章ずには居られなかつた。

はじめて口早に、
「隣の、いえ、隣の浦里は留守なんですか。」と、慌しく、氣の弱い人間が惡魔を敬禮すると一般に天窓を下げた。
「何うぢやらうか。」
「えゝ。」
「……」
此時、此もののロからは如何なる言が出ようかと、危みつゝ學生は顏を上げて、鄭重に、熱心に、用心をして見たが、はや障子は閉まつて居た。差配の顏は薄暗い中へ搔消す如く失せたのである。
「浦里さん？」
と不意に横合から優い聲を懸けられて、差配に魅せられたものの如く、ひよろ〳〵と長い身體を戸口に眞直に立てながら、魂は吸出されさうになつて居た大學生は、氣がついて振向いた。
「浦里さん、若旦那樣でせう。」と、日向が眩ゆさうに、細長い判然した眉で、些少俯向きざまに學生を見たのは、色の白い、下脹の、溫柔やかな、眼の涼しい、口許の愛くるしいのが、廂の蔭になつてる顏に、何か憂はしげな趣きあり。前髮を引詰めた澤山な毛の、ばさ〳〵した銀杏返。

水玉の白いのを插して、縮の中形に赤味の少ない唐縮緬友染の帶、前垂懸で、小柄な風采、十六七。何となく其眼鼻立、髷の鹽梅、派手を棄てた着物の好、爪はづれ、表打の低い駒下駄まで、もの哀れに見ゆるのが、愛嬌のない緊つた笑顏で、
「吃とお晝寢なんですよ。」といひながら、身を交はして、すれ違ひに空地の方へ行かうとするので、
「いや、何うも。」と挨拶して、學生は、衣紋付のしをらしい、其の後姿を見て控へて居た。
女は斜に差配の門を横切つて、植込の樹と、草の生で、垣根のない、裏庭を遠廻しに、松の間を潛り、草を除けて、少し進む。すがたは樹間に小隱れたが、低い枝に咲滿ちた、百日紅がゆらゆらと搖ぐと見ると、淺黃の縮の小造なのは草の中になつて、日南を向うへ出たが、すら〳〵と竝んだ玉蜀黍の葉の間から、美しい横顏を出して、忍びやかに差覗く。
學生は其姿に引寄せられて歩行くやう、二足三足進むだが、緣の端が少し、南天に包まれた瀨戸物の手水鉢の大きな白いのが、ちらりと見えたので、差控へて又行む。
女は葉を潛り、枝を潛り、見え隱れに引返した。
「居ますか、居たんですか。」と、這般無口な學生も、女の動作に動かされて、親しげに問懸けた。

九

「在らつしやいます。お寢つて在らつしやるんですよ。」と、臆せず繕はぬ狀ながら、包ましやかな物越である。

「左樣ですか。仕樣のない男だ、のんきですな。」と苦笑をしたけれども、敢て浦里の晝寢を非難した譯ではない、女の深切に酬いるため、此男が精一杯の愛想にいつたので。

女も莞爾して、

「よく御寢つて在らつしやいますから、貴下お起し遊ばすと宜しうございますよ。」

「僕が、あの私が起しますか。」

「お入りなさいましな。」

「惡いでせう、え、寢て居る處へ入つちやあ惡くはありませんか。」と、母親に敎を乞ふやうなものいひである。

かういつて問はれた時、女は何か嬉しさうに、

「可うございますよ、だつて皆樣が左樣なさいますんでございますもの。」

渠は浦里が坐臥進退を凡て心得て居るやうな樣子で得意だつた。

「ぢやあ貴女一つ起してくれませんか。」

「はあ、」

「失禮ですがお願ひ申したいもんです。」

「だつて私は、何も、」

「可いでせう、始終浦里が處へ行らつしやるんでせう。」

「いゝえ、」と少し面差氣な素振である。

「構ひませんから、私だ、山北だといつて起して下さい。極懇意なんだけれども、此春一度來たばかりですから、傍ぢやあ隔日のやうに逢ひますが、此家は樣子が分らんで、工合が惡い。」

「左樣でございますか。」と附穗なささうな、女は、洋服を着た、麥藁帽を被つた、脊の高い、帝國大學の壯年に斯う親類らしくものを言はるゝものとは思ひも懸けないで居たらしい。通懸りに一寸氣を着けたばかり、晝寢の最中、もの靜に長屋中の人目がないから、思はず庭へ行つて緣側から內を差覗くまでに深入した、妙な羽目。男と談話をして居るさへ晴がましいが、振切つて行かれもせず、女は爪先を見たり俯向いたり、袂を持つたり、胸を撫でたり、又顏を背けて見たり。

學生は女が身體を持扱ふのを、少時ぢつと見て居たが何と思つたか笑出した。

「はゝゝゝ、困りますか。何、私だといつて起して下さい、時さんは怒りやしません、大丈夫だ。

隨分我儘をいつて困るでせうな、からもう厄去だ。」といつて一人で合點んで居る。親類の女か、小間使とでもいふのか、細君を娶つたか不知、何しろ内のものだと、學生は思つたのである。

女は益々持扱つて、

「ですが、私は存じませんもの、」といひかけて顏を赧らめた。

「大丈夫だ、何ともいやあしませんよ。」

「いゝえ、あの、私は存じませんの。」

「不可せんか。」

「はい、」と、うつかりいつて、どぎまぎする。

十

「はてな、出直して來ようか知らん、」と、佗しげに獨言いて、學生は帽を脫いで、額の汗を拭いて打傾く。

「隨分遠いんですから、何分暑いので。」

「いゝえ、さうぢやあございませんの、あれ、」と堪り兼ねて女は、

「私は、あの、此長屋に居りますのでございますよ。」と言懸けて、そはくして四邊を見た。

「いや、お邪魔でした、」と、一向氣の着いた狀もなく、歸らんかなの趣。小さな胸を轟かして、

「ですから、お入りなさいましな、可うございますよ。」

「しかし何ですから、」

と煮切らない。

「いゝえ、皆樣が左樣なさいますのでございますからさ。」

推入れて遁げたくも思つたらう。

「ぢやあ、まあ、しかし、」といつて、また考へる。

女は簪の水玉に、一寸と手を當てて困つた顏をして、

「あなた屹とですよ。」

「左樣ですか。」

「まあ、入らつしやいましな。」

と立直つて、前に立つて導かうとして、庭口へ入りかけた。

「寢てますか、寢てますか、」と脊の高いのを伸上るやうにして、背後から少し大聲で呼ぶ。

と内から其人の聲で、

「山北、山北か、」と、調子高にいつた。

はツと身を窘め、耳朶まで赤うして後退りになる、此の恩人には目も懸けず、

「おゝ、起きたのか、失敬。」

「お上んなさい、直ぐ此方から。」

「むゝ、起きたか。」と例の大跨で、つか〳〵と少し屈む様にして庭口に入つた。黒い洋服は松の樹を廻つて横ざまに歩行いて去る。

女は足疾に引返し、差配が門を放れて呼吸をついて、小な白い手で前髪の上から其額を壓へた。

「お澄さん、おい、衝と蹈込むで、かう打つかつて、口説いッちまひねえ。對手だつて獨身だ。だが其何だよ、眞晝間は些慎んで頂きませんと、眞のこつた、町内の若いものが立行きません。私あ何も商賣ものの油を賣るわけぢやあねえがね。斯うやつて、あッくせッく荷車を押して歩いて方々懸だらけだ。砂つ埃を浴びて汗を垂らしながら、眞黒になつて、(今日は宜し)さ。まだ三町とは廻らねえで、此姿を見せられちやあ、遣り切れねえ。え、お澄さん何うだね。何だつておお前、此暑いのに立つてちやあ身體の毒だぜ。生命が物種だ、お大事になさいまし、」と笠の中から淺黒い顔で覗いて、莞爾ともせずわざと眞面目にいふ。何時の間にか、其時刻で、近所だから早廻の油屋。上野から落ちて來た彰義隊の槍の尖に生首を貫いて、白鉢巻から血が染むで居た旗本の若武者に、豆銀一つ貫つて鐵砲玉をうんと買つたといふ、巣鴨で生抜の江戸兒だ。

女の默つてうつむいて居るのを、じろりと見て、呵々と笑つて、

「今日あ！

十一

有怎けるほどに、お澄危しと見て、岸破と晝寢から起きたる女房、麻襦袢の袖なし朽葉色なるを素膚に被なし、襟をば合はさず、乳の下に紐を結び、白木綿の腰卷の膝切なる、色の同じきを絡ひて、故と兜は着ざりける。縮れつ毛の亂髪、大童で、落板を蹈跨ぎ、油壺を提げて、勝手口に突立上り、寄せたわ！　敵を、物見の構で、

「やッかんでるよ、不可好かない。お澄さん、打遣つて置きな。若いものの癖に見ともない、お前さんもう女房を貰つたぢやあないか。何をしてるのさ、日が永いたつてお世帶持だ。かう、働がありや、そろ〳〵出來る時分ぢやあないか、小兒は何うしたよ。」と名告を上げる。物々しやと取つて返して、

「何。小兒だ。餓鬼なんざあな、精靈棚を打毀すと幾千も四辻にまごついて居るもんだ。人をつけ、此暑いのに蚊帳は狹しよ、眞の事たが、此方へ寄れともいあしねえ。」といひながら、じりじりと寄つて、油壺を引手繰り、

「大したことは申しません。油こそあ賣つて働くけれど、床なんざ稼ぎませんッさ。素見アお止しよ、夜露が毒だ、と謂はあ、お頼ん申しますぜ。」

「手鍋提げたり水仕業さ、此方あ上手だ。」と、手桶を取つた、も一ッ水のあるのを擡げて見て、

「どんづまりやあこんなものだ。」と叩き着けるやうに獨言をして、突掛穿で路地へ出る。

「お氣の毒さまでございますよ。皆が左樣にお風説を申して居ります。」

「可いから溢さねえやうに板の間へ置いといとくれ。」

「知つてらい！」

「あばよだ。ねえ、お澄さん。」と、釣瓶に縋つて見返つた。

立端を失つて居た女は、これを汐に、所在のない笑顔をして、俯向きながら棟續の廂の下を、戸口、水口、すれ〳〵に通つて行く。釣瓶はぎり〳〵と上つた。

「ですがね、おかみさん、人情と申しますものは＝起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな＝」と口吟み、春はづれに、油屋の蚊帳が狹い、といつたのを難じながら、天理教の女房が戸口から覗く。油屋は路地から出ようとする。入違ひに、切髪の、色の黄な、黑々と齒を染めた、目じりの落ちた、瞳のきよと〳〵した、煙草入の銀鎖を見せて前帶に結んだ、腰の邊へ轉ばない禁厭だといふ小な瓢箪を結び添へて、胸を寛げ、麻襦袢を襲ねて、紺の帷子の少し汚れたのを裾短に着て、澁

色の足を見せ、黑塗の日和下駄を穿いた、六十ばかりの干乾びた婆さんが竹の柄の蝙蝠傘を引摑むで、眞直に入つて來る。

渠等行違ひ、歩み合ひ、お澄と、油屋と、女房と、孰の影も動いた時、浦里の家の格子戸と竝んだ、路地から突當の窓、竹垣の低いのを隔てて二間ある二枚の障子を音立てず、ト細目に開けて、痩せた、細い顔を幽に出した。頰のあたり、眉、衣紋着、胸高に帶を占めた、威のある、凛とした婦人が坐つたまゝ、後姿のお澄を見て、ぢつと目を留め、瞳が流るゝやうに鋭く動いて、二人の女房を眺めた後、油屋を見送つて、件の婆さんを見迎へて、而して閉めた。

十二

「譯をいはないぢやあ氣が濟まんから話さう、實は其。」

革蒲團の上一杯に胡坐掻いて、床の間を背にした山北は、上着を脱いで網襦袢一ッで、彼のIsabellaを喫込んで、薄髯に火が着きさうなのを吻と吹いて、手が熱いから持直した。

「時さん、一本何うだ、旨いよ。私は何うも飲馴れん故か、オールドやパイレートは不可、こりや二十本入りで大した違ひは無いが、價の割にしちやあ旨いよ。匂は不可いといふ人もあるが、何うも淡泊で好い、何うだね。」

といつて、朱書で、眞向の、眼のぱつちりした、口許の緊まつた、男らしい、氣高いのを、斜めに煙草盆の緣へ立懸ける。

「左樣、」と手に取つて、Isabellaに目を留めて、

「馬尼剌といふのは何だらう、彼處だらう、道理や、正義は、何方にあつたつて構やしない、私は贔屓だから戰に負けさしたくはない。どれ、一本頂かう、女王樣、——遙に御健康を祝し奉ります、……戰爭にお勝ち遊ばしますやうに。」と、微笑みながら、火を點じて、泰かに長く呼吸を引いたが、口に手を當てて烟に咽せた。

「不可い？　何うした。」

「少し風邪氣だもんだから、」と咳いていふ、浦里は、ふらんねるの單衣を着て、白縮緬を卷き、鶸茶色の毛絲の靴下を穿いて居る、傍には蒲團を敷いたまゝ、引掛けて寢て居た毛布から拔けて出たまゝであるらしい。山北は莞爾として、

「煙草の女王樣が負けるのぢやあないか。君が咽せたのが讖を爲さなければ可い。」

「お負けになれば益々贔屓だ、落人におなんなすつたら皆がお舍藏ひ申上げる。」

「其氣でやりたまへ。」

「あゝ、難有う。」

「何も馬尼剌を振舞つて置いていふのではないが、實はね、」といひながら手巾で又額を拭いた。

「可いよ、何も譯を聞かないでも可い、丁ど十圓なら有合はすからお使ひなさい。」

「何うも濟まない。實に濟まないが、左樣してくれりやあ意外の幸福だ、私もね。」

「何、どうせ用立てるものを構やしない、好なやうにお使ひなさい。」

「それでも又餘計なことに使ふと思はれては惡い。時さんも知つてる通り、養家では私が丁ど三年間で、學校を出る積で、切つて嵌めた位しか貯蓄が無かつたのだ。三年目の學期が濟む翌日から、一升の米も私の手で買はんければならない始末になつて居た、處を去年一年、まるつきり病氣で寢たもんだから。」

「あゝ。」

「ものいりは倍になるし、今年の春から窮したので、此頃は全然拂いてしまつて、家賃は滯る、米は買はなければならんといふ始末で。」

「あゝ〳〵、」と時次郎は輕く頷いて居る。山北は横を向いて、上着を引寄せて、衣兜から扇を出して、はた〳〵と煽ぐと、網襦袢の咽喉を結へた淺黄の絲がふら〳〵とする。

「それから妻が病氣でなあ。」

「それは知らなかつた。」と、時次郎は膝を立てた。

十三

「二三日ぶら〳〵して居るが快くならないで、時々酷く苦むんだ。それで寶丹を買つて當がつけれど、中々治まらぬで、先刻も妻が云ふのさ、翌日お醫師様へでも參りませうかつて。」

「おゝ。」

「それから、行くが可いつていつた。」

浦里は莞爾して、

「おいでなさいましとも。」

山北はまた額を空ざまに拭いた。

「けれども、一圓だけ米屋へ吩咐けた、其を持つて來ても遣る金子の無い始末でなあ。醫師へ遣るたつて、これで診察料やら藥價やら、駿河臺だといふから車賃も要る。其當が何にも無いので、それでまあ、妻には祕して出て來たが、他に何處といつて考はない、唯君を便つて來たんだがな、如何にも言憎いから、今來る道で思付いて、葉書で賴まうと思つて書きかけると——見せるがね——鉛筆で書いた上へ、君、汗が落ちて、手で擦ると、皆兀げてしまつたではないか。書けやしない、で思切つて面と向つて打出した始末だ。好く肯いてくれた、當分まあ助かるといふもの

だ。」と後は獨言のやうにいつて、急々と兩手で、Isabella の包を取つて、馬尼剌煙草を一本拔いた。山北は、手巾も、扇も下に置いて、快ささうな顏色である。

時次郎は默つて、山北を瞶めて居たが、

「そりや困つたらうね、大したことはないのか。細君は何うしたの、暑さにでも中つたのか。」

「最初は何だ、南瓜を食つたんだ。養父は嫌だし、私はそんなに喰べやしない。翌日まで置くと腐るといふので、妻がね、種々考へたさ、其に好なもんだから、皆食つてしまつた、其が原因だ。」

といひかけて口許に、極めて平和な、溫厚な、着實な、深切な微笑を含むで、Isabella を吸つた。但其烟の立罩めた眉宇の間には、其容體を氣遣ふのであらう、一點の懸念の思ひ屈した金策も出來、暑さも忘れて安心した、安心の餘り氣脫がしたやうに恍惚となつて、烟に包まれた。時に浦里が不意に、

「細君はお瀧さんだつけ、」と、思ひ懸けず聞いたので、吃驚して白狀するやうな語氣で、

「瀧、」と誓ふが如く答へて Isabella を口から放した。膝頭から二筋の烟が脈々として亂れて立つ。

「二十一だつたね。」

「十二月生れだから年弱なんだ、」と、まじ〳〵としていふ。

「大層美しいよ。ねえ、」と、ものありげにいつた時、浦里は鈴のやうな目を睜つた。
「馬鹿をいひたまへ。」
「まつたくだ、お瀧さんは美しいよ。第一お國の方だから色が白い、髪が濃いねえ。」
「馬鹿をいひたまへ。」
「君は取中てたんだね、お瀧さんのやうなのは少ないよ。」
「馬鹿をいひたまへ、」と山北は口を結ぶ。
時次郎は稍前屈になつて、傾むいて、渠が網襦袢を見て又傍なる上着を見た。
「冬服を着て居るねえ。」
「むゝ。」
「これぢやお可哀相に細君が暑いだらう、それともお瀧さんは浴衣を着てるのか。」

十四

「何故、馬鹿をいひたまへ、何のこつた。」
時次郎は鶸茶色の靴下の爪先を抓みながら、俯向いて、毛絲の筋を引張り、
「左様さ、此暑いに、君がさうやつて冬服を着て居るから、細君も綿入を着て居るのだらうと思

ふから、」といひかけて俯向いたまゝ微笑する。
「詰らぬことを！　誰だつて皆浴衣を着るぢやないか。」
「それぢやあ細君は、お附合に着たくつても、冬物は一つも持つて居らんのだね。」
「肩掛もある、皆持つてるが、何故、何うした。」
「ふむ、其で君の細君は冬物を賣つて、そして君の夏服を拵へちやあ呉れないのか。」
「馬鹿ぢやないよ、二三枚賣飛ばしやあ米の一兩位わけなしぢやないか。家賃だつて左様さ、醫師に懸るたつて、何うするたつて、一時の凌は附くぢやないか。一寸また十文字に結へて出入する御用達もあらあね。此の日中汗水を垂らして狼狽へ廻る事はいりさうも無いもんだ。」
「其が打明けられれば可いけれど、養父の前もあるし、妻も心配をするからなあ。一體神經質で氣が小いもんだから、それでなくつてさい大抵樣子は知れる。何だつて貯金簿の高は知れてるから、もう無くなつた時分ぢやあありませんか、何うしますと言つては、養父に祕して、私が勉強をして居る机の向へ來ては左樣いふのさ。其度に胸を刺されるやうだけれど、大丈夫だ、心配をするなつて、いつて置く。勿論なあ、君のいふ通、妻も左樣いふよ。お困んなさるなら私の衣服でも、何でも賣りますツて。だが、二人ばかりぢやあない、養父も居ることだから、そんな事は

させられない、其で弱るんだ。むゝ、實際困るんだな。」

「左様か、成程そりや細君は深切に違ひないんだらうけれども、其ぢやあ頼母しくない。困るのが分つて居て、そして單身で心配をする君の心を察するなら、默つて賣るなり、曲げるなりしさうなもんだ。君のいふやうぢやあ、威かすといふもんだ。身を投げますといつて催促をするやうなもんだよ。詰らないことに苦勞をするのは止すさ、朋友の金子なんぞ借りたまふな。」と、投げたやうな物言である。

「私だつて、何も借りたくはない、けれども今いふやうな次第なんで、」

「いえ、朋達より先に、行つて細君に、相談なさいな、そんな時の相談對手だ。」

「其が今いふやうな譯なんだから、」

「打明けると心配をするといふのか。」

「非常な神經質なんで。」

「神經質だつたつて、細君は南瓜を澤山食べたつていふぢやあないか。そして鹽梅を惡くしたんだらう。醫師、駿河臺、診察料、車賃！　何そんなものが要るものか。南瓜に中つたんなら緣日の薄荷が相應だ。僕は厭だ、だからはじめつから唯用立てよう、譯は聞くまいつていつたのに、君が談をしたもんだから、僕は眞個だ、氣が變つた。南瓜を食つた跡始末なんか、そんな相談に

乘るのは厭だ。」

十五

「此間、此長屋に身を投げて死んだ婦人があるがね、まだ行方の知れない内に、何しろ、下締で跣足で、夜中に駈け出したもんだから、何か其前に亭主に責問はれて居たとかいふので、七人の子は爲すとも婦人に心を許すなといふのは此處だ、あの女房を御覽なさい、十三になる女の兒を頭に乳呑を交ぜて三人ある、近所中の譽者で、草刈に雇はれたり、車の後押を手傳つたり、小兒を負ひながら働いて、繼は當つて居ても、染形は兀げて居ても、汗臭いものは着せては置かない。

しがない消光をするものだから、茄子一ッ煮たからつても、亭主の皿にばかり盛つて、自分は鹽を振懸けて食べて居る、これを又見て居ては、咽喉に支へて食べられないから、二個のものは一ッ宛、一ッの物は半に分けて、（相濟まない）（何の飛だことを仰有います）と手を着いて挨拶をして取膳に向ふといふ、其程のものが何うだらう。亭主の判を盗出して、高利貸から金子を借りて、密通いてる男の小使に遣つた。これが又五ッばかりの年下ぢやあるまいか。貸方から責められて、亭主は覺の無いことだし、印があつて見れば言拔けはされないし、使道が分らぬから、といつて嚴しく詰られた。其場から逃出した。能くいつたものだ、婦人に心を許すなとは、こゝの

ことだと、私ン處へいッつけに來たものがある。それから私は考へてさういつた。それでも南瓜を食過ぎて噯をしてるよりは增だッて。」

山北の細君は正に其衝に中つて居る。夫婦は同體ださうであるから、渠も又詈られて居るに違ひない、此場合には堪へかねたか吹出した。

「何をいつてる！　はゝゝはゝ。」

「だつてさう思ふんだもの。笑ひごとおやあない、眞だ。私はさう思ふから譬にいつたんだ。繼子を苛めようが、男を欺して金子を奪らうが、人殺をしようが、賭博を打たうが、姦通をしようが、立膝で煙草を飲んでようが、卷帶で寢て居ようが、人に挨拶は出來なくッても、行儀作法は知らないでも、貞操は缺けて居ても、文が一ッ讀めないでも、經濟が下手であらうが、歌は詠めなからうが、洗濯は出來なからうが、淫亂であらうが、極端にいへば親不孝だつて構やしない。女として、南瓜を食過ぎて噯を出してるより遙かに上等だ、とさう思つたからいつた。こりや譬だぜ。其だのに、何だ、君の細君は譬を實際に行つてる婦人ぢやあないか。そして神經質だといふぢやないか。何かいふと二言目には、義理だの、人情だの、といふ人ぢやあないか、賢女ぢやあないか、心配をするぢやあないか、親孝行だらう、美しからう、浴衣を着てるだらう、腕車で駿河臺の醫師の處へ行つて、診察料を拂はうといふ貴女だ。そして大學生の細君だ、迫て理學士

の令夫人だ。困るなら衣服を賣りませうかつていふのだ、大抵貯金の無くなつたことを知つてるんだ。そして君は冬服を着てるだらう。葉書の上へ汗を流したらう、金子を借りようといふのだから、一圓だけ米を買はなきやならないといふぢやないか。家賃を拂はねばならないぢやあないか、そして南瓜で煩つてる細君を醫師へ遣らうといふのだもの、そんなのは御免だ。」といつた。

十六

爾時ふらんねるを着て毛絲の靴下を穿いた、身に惱のある浦里は、斜に俯向いてる耳朶に、何の故か、颯と紅を潮して激した。

却つて山北は穩かに宥めるが如く、

「まあ、可いから、可いから、そんなことをいはんで用立ててくれないか。全く困るから。其に一度快く承諾して、安心さして置いて、そんなことといふのは殘酷だ、ね、今度は一番肯分けてくれないか。」

「だから譯を聞くまいといつたものを、那なことを聞かせるから厭になつた。もう、厭だよ。厭なことを我慢すると何時までも心持が惡いもの、假名の字を一ッ見てもふッと氣に觸ると、七日でも寢て居たいんです。腹が立つたり、癪にさはつたり、泣きたかつたり、死たかつたり、種々

な思をしなければならないもの、厭だ。もう厭ッてッたら厭です。」
「そりや時さん君の病だ。」と、柔和の面色で時次郎を諭した。
「病、病でせう。皆が寄つて集つて長屋に居られないやうにして、明けさしてしまつたけれど、私は其繼母が好だつた。引摺廻したり、撲つたり、捻つたり、小指の先で目の球を突いたり、三度に一度食物を當がはないで、膳の縁へ膝付寄つて來るのを蹴飛ばして置いて、いきりの立つ飯で刺身を食べて居た。其だのに（泣くのは誰だ、何處の兒だ、空腹さうな泣聲だ、賽の河原ぢやあ、如彼いふ聲が聞えるさうだ）なんて、聞えよがしにあてッこする、隣の前へ負つて行つちや、ねん〳〵よ、ねん〳〵よッて、詈るものが根氣負して寢靜まつて默つてしまふまで、子守唄を唄つて居た。あの女は大好だつた。鬼だ、蛇だと皆がさういふ。鬼でも蛇でも贔屓だつた。其こそ金子も遣りたかつた、立派な衣服を着せたかつた、馬車に乘せて見たかつた、傍へ置いてもやりたかつた。けれども、矮小で、色の青い、首の窄んだ、眼の引込んだ、大人の草履を引摺つて、苦しさうに呼吸を吐いて、よた〳〵と、歩行いちやあ、上眼づかひで人の顏を見る、塵塚を搔探して鬼殼燒の皮をしやぶつて居た、其繼子は、皆が蔭になり、日向になり、握飯を持たしたり、飴ン棒を袂へ入れたり、撫でたり、擦つたりした、けれども私は見るのが癪に障つた、厭な氣持がした、憎らしかつた、踏潰してやりたかつた。君は忠臣、孝子、貞女、烈婦、そんな話が好だ

らう、私は、毒婦、畜生、惡魔、そんなものの話が好だ。
私は門へ來る物貰に錢をやる。けれども、些少も憐とも、不便とも可哀相とも思ふんぢやあない。打遣つといて物もいはないのに、其處にあるものを盜むで行く働もなくッて、ぶッ〳〵泣いてるのが耳に觸つて蒼蠅いからだよ。
私は君のいふことを肯かない、だつて、君が憎いんぢやあない。察しないんぢやあない。たゞ厭だから……厭だ。」
いひたい三昧口を極めた亂言を、眉も動かさず默つて聞き濟ました山北は、扇を疊むと下に置いて、落着いて、膝に手をついて、
「時さん、又……始まつたね。」
面を正して屹となつて落着いて言つた。此時、大學生の風采は、其額に手巾を當てて、「妻が」をいふ時の如き風采ではなかつた。

十七

「可いとも、私は何とでもせう。其金子は借りたくないが、今言出したのを借りないで歸つては、詰り君の言分を立てるといふものだ。言分は立てても可い。條道の通つたことなら立てても可い

が、そんな無理ばかり通して居ては、君の爲にならんのだ。今君は何も恐いものがなからう、私のやうな働きのないものでも、意見、じみたことをいはなければ、起きろとも、寢ろともいふものはないぢやあないか。君はあの時のことを忘れたか、」といつて山北は默つてぢつと見た。時次郎は何にも言はず足を屈めて靴下の美い裏を視めて居る。

「君の父上さんが亡なんなさる時、枕頭で、孔子の聖像の前で、二人で助合はうといふ約束をしたぢやあないか。何も其を言立てにして、力になつて貰はうといふのぢやあない。だから唯の一度も金策なぞいつたことはないよ。既に其を恩に被せて、金を貸せか、なぞと思はれて、賤まれては殘念だと思ふから、路でもいくら引返さうとしたか知れない。

小兒の中からなかよくして居て、君が年下だからといふ譯ではないが、君が可愛くつてならないのだ。さつきから見て居ると、君は顏の色も惡い、病氣といふのは氣病だらう。お互に心も知合つてる中なんだから、別に何にもいふことはない。兎も角も金子を貸したまへ。持つて歸つて其足で直ぐ又返しに來るまでも、今君のいふ通りにして、我儘をして居るのを見ては、私は不安でならないから。可い。……決して南瓜にあたつた妻を醫師の處へ遣る費用にはしない、腕車代には使はない、診察料も拂ひはしない、其まゝで返すから、兎も角も渡して、少し後で考へて呉れないか、何うだ。」

「厭です、」といつた聲は稍震へて居る、時次郎の手を取つて、

「はゝあ、今度は病氣が重いやうだ。可いさ、それぢやあ、まあ駄々をこねて居るさ。癖だ。何うも斯う癇が高ぶつては手が着けられない。こんな時は私の顏を見て居るのも厭だらう。可いよ、君の病だから仕樣がない。何も私は心持を惡くはせん。何んなに拗ねられたつて可愛いものは可愛いんだ。ぢやあ歸るから靜かにして寢て居たまへ。しやうのない男だな、」と山北は底意なく微笑むで、斯ういつてる內に上着も着た、一個々々釦も掛けた、網襦袢の紐の結目も緊直した、扇と手巾とを少しく胸を反らしながら衣兜に納れて、坐り直つて、件の Isabella の包を取らうとして、ふと見ると、時次郎は手を掛けて面を向け、繪をぢつと見て押へて居た。心なく取りもしないで、

「ぢやあ失敬する。」といつて、手を添へる。

「あゝ、」といつて頷いて顏を上げた時、浦里は其の手を放した。

其を取つて、手に持ちながら、緣側に出て背向に靴を穿かうとして屈む。

「山北。」

「何だ。」

「煙草は入らないから其上包をくれないか。」

「これか、」といつて其まゝ押して寄越した。春の高い洋服の姿は、ステッキをぐい、と斜めに脇ばさむで、庭に立つて、大跨に蹈むで出た。

十八

「何處だよ、何處がさ、何うしたといふのだよ。」と、路地内三軒目の上框に腰を懸けて、うろうろ戸外を眴すのは先刻の切髪の婆さんで。家主の阿禮が母親に當る。何といふ名か不知、其の聲の大さといつたらない。路地口でものを言ふと奥の突當りの藪の中まで聞えたもので、差配は區役所からのお達しの受渡、貸長屋の取次をする位に留まつて、あとは皆家主直接掛合になつてるので、三十日が近いから店賃の取立てに來たのであらう。何時も毎月、此二三日の間に屹と婆さんの聲が聞える。

「何、何處だつて、何處だつて、取立てていふまでもござりませんさ。まあ、其の追々お目に懸ける事にいたしませうかね。」と、胡坐かいて居たのが、むくと起きて、素裸の上へ筒袖を被つて下腹のあたりで搔合せながら、寢惚眼で其邊等へ突掛るやら、よろ〳〵と怠けた體で、開放した水口から、青い天鵞絨の緒のすがつた、指先の塗が兀げて凹むで居る女下駄を爪さぐりで穿いて出た。小造だけれども身の緊つた、天窓の兀上つた四十ばかりの男。辰さん〳〵と呼ばれて極めて氣の若い、此邊に喧嘩だといふと、前か、後か、眞中か。屹度此男の交つて居ないといふ事はない。遊人肌な植木屋で、上さんは例の天理教の、天火、野鐵砲、年代記の講釋をする、其の口ぶりの寛々として落着いて居るほど、氣早な辰さんは、口早でものいひの荒いのであるが、框に居坐られて晝寢を起された上に、四五ヶ月滯つた店賃の催促をされたので、些中ッ腹。今勝手から出ると杓飲といふので、柄を短に取つて柄杓を鼻頭へ覆被せると、ゴッ〳〵と咽喉を通して邪險に投出すと、えゝ！と言つて、平手で、横ざまに股を打つて、水だらけにした口を日向へ向けてふつと一ッ呼吸を吐いた。

辰さんは卷舌で、

「物は試だ、お前、まあ一口此水を飲むで見ねえ、えい、おい、こりやね、總井戸の水だが、種種な匂がするぜ。第一雀の匂だ、巣を拵へてるからね、毎年のこつたから是りや可いや。蚯蚓の匂、此奴あ可恐からう。溝の匂、それから襤褸の匂だ。や、いろんなのが交つた中へ、お前、御丁寧に孑孑の殼が繋つて出ようといふのだ。今にこりや、笄蛭と、女の髪が泳ぎ出さうも知れねえよ、可恐い。なあ、お竹さん。」と、遙かに井戸端に居るのに聲を懸ける。

「本當ですよ、親方、皆が大變なもので生命を繋いで居るのさ。」

「何しろ一昨々年井戸替をしたッ切雀のお宿は此處よ。此奴を頂くもんだから時節柄ではあり、

後から〳〵流れ出る汗が、何のこたない五色の匂がしようといふものだ。長屋中皆五色の呼吸さ。こゝで色の黒い奴、青い奴、黄色な奴ね、濁色に松脂色、種々だ。美しいなあお澄さんと突當の若旦那ばかりだ、何の事あねえ。」

「そりや店賃が滞らない故でございますッさ。」と、乳をだぶ〳〵とやつて、腹をむき出しに、お竹は井戸端で仰向いて釣瓶縄を引掛ける。

辰さんは苦笑して、

「違えねえ、此奴あ婆さん、づッとお氣に入ッたらうね。」

「何を、」と言つた切、づう〳〵と煙管を吹いて、俯向きさまに吸殻を土間に落した。眉を剃つた跡が少し脹れて、八の字形に額の方へ擴つて、齒を染めた口が大い。

十九

「何をは弱つたね、お竹さん、一向お通じなしだ。」と辰は向を見て片頬に笑む。

「何うせ分りつこなしさ。」

「洒落が分らなきあ、切めて理窟でも分れば可いけれど、え、本當に何うかしてくんねえ、串戯ぢやあねえ。人のもんぢやあなし、お前の長屋ぢやあねえか。店子が何十人として頂く水だ。兒

が生れりやあ赤飯を備へて、杉箸に水引を掛けて上げようといふ井戸ぢあねえか、第一、お前罰があたらね。」

「月番は誰だい、何處が月番だよ。」と婆さんは格子戸の際まで出て來る。

「月番かね。」

「今月は何處だつけか。」

「月番は植木屋の辰五郎。」

「誰だと、」

「辰さんさ、」

「足袋屋の。」

「いゝえ、手前で、」といつて呵々と笑つた、「はゝゝゝはゝ。」

婆さんは人が笑つたとも思はぬ狀で、

「其ぢやあ彼だよ、お前さんの役だ。長屋中集めて井戸替をしなせえ、例年の通、私家で半分持たう。」

「そして何でせう、矢張あの、三階總出で、男は褌、女は二布して、縄を引張らうといふんでせう。井戸屋がたつた二人だ。長屋中何の事あない、素裸で、いつかも私が尻と、源が額で、彼處

に居まさあ、あの、お竹さんの腹の大いのを引挾むで、一緒に仰向けに轉つた圖なんてえものありませんぜ。可うがす、何それも可うがす、和蘭陀へ出稼に行つた氣でやりますがね、婆さん一寸、え、おい、まあ、一寸來て、此井戸側の體裁といふものを御覽じろ、何も代を頂かうとは申しません。」と辰はつか〳〵と井戸の傍に寄つて、片手を井戸の緣に掛けながら振返つて、莞爾莞爾して、

「まあ、一寸おいでなさい、一寸來たまへッてこッた。」と言ひ懸けて憤氣になつた。

「本當に見ておくんなさいッてこッたよ。」

「何うしたといふんだ。」

婆さんは丁と煙管筒を眞直にさして、腰なる瓢簞をふら〳〵と搖がしながら、鼻の上を皺だらけにして眞白な光線の中を潛つて來た。

「何がさ、何うしたといふのだよ。」

「何うしたッたつて、追々お目に懸けますがね、」と、辰は井戸緣に掛けた手を脫して鳥居形の柱に掛けた。仰向いて暫時車を見て居たが、背を屈めて後退りにどんと一ッ打付かる、と柱はぐらぐらと傾いたが、一搖搖つて立直る途端に、汲上げてあつた釣瓶は車が廻つた拍子、向うざまに返つて、ざつといふ水の音。どむ〳〵〳〵と井戸側を打つて落ち込んで凄じい。此二三日、

長屋中にこれほどの響はなかつたので、向うも、突當も、其の隣も、竝んだ二軒も、內々に、人聲、もの音。

敢て此狼煙の上るのを合圖に、家主の婆を取圍めといふ軍略でもなかつたらしいが、店から透して見るのがあり、勝手で立上つた者もあり、格子戸から顏を出した者もあり、地內は一齊に景色ばむ。

急先鋒辰五郎は鼎を扛したといふ勢、

「え、家主さん、私が背でやつて此位だ。柱が尻ッこけになつて朽ちてるからね。一堪もありやしません。二百十日にやあ、西か、東か、何方かへ倒れまさあ。」

二十

「あなた、本當でございますよ。」と、早急の釣瓶騷に驚いて飛退いた井戸流で、ほッと呼吸をつくと、恁う言つて、婆さんの呆氣に取られた顏を視めた、女房の口振といふものは、氣の毒なやうでもあり、歎息したやうでもあり、面當がましくも聞えれば、お爲ごかしのやうでもある。

辰は仰向けに背へ打付かつたと同じ勢で、仰向きざまに井戸の緣に縋つた、頤を差出して、中を深く覗きながら、恰も無意識であるやうに、指の先で拶ると、青苔の生えた、雨露に朽ちた、

木地の分らない、ぼやけた井戸側は、ほろ〳〵と缺けて落ちて、また落ちて、木屑が水底へ落込むだ。

辰ははじめて氣が附いた如く裝つて、

「何うだい、こりや、まあ、此狀だぜ。」と拗身で木の合せ目に手を懸けて、ぐいと引くと、力も入らず、鐵の環の錆着いた境から、齒の拔けるやうに、ぽつかりと折れる。

「是だ、ほら、これだもの、こら、こら、」と言ひながら、大地へ叩き着けると、犇と潰れて、粉粉になつて、土の上へ散ばつた。飛々な木屑は、心が出て、色の白いのも哀なのを、辰は流眄に懸けて嘲つたやうに見て、肩を搖つた。

「何うだい此奴あ、來年は皆羽蟻になつて飛んぢまふぜ。まだね、こりや可うがす。何、朽木が蟲に化けるなんざ、驚かねえ。長屋中這麼事にや馴れッこなんで、度胸が据つてるからね、」と言つて背後を見返り、樣子を見に出た、門口水口の女どもの顏を見て、目皺を寄せて、ニッと笑ひ、向直つて、

「こゝに、それ、我慢の出來ねえつて言ふなあ、お竹さん、」

と呼懸けて、

「一件を、御隱居樣の御一覽を供へると好いや。お前一杯汲上げて打覆して、例物をお目に懸け

るとしなせえ。いえ、御隱居樣、何ね、大したことでもござりませんが、此通り、それ、井戸流が水腐となつて、處々……ぢやねえ、一面に穴が開いてませう。此方の井戸側が透間だらけだ。ねえ、可うがすかい、處で此處に打あける水が、底のねえやうにざあ〳〵井戸ン中へ筒拔なんで、また媽々衆といふものが、汚れたといふと、此處へ盥を持出しちやあ、大まかにやるんだから手が付けられねえ。藍の出た奴だの、お前樣、紅殼の剝げたのね、まだ〳〵小兒の尻を拭いた奴ね、申すも恐れ多いがごり〳〵絞上げちやあ濯ぎやあがる。いろんな水が筒拔けだから堪りますまい。其處に居るお竹大日樣なんざ、眞先に其の黃色い奴を洗はつしやる部だ。玉子のふは〳〵だと斷めりやア精分が附くけれど、嬰兒のだと思や、實際汚えことあ汚えさね、」

と辰は遠くの方へ唾を吐いた。

「おかみさん、お前、井戸端で洗濯物をしちやあ不可いぢやあないか。何處だつたつて、お前、」と家主の隱居はいつもに似ないで、上に裂けたやうな大な口の、鐵漿の美しいのを、開けたり、閉ぢたり。頰肉の落ちた凹むだ處をぶる〳〵とやつて、三角形に落入つた小な目を睜りながら、辰にまくしかけられて一言も言はず、腰なる、おまじなひの瓢簞を、震へる手先に弄んで、立場もなくつて悄げて居たのが、逆寄せをして取つて懸り。

「誰が井戸流で洗濯物をする奴があるもんか、フム、」と突放したやうに背を向いたのは、破損し

た井戸の、苔蒸し、雨に朽ち、水に腐つて、手を着けられぬありさまから、半ば其面を背けたのであつた。

二十一

ぬつと立ちはだかつて、二房大な乳の下へ手を入れて、身體の平均を取らうとして、其量重を支へて居た、井戸流の半裸體は、突込まれて躍起となつて、

「だッたつてお前様、此處へでも持出さなけりや、水はけは悪し、何處でも洗濯物あ出來やしませんやね、馬鹿々々しい。小兒の内あ誰だつて糞じが悪うございますよ。」

「道理だよ、いや、大日様御無理はねえ。皆小兒が大人になるのか。然うだ、小兒が大人になんだけれど、何も井戸流が腐るといふ法はあるめえ。え、婆さん、土管が酷えんだから流汁は皆ぶく〳〵湧出しまさ、此人數で、其こそ毎日五六杯つ盥をあけられた日にやあ、町内洪水だ。……番地の屋根で雨蛙が鳴きますよ、途方もねえ。」

「何を馬鹿なこと、」

とむつとした顔色。——一體炎天に筒袖一枚で、鳥追のやうなのを天窓に被り、裏の芋畠の草を下谷から毫りに來て、日一日いきれの中に蹲つて土をいぢくる。眼が眩むやうな暑さだから、

誰一人瞳を定めて其姿を認めるものもなく、茹つた晝寢から活返つて、まだ日の落ちない裏庭を恐る〳〵覗いて、フト氣が着いて、婆さんの身體は溶けてしまつたらうと思ふ頃、眞黑になつて畠の隅から顯れて、雨戸を閉めて物音もしない差配が處の縁側に腰を懸けると、極で、いつの間にか買つて置いた奴豆腐の、丼の中に堆いのに口をつけて、日向水で生暖いのも恐れず、醤油もつけないで鵜呑にして、てく〳〵と歸つて行く、豪いのが、何うしたことか、日向を切なさうに青い筋の八文字に脹れて見える、其の眉の跡をびく〳〵さして、小蔭へ入らうとして、片足を引くらかへした、腰を轉らす。瓢箪がはずむで動く。

「おつと危なし、氣を付けて貰はうぜ、そら、其の足許を御覽なさい。」

「まあ、」とばかりで半裸體は乳を搖つて笑つた。

婆さんは俯向いた横顔を、著しく頬を膨らしながら、泥塗になつた下駄を引き上げる、丁度流尻だが、水はけが悪いので、三日越の精げ水、白いのが青ずむで、濡れた地の黑い上に、じくじくと溢れて居る。隣の樹立で、此處は一夏日があたらぬから、乾いたことはあるまい。一ッ二ッづゝ埋込むだ小砂利がまばらで、下駄の齒跡が縱横についてる中に、腰障子に凭れかゝつて、山吹の枝が二條ばかり、これでも根があるから葉は蒼いが、沼に棄てられたのだと斷めて悄れて居る。こゝばかりは濡地へ木の葉が映つて、薄ら青い中に屎積を打つて、水が淀むで居るので。

「見なさい、それ、流汁の中に飯粒が泳いで居らあ、何處だと思ふんだ。お前、こりや突當の若旦那が住むでる家だぜ。高い家賃を出して在つしやるぢやあねえか。えゝ、おい、半月と滯つたことがあるかい。あんな旦那つたらありやしない、垣が破れてても、流が這麽でも、何とも仰有りあしないけれど、些少あ冥利といふものを考へるが可いね、何處にかお前、這麽にして打遣つとく奴があるもんか。ねえ、然うぢやあないか。」

「分つてるよ、」といつて婆さんは爪先の泥を拭ひ取つた、鼻紙の黑いのを撮むで棄てた。

二十二

「そ、そ、そ、それが不可え。チョッ不可えなあ。小汚えぢあねえか、誰が掃除をするんだ。ぢゞむだつて叱言を言つてる處へ鼻紙を棄てる奴もねえもんだ。そいつにまた水が染みると其處らへ擴がるぢやあねえか、氣を着けねえ。」

「分つたよ、おい、おい、」とむくれながら、泣く兒にやあ勝たれぬといふ樣子で、拾つて、手に撮むだまゝ下駄を穿直して力なげに立上る。

「分らねえでよ、此方樣のお勝手を汚して何うする。お庭が廣いから長屋中の小兒等皆御厄介になるね、玉蜀黍は引摺倒す、青い柿は叩き落す、草花は折ッぺしよる。好放題、お蔭樣で天保錢

は入らずに嘸々達大助りだけれども、お氣の毒な、庭あ散々だ。これがまた、親達が叱つたつて、睨んだつて、肯くもんぢやあねえ。羽目を脱して荒すから、申譯がねえんで、皆で垣根を拵へませうッて然ういつた、此垣はお前處で、去年の荒で打倒れたッ切、土の中へのめぢり込むで草がばう〳〵と生えてたまゝにして置くんだぜ。若旦那ア何、垣が出來ると、小兒の出入をするのが目障になる、其のまゝ押開いて置け、入口が一ッでないから、何處から來るか分らないので、些少も氣には懸らないッてお前、緣先で皆が水の打かけこをするのを知らぬ顏で、すや〳〵と寢たり、ぢつとして書を讀むで在つしやら、好い氣前ぢやあねえか。無花果の枝が折れたつて、何かこの方等が風で折つたやうに、長屋中喚いて歩いた、お前が持の時分とは譯が違ひますよ。第一其の鼻紙を何うするよ。串戲ぢやあねえ、いつまで撮むでたッて、小粒にやあ化けやしねえ、打遣つたら好からう。」と冷かな目色で流眄にかけてじろりと見た。同時に婆さんはきよと〳〵して、慌てて鼻紙を彈き棄てたが、見當を着けないで横を向いてたまゝ投げたので、隱れも去らず、隣の竹垣の梢に懸つて、絡附いて、ぶらりと下る。

「魂魄此土に留つてら、樣あ見やがれ、はゝゝゝゝはゝ。」

「何が樣あ見やがれだよ。」といつて半裸體は手を伸ばし、後ざまに件の竹垣を丁と打つて搖ぶる。と、魂魄は矮柏の葉の間を潛つて、ほろ〳〵と隣へ落ちた。ばた〳〵と一翼、ばつさりと葉蔭を

打つて、ケ、、、、ケと鷄が慌しく鳴く。
「や、また稼ぎに出懸けて居らあ、角のだらう。」
「然うですよ、」と半裸體は差覗く。
と垣根越に、小さな樫の樹の同じほどなのが竝んで植わつて居る。根から根を傳つて、五六枚落ちた古葉の下を突きながら、倒になつてコトリ〳〵と羽色をあからさまにして、悠々と行つたり、來たり、眞直に出ると、眞直に引いて、道筋を三角形に垣根の際を漁つて居る。
「お光さんが、お大事のものさ。」
「情夫ぢやあるめえな。」
「何を言つてるのさ、」と投げたやうに言つて、また、「コ、、、、コ、、、、」と掌を開けて差出していつた。
「其の手を食ふもんか水蟲だらけだあな。」
「可うございますよ、へむ、爺の癖に。」
「お前の亭主より三ッ少いぜ、何うだ、ものは相談だが一寸……。」
「お巫山戯でない、あれ、」といつて乳を押へて遁げる。

二十三

「そら、御覽なさい、皆が笑つてるぢやありませんか。あれさ、もう、おかみさんに言付けるよ。」
「お竹さん可いやね、鷄が鳴いたから放れますよ。」と向うの方から笑ひながら聲を懸けたものがある。
「人ウ蚰蜒、いや百足にしてやあがる。餘計なまた鷄なんぞ鳴くからだ、聲の惡さてッたらないぜ。此奴が時を造る圖てえものは、」といひ懸けて、辰は小首を傾けたが眞面目に向直つた。
「いや、しかし、これも家主さんの故だらう。本當に何うかしておくんなさい、這麼水を飲ましといちやあ濟まねえぢやあねえか。そりや、茄子を植ゑたうございますから此處を少々、あゝ可いよ、えゝ、鉢植を五六ぱい竝べたう存じますが、こゝん處を暫く。可いとも、と仰有る旦那だ。流汁の土管なんざ、私がね、半日の手間で、しッくひ叩にして金魚を浮ばせてお目に懸けらあ。けれども、お前ン家の仕打が氣にくはねえ。氣の毒だとも絲瓜とも思はねえで、好い氣になつて見物をするだらう。そいつが癪に障るから打遣つて置くのよ。また何時だ、此次だといつてちやあ限がねえ、今の間に手入をしなせえ、え、串戲ぢやあないぜ。」
「お婆さん、本當に困るんですよ、」と、半裸體も口を添へる。

「だつたつてお前、浦里さんぢやあ、何とも仰有りやあしないものを、」と婆さんは唾を飲みながら澁つて言ふ。

疊み懸けて、

「そゝ、それだあ、それだからだつて事よ。串戯ぢやあねえ。これが、何も仰有らなけりや、仰有らないで、猶のこと此方から氣を附けなけりやならない譯だ。何の言つたつてする氣ぢやねえんだらう。井戸替をしておくんなさい、流を直しておくんなさいッて、幾度言つたか知れやしないが、釘一本打附けちやあくれないぢやないか。此方人は家賃が滯つてるさ、家賃が滯るたつて、するほどの事あして置いて、さあ、とこゝで言ひなせえ。何も此方で口を利く事あねえ。同じ嚴く取立てるつたつて、皆が無理とは思はねえやうにして取立てるが可いやな、家主風を吹かして、人をへッた糞のやうに威張散らすばかりあ能ぢやああるめえ。」

「そりや道理だ。」と婆さんは、這麼に折れた事はないのである。

「道理でなくッてよ、道理なら早速直しなせえ、唯見て歸られやしめえぢやねえか。」

「井戸屋が、其の、此頃は忙いもんだから、」と便なげに侘しく言つた。

「フム」と鼻で笑つて、「お錢さへ出りや、繰越しても井戸屋はあなた樣へ參じますだ。工手間の出ねえ仕事なんぞ、誰がまた雇はれてするもんかな。お前、雇つても拂はねえだらう。」

「那樣事はないさ、」といつたが、もう立瀨もない、婆さんは頰邊を凹めて默つた。

「分つてる事さ、人の汗水を絞り上げた身上だ。いつまで持堪へて居らるゝもんか。もう沒落だよ、婆さん時節だねえ、」

と辰は井の柱にばつたり凭れて、懷中から手を出して、口をゆがめながら、首筋の汗を掌で擦つて、

「そりや皆薄々知つてるのさ、到底もお前ン家ぢや持切れやしねえんだ。お前、娘さんに然ういつて、見切時だぜ、すつぱりと人手に渡しなせえ。其の方が分別よ。あれ、また鳴かあ、こン畜生、厭な聲だぜ。」

鷄は今鳴いたのを忘れたやうに、悠然自若として歩行いて居る。

二十四

「それはもし、何だ、蚯蚓を食べさせると可うがすよ。」

辰は振向いて見ると、背後に立つたのは同じ程の年配の男で、色の生ッ白い、撫肩の、づんぐり肥つた、顏の柔和なのが、全裸でぬつと立つて笑つて居る。

「潮來をそゝりやしめえし、お前もね。」

「然やうさ、はゝゝゝ、」と大聲で罪もなく笑ひながら、ゆだ〳〵と斜めに歩き、肴屋が裏口、路地の左の方に、松の木が一本ある。其の下に置いてあつた、盥の前に踞んで、日向水の中から白い切を撮み上げたが、靜かにまた突込むで、片手で洗ひ始めた。此女房孝行な人は、誠に泰悠なもので、路地口から入つて洗濯をしに行く路すがら、わざと井戸端に寄つて蚯蚓を注意したのである。

盥を抱いて居睡でもしさうな、其の落着いた形を、辰は流眄に懸けて眉を顰めて居たが、何と思つたか、急に、

「待てよ、」といふので、威勢よく前へ屈むだ、辰は兩手をかけて、及腰に力を入れて、流板の眞中のを一枚ぐツと引いてまくりあげたが、思つたより脆くぽつかり、と取れたので、

「おや、」と、はずみぬけがして手を放した。泥塗れで、分厚な、重くなつてる朽ちた板は、横倒れになつて沈むやうになると、眞中へ龜裂が入つて土が飛んだ。

乾るやうな聲で、

「何うだい、こりや。」

「まあ、何うも〳〵、是だもの、」と半裸體は今めかしう眉を顰めて胸を抱く。引剝いだ板の下は、宛然手鞠をかゞつたやう、組違ひ、縺合つて、蚯蚓の太いのが一團、薄紫の濡れた色で、泥にも

塗れず蠢いて居た。

「此奴が其、泥を潛つて井戸ン中へ流れ込んぢやあ、二條三條づゝ、づらりと長屋中の手桶の底、水瓶の縁へ行渡るから堪らねえ。時々朝飯の湯氣の立つ茶碗の中から白い首を出したり、菜葉のお香物の間から赤い尻尾を現したりする、正體は是だい。え、お婆さん、驚くぢやあねえか。」

へッ〳〵といつて、辰はまた背を向いて唾を吐きざまに肩を搖る。

婆さんは咽喉をごッ〳〵と動かして、飲込み〳〵する痰も支へさうに、得もいはれぬ顏をして、

「何うして這麼だらう、」と呟くやうにいつた。

「何うしたッたつて、何も飯粒が化けた譯でもなし、黴に魂が入つた理窟でもねえよ。こりや皆お手當の惡い故で、家主さんだ、お前と娘さんとで拵へるわけだ。また少々手前ども、家賃の滯ります故もござりますんで、へゝゝ、」と擽ッたい笑を洩らして、半裸體と目を合せる。

「鷄に食べさせると可いよ、こりやお前、鷄が喜ぶものだよ。」と術なさうな顏色で、婆さんは自分で合點々々をする。

「來た、來た、源兵衛さん、何うだね、」と辰は大きな聲で背後を呼んだ。素裸で洗濯をして居た、褌の白い、肥つた男は、地藏眉に皺を寄せた、柔和な目付、眩さうに仰いで振向き、

「はゝゝゝ、いや、そりや然し全く食ひますよ。どれ〳〵、」と言つた時、向うざまに押して盥を

覆した。だぶりと流れて、さら〳〵と枝を打つた水溜の中へ、恰も蜻蛉を追ひながら駈込むで來た小兒が、前滑りに蹈辷つて轉んだが、天から降つたやうである。手を着いて、足を反して、頤を上げて、腹を浸して反つた、其形といふものが。

二十五

あまり唐突なので、居竝むだ者は皆呆氣に取られた。源はニヤ〳〵と笑つて、まだ盥から手を放し盡さず、中腰になつて振向いて、

「やあ、」といふ、眞黑な男の兒はツンのめつたまゝ、けろりとして居たが、急に肱を張つて、顏を上げると腹這の足太鼓で、「やあい〳〵〳〵、」と叫びながら泳ぎ始めると、飛汁がばちや〳〵と飛んだ。此時、白紙に墨の染むだやうな、重ッくるしい雨氣を持つた一團の雲が出て、半ば太陽を包むで、路地は一面にどんよりする。

鷄がまた高らかに鳴いた。

「あれ、だからそれ、蚯蚓だ、蚯蚓だ。」といひながら、ぼちや〳〵して、裸なのが、のッそりと、濡れた掌を突出して寄つて來たが、

「どれ〳〵、」と澄して屈み、重ねた手を惜氣もなく、件の蚯蚓の中へ差入れて、鼻の前へ掬ひ上

げると、掌で、凡そ四五十條も居ようといふのが、溢れて垂れ下るのがあり、畝つてるのがあり、解けて甲に掛るのがあつて、皆一齊に蠢いた。

「御馳走、御馳走、ほう、素ばらしいもんですぜ。白魚でございい、」と尻上りに言つて、一足退ると垣根越に鷄を呼んだ。

「ここ、こ、こ、こ、こ、そらしよ、駈けるな〳〵。此方あのろいぜ、ぢつとしてろよ、おい、來た。」

蚯蚓のかたまりを、地の上へ、路地の眞中、丁度一掴の雲の下へ、鷄の鼻前に叩き附ける、熟柿が潰れた、赤い絲を引いた、ぬら〳〵とした蟲は、又不殘動く。

「食はねえぜ、食はねえぜ、」と辰は柱越に聲を懸ける。

「ほんに、いや、をかしいな。」と源は爪先で突いて押遣ると、ハヤ這出して、件の水溜へずり込むのがある、鷄はけろりとして構ひ付けず。

「樣あ見ろ。」

「これは、いや赤い素麵の大盤振舞、大外れだ。」と少し焦れ加減で、此男は洗濯を濟した後なり、當分隙なんだから、わざ〳〵また一條指の先に掛けて押着ける。鷄は片翼を擴げて吹飛されたやうに二三尺地を離れて横なぐれに、ぎやつといつて去つた。

其形が可笑いので、井戸端の者、門に立つ者、框から覗いて居る者、聲を揃へ皆哄と笑つた。小兒は水溜で更に足拍子を打つて

「ワッ」といふ。ものの動搖した長屋中は、一齊に氣色立つた。辰は大いに勢に乘つた樣子で、

「へむ、お前ん家の這麼蚯蚓なんざ、鷄だつて食やしない。何うだ、婆さん、可恐いもんだらう、因果應報だ。」

「可笑いな、天罰覿面でがあせう。」と源はぬッとして居ていふ。

「何さ、あたじけ茄子とやらさ。」

「座ならびをいひたがらあ、何だ、つまらねえ、おたふくめ。」

「可いよ、」

「それ、そんな喧嘩は鷄だつて食べやしない。」

「違えねえ、」

「まつたくさ。」

「そこいらで和睦しちやあ何うだね。」

「はゝゝゝはゝ、」とつけたらしくお婆さんは仰山に笑つた。「那樣ものさね。」

「何が可笑いんだい、串戲ぢやあねえぜ、ほんとに、何うしておくんなさる。明日の、明後日の

てッちやあ、果がねえよ、いかに目が永えたつて、」と辰は、足のあたりへ雲の影が幻のやうに薄暗くさしたから空を仰いだ。雲は太陽の面を放れたが、形は先よりも大く擴くなつた。尤も氣懸な這麼雲でも出なければ、恁る暑さで、世の中は何うならうも知れないのである。

二十六

「風でも出さうだぜ、こりや、」と辰はあたりを眴したが、井戸の圍に立つて居る竹垣の、さゝらのやうになつて、透間だらけな、結目もばさ〳〵で、根の處が黑くなつて、傾きかゝつてゐるのに屹と目を着けると、

「二百十日が近いからな、皆がぶる〳〵もんだぜ。」

と言ひながら、飛懸つて兩手で向うざまに押した。中程から、垣は半分に裂けて、一煽煽つて倒れさうになつて、纔に傍に植つてる梅の木に凭れかゝるのを、しやにむに打つかると、ばさばさと倒れて離々になつた。辰の身體はぶるぶるらと動く。肩を怒らして、足踏をして、

「いまにどんと、來りや這麼ものだ。樣あ見やがれ。」

「何をするのだ、これ、何だ、これさ、何だ、お前は、」と婆さんは慌だしく井戸側を廻つて飛附

かうとしたが、凸凹の泥に踏返して前屈みになつて、井戸の縁に縋つて目を睜る。辰はさそくに飛退いて、路地を斜めに駈け出した。赤の丸に辰の字を白で染め抜いた印半纏の裾が、地へすれすれになつて、遙かに向うで屈むと思ふと、此處に立つて居る源が開放しの水口の敷居を引脱して、ぐいと拔いた。其まゝ片足を掛けて、半ほどから踏折つて、一ッ蹴た。手に殘つたのを提げて、あッといふ間に隣家の足袋屋が裏手の廂を、勢好く突いて上げる、途端に、辰の身體は後飛に退つて、煤か、砂か、ぱつと黄色な烟の立つた中から、廂は樋竹と一所にどつさりと落ちて、又に横はる、と又烟が立つた。搔潛つて軒下を傳ふと見る目も疾く、辰が後姿は斜めに其の隣家の格子戸に突當る。火事場の働も恁うであらう。あれ〳〵といふ間もなく格子戸はぱつたり内の方へ倒れ込むと、戸袋は眞黑な口を開けて外へ傾いて出た。一齊に人聲、物音。

「待ちなさい〳〵、婆さん、喚いたつて仕方がないやね、通力のある行者でなくつても、指の先で柱を壓しやあ、この長屋は皆打潰れつちまひますぜ、あの通りだ。」

と源が婆さんを押へながら振向いて指す時、板戸がばた〳〵と二三枚、縱横にまた倒れた。

「何の位打遣つて置いたんだか知らないけれど、見なさい、もう一寸當りや直ぐにばたりだ。柱あ弛んでるし、土臺石や傾いてる、樋竹は破れてるか、廂の線は切れてるね。屋根は漏る、疊は腐つてるわ、敷居は朽てるし、此まんまぢや雨風にくたばらないまでも、旱で干殺しにならう

といふものだね。え、もし、辰さんが身體へ當る處、あれ、また倒した。當る處が皆壞れまさ。鼠が騒いでも家鳴震動だ、堪つたわけのものぢやごわせん。いまに御覽なさい、這麼長屋は、田鼠が持上げると、宇宙に上つて、蝙蝠の羽に乘つて、飛ぢまひますぜ、可恐い。何も家賃が滯るからつて、理窟を言ふのぢやがあせんけれど、え、御隱居樣、默つて見て在つしやる分ぢやありますまい。あれ、あれ、まるで嵐だ。」と面白さうに眺めて居る。辰の働と言つたらない。横に縱に、背で、手足で、落ち懸る廂を潛り、倒れ懸る板戸を拂ひ、朽ち腐れた鴨居を踏むで、駈込み、走出す、人數の中、わつと騒ぎ立つ長屋の中を、砂煙を浴びて出沒する。

二十七

「あれさ、あれさ、まあ、腰が立つたよ、あれ！」

と戸の前、水口に人だかり。見透す、六疊の片隅に敷いてある、寢床の上に足を爪立てて、片手を開放した欞子窓に掛けながら、震へて居る、顏の色の蒼いのは、其の窓の外の綠の樹の陰が、疊に迄さして居る其の色が映つたばかりではない。髮が伸びて額に垂れ下つて、頤の細つた、瘠せて身體も小さくなつてる、是は此家の主人の弟で、年季奉公に行つて居たのであるが、三月ばかり以前から病氣で歸つて居る、若いのに、煩が烈しく、腰も立たないで寢て居たが、今辰が暴

れ廻つて、敷居や、板戸に當り散らし、廂と樋竹が脱れたと殆ど同時に、夫婦とも稼ぎに出た留守をして長病の病人が、あッ、といふ聲を立てたので、門口勝手口に立つてた連中が駈け附けると、水口から敷居へ掛つて、黄色蛇といふのであらう、旱り續の雨上りなどには時々此邊を徘徊する、時とすると、鴨居を傳つて鼠を狙ふといふ風説のあるのが、打壊の騒に驚いて、途に迷つたものと見え、首を擡げ、尾を閃めかして、波形に畝つて上るので、ソレ蛇がといふと、水溜に浸つてばちや〳〵を行つて居た、件の色の黑い男の兒は仕掛けで飛上るやうにむつくと、起きて駈け出して來て、いきなり尾の尖を摑まうとすると、摺り拔けたが、度を失ひ、盲蛇で這ひかゝる、と、きやつと言つて起きて窓から遁出さうとしたのである。

此間に、小兒は素裸で、土足で、水だらけの身體で、疊の上を蛇と一緒に通り拔けて、裏口から辷るやうに出て了つたのであつた。

「まあ、吃驚したよ、だがねえ、御覽なさいな、あれ、」

「松ちやん、腰が立つたぢやあないか。」

「ほんとだよ、驚いたでせうねえ、驚くわ、全くさ、病の神も驚いて遁出したんだよ。お前さん、今日から本復しますよ。」

「何が幸福になるか知れないもんだわ。」

「何が幸福と言やあ、何うした、家主の婆が見えなくなつたぜ。」と、ものの騒がしさに、手を留めて板戸を踏跨いで駈けて來た辰はあたりを眴していつた。

「遁げましたよ。突走つたでがすよ。はゝ、はゝ、いえね、私あものに動じませんから、皆さんのお騒ぎなさる内もちやんと氣を着けて知つてまさ。辰さんが打壊を行るのを見せつけて置いて、私が一理窟言つて遣りました。婆さん、何かロと目ばかりぱく〳〵して、急つてるのを捕へて居たでがあせう。何かハヤ少し蒼くなつて、唇が泡だらけだ、癲癇でも起しさうな容態だね。處へ、那の蛇騒ぎだ。お竹さんなんざ目の色を變へて、此家の御病人を案じて駈け着ける、私も手が弛むだ處で、婆さんは眞俯向けになつて這ふやうに駈け出しましたぜ。もう理に詰つて居るのだから、交番へ居けに行つたといふ風ぢやあごわせん、居たゝまらなくなつたもんだね。そのまた、白金巾かなんか、ハヤ短な奴を閃めかして、腰の瓢箪がぽか〳〵躍りながら、眞黑な蚊脛で、屁放り腰の一目散さ。路地口で跣足になつて、下駄を持つて内が可うがすぜ。」といつて源は笑ひ出した。

「いや、其位が可い、那麼奴は逆捩が一番だ。だつて、這麼家を貸しながら店賃も凄いやね、何の事はない、此方人等大勢で相馬の化物といふもんだ、へん、妖怪變化住居をして居ら。」

二十八

「併し、もう恁うなつちや、將門家も御運の末だが、善いにしろ、悪いにしろ、一時あ盛つたもんだ。婦人の腕にしちやあ凄いよなあ。」

「妙な引懸りですが、然う言や、女家主の容子は、心持、何處か瀧夜叉に肖て居ますぜ。私あお姫様を見た事あがあせんが、心持ですよ。あの顏の細い處、鼻筋の通つた處、目付の凄さといひ、腹の中に何があるか、底の知れないやうな口付ね、揉上が長くつて、髪の澤山な處、やけに仇つぽいかと思ふと、何處か人柄だ。でれ〳〵と色氣があるやうで、キリ〻としてさ、へ〻〻〻、堪りませんぜ。」とでつぷりした肩の中へ首を窘めて、ニヤリ。

「那様のが、皆蝦蟇の妖術で吸寄せられて、空壕の埋草にされたんですよ。源さんなんざ、肥つてるから一寸お目に留りさうだ、御用心なさいまし。」

「む〻、トいふので印を結ぶと、お前、骨と皮ばかりになるぜ。」と辰は引放した敷居を爪先で突いて居る。

「可恐い、いや私もね、恁う見えて、不心得に何でがす、一生の思出といふんで、男妾が其の望なんだけれど……」

「丁度可いやね、お前さんの恰幅なら、吃度、あの夜叉殿がお氣に入る。」

「いや、おかみさん、然う言やあ、先の亭主は酷く肥つて居たツていふぢやあないか。」

「目量も重いが、業も重いわ、尼さんのお小姓になるッたつて、夜叉の亭主に全くだわ、よくよくでなきや、誰がお前、」

「尤も天窓から蝮に呑まれる氣で懸つたもんだ。まるで金子が當なんだあな。だから見ねえ、夜叉殿が、蝦蟇の術で吸上げた、地券やら、株券やら、地所抵當物、あり金子が耳を揃へて一萬と何がしに、貸付けた證文まで卷上げてフイとなつた、それッ切、素裸さ。」

「那の位な腕で、また何だつて那様目に逢ひましたらう。」

「そりやね、向うだつて、表向那の婦人の養子になつて、相良の姓を名告らうといふ棄鉢だ。ね、何うだい、お互に婦人といやあ、」

「何うしたの。」

「少々狐の化けたのでも悪くねえ方だ。え〻、女ども、まあ默つて聞けい。あ〻、此奴あ五人男を持つたのだと思つて見ても、手足や胸の色が美しけりや、厭でねえて。一寸それ悪かあ無いやね。其だのに、那のお姫様は何うだ、瀧夜叉とばかりで名を聞いても悚然とすらあ。全く凄いからね。そして其の身體で、まあ、ありとあらゆるだ。いや、もう考へて見りや、よく那の白い肉

が醢のやうになつて崩れねえもんだ。何處を血が通つて活きてるだらう。手足の爪が眞黑にならねえのも、思つて見りや不思議なやうだ。隨分金子の爲にや火水の中へ入つたらうし、毒も呑んだらうが、舌も吸つたらう。嚙付きも爲たらうし、また蹴飛ばしもしたもんだ。口ばかりぢやあねえ、全くよ、那奴の爲にやあ首を縊つた野郎もありや、身を投げた婦人もあり、地獄へ墮ちた坊主も居りや、迷子になつた小兒も居ら。おつかねえ、那奴の指の先が一寸でも觸りや、野郎の身體、其處へ疵が出來ようといふもんだ。よくまあ、血を吸つた唇や、引捻つて膏を絞り上げた兩脚や、男に觸つた身體中へ、其さ、血だの膏の跡が汚點に殘らねえもんだ、と其の氣で、あの美しい顏を見ねえ。」

二十九

「妙にまた、恁う蝦蟇の油で束ね上げたやうに、生ッ白い、透通るやうで、濁つた工合、柔かさうで石鹼に似て居ら、薄氣味の惡い、毒々しい。那の又いつも少し胸を擴げて、細長い首筋を現してる、それ、幽に乳の膨むだのを見せた、ふッくりした上へ、極で、變だな、始終脈を打つた青い筋が、恁う斜に畝つてる鹽梅式てえもなあ、何の相だらう、おらあ、淫亂、めちやくちやだと思ふが、滅多にやあねえよ。容易ぢやあないぜ。心からかあ知らねえが、突き破ると血ぢやあ

ねえ、毒蟲の腸見たやうなのが流れて出さうだ。口もよ、底氣味が惡いやな、あれが、何處へでも吸附かうもんなら、身體中の血を干しつちまはれるんだと思ふと、身震がするぜ。それで、四百四病何でもといふ大變な病持ちだ。いつも差込とりやうまちすが持病だから、下腹へ鐵の環を嵌めてるとよ。肺の氣もあるッさ。顏の色の好くねえのは、それだらう。見ねえ、呼吸が苦しいかして、いつでも胸ン處をびく〳〵さしてら。衣服の上からでも動悸が見えようといふ弱り方だ。だから、皆、早く死さうなもんだとも言はねえで、不思議に活きてる、業が滅しないんだ、と然ういふぜ。

それで食物が亂暴だから、何時かも食傷で九死一生、二日腹を干した處へ、唐がらしを立續けて食つて鼻血を出したッてえ奴だ。それでも死なかつた酷え婦人よ。何うして、目が美しいたつて、涼しいたつて、じろりと見られて見ねえ、那の身體で、那の手足で、那の口で、此の目の年增が、己といふものの顏を見るのだと思ふと震へッちまふぜ。

此間も、それ、那の千公、十一になつた兒が、何のお前、たか〳〵知つてたつて、皆が夜叉だ、鬼だつていふことを聞いてる位だらうのに、お姫樣、何と御意に叶つたか、(おや)といつて天窓をお撫で遊ばすと、首を縮めて窘むだぜ。あわア喰つて遁げ出して、(家主さんの、御新造さんに、天窓を撫でられたら冷かつた)ッて言つたッさ、何も掌に斑猫を煉潰した奴を塗り込んでもあ

るまいけれど、此處が爭はれねえもんだッて事よ。
私あ恁う何處へ罷出たからッて、何も、別條はねえ、植木屋の辰五郎だ、辰さんだ、辰公、辰州、辰印、それ何でも通らあ。ね、けれども那奴が持つてる長屋に住むでるてえと、妙に人中が幅ッたい。變に氣がさして肩身が狹いや。
何も四月滯つたからッて、そりや融通だから仔細はないさ。家賃を出して借りてるんだ。此方あお客樣だ、向うは商賣さ。けれども稅を出して住んでッたつて支那の國に住むでりや支那さ、藻に住む蟲のわれからとやらだ。瀧夜叉が家に店借をして居りや、失禮ながら皆化物だね。化物も此方等アずつと御前立の雜兵で、蝙蝠になつてばッと飛ぶ部だ、ほんの口繪のあしらひさ。豪傑が退治に踏込むと、陰でケラ〳〵と笑つたり、キチ〳〵と嘯いたり、燒酎火の聲色を行はうといふもんだ。たまに目を剝いて、蜘蛛の巢、燕の糞、鼠の屎だね、小汚え中から顏を顯して舌でも出すか、唯もうぐッと一睨で、(可怪やな)とものたまはず、引込の悪い役廻りさ。手前、龍宮に住むで居りますと言つて見ねえ、人は皆水ン中に居るものだと思ふよ、同じ事だ。瀧夜叉が長屋に居るといやあ、餘り幅の利くもんぢやあねえ。可いかね、其の長屋に居るさへ心持が悪いといふのに、お前、何だつて、ちかづけに彼のそれ、えゝと蝦蟇の膏で束ね上げた、生白い、濁つた、石鹼肌と抱かれて寢ようといふ度胸だもの、始めッから持つて遁げの、フイ、を極める目算

にやあ違ひなかつたらうよ。」

三十

「はじめは、其の色香に迷つた奴も、あれがさ、男はたらす、膏は絞る、高利は貸す、米は下る、株は上るで、鰻昇、幾歳の時から殺生を仕始めやがつたか知れねえが、式の如く取込むで、もう男が厄だといふ二十五の年から、身體を賣るなあ手を引いた。下谷に土藏附の家を買つて、相良禮、と門札を打つてからは、皆あれか、といふので、殺生石ぢやあねえが家の周圍二三町が處は往來の者が除けた位、傍へ寄らうもんなら毒氣に觸れて、歸ると大熱よ。那云ふ又のはうづな奴あねえぜ、見事に門札を打つたから驚く譯だね。人を引懸けようッて色を賣る奴あ、陰に居て、遠いがものの香といふのが山さ、誰がさお前、私で候と名を打つた奴に、指をさす奴があるもんか。だからもう奴も賣らねえ氣で、高利ばかり貸出しやがつたが、五六年續けてる內に到頭あれまでに仕上げたんだ。白首の癖に氣位が豪いやな。夜會結とかいふ眞中で一つひねつた奴で、白衿だ。お太鼓結の、背負上げで、毛だらけの爪皮の掛つた駒下駄がつきものさ。金々としてぴかつかせる、金時計、金鎖、指環を五つ迄嵌めた圖なんてえものあねえ。づッと立上つて御臺所とでも謂はれる氣だらう、希代な道樂よ。」

「何だつていふぢやあごわせんか、一時馬車に乘つて歩行いたツていひますぜ。」
「何まさか。」
「辰さん、そりや本當だつさ。でも始終は何うだか分らないけれど、幾らとか養育院へ寄附した時にやあ、馬車でもつて乘出したつて、本當の談話なんですよ。ね、お竹さん、それ誰だツけか、見たツて言つたのは。」
「此家の何さ、ツイそれ此人さ、」と言つて顏を向ける、齊しく目を注いだ、先刻黄色蛇に驚いて腰を立つた病人ば、小窓を背に、范乎と踞むで居た、其の顏の色は未だ蒼い。
辰は頷いて、
「いや、然う言やあ然うかも知れねえ、何考へて見りや、其位な事あ爲兼ねめえよ、餘り可笑いから私あむづかしいのを覺えてまさ、印度だか何だか、イサベロといふ語だ。こりや莨の名だがね、卷莨よ。うむ、其の何だ、其の莨の包紙に、半分の像を書いてあるがね、西洋ぢやあこれに限らず何にでもすてきな代物で、上下大人氣な女の肖顏を書くんだ。其奴を可羨がりやがつて、お姫樣、お前、さんらいすぢやあねえが、外の莨屋へ資本を卸して、同じやうなんで、まやかしものの和製のをば拵へさした。其の紙に、あれだ、汝が像を、寫眞で入れさして矢張横文字でな、さがらと書いて賣らしたとよ。そりやお前眞向での、束髪だ。洋服を着て、胸に恁う南京玉のお

珠數のやうなものを二重にぶらさげた寫眞だぜ。此奴あ賣れなかつたさうよ。跡仕込は爲なかつたツていふが、のツけにうんと拵へたんだから何うかすると今でも賣つてる。眞物より包の色がもう些と鮮明で紅いんだ。其の度根性だもの、成程馬車にも乘りかねなかつたらう、何うして物凄い見識だ。時代に行くと、緋の袴をお召し遊ばして、賤の漢、と、野郎を瞰下ろさうといふもんだ。其で名札を打つてからは、前齒のすいた、眼の細い、百萬兩分限の旦那だツて、傍あたりへ寄せ附けるもんぢやあねえ、又それ此方はな、天窓を撫でられると、小兒さへ悚然とするてえ位だもの。」

三十一

「辰さん、抱こを爲ようかと來りや、本當の事た、私あ長崎から先へ、其の日の中に駈落する。蝦蟇の膏で揑ち上げた、其れ生白い、濁つた、柔な、石鹼膚で、掌へ斑猫を塗り込んでる夜叉だから堪るめえぢやあねえか。長屋に住んでてさへ、肩幅が狹い譯だに、何うだ、あの肥滿の紳士は、相良如友と名告つて、那奴の亭主になつたんだぜ、亭主といや、お前、何も斷るにやああたらねえが、餘りだから私あ事を分けて言ふがね。
一所に成るもんだぜ。

いえさ、那の手と、那の足と、それ、何人しめ殺したか吸殺したか知れねえ奴の、那の又白い胸に青筋の畝つてるのと、……何うだね。

肥滿の紳士あ戸籍面をごまかして、お前、女房と、十六になる娘と、お負けに中年増の凄い其の妾とがあるのを祕して養子に入つたんだッていふが、然うだらう。のつけから金子を狙つて居たもんだ。那樣事知れてるのに、だから私あ天道樣お見通しだつていふ事さ。夜叉殿あ力負けをして、(お禮といやあ皆が悚毛を震ふほどのもんだ、誰がまた自分を欺かつて惡巧なんかするもんか。一寸でも手を觸りや、男の身體其處から毒が廻ッて一時とは辛抱が出來ない、それほどのものに指一本指や爲ない、)とづッと打上つて、お姫樣、高を括つて、侮つて、相良の姓を亭主めに名告らせたらう。二月とは措かねえで根こそぎ引攫つて、おさらば、となりやあがつた。腕あ好いが、然し思切つた事を爲たもんだよ。金貨を撮むで出されたつて、癩病の手からぢやあ恐れるに、それ處の事ぢやあねえぜ。私あそれよりか冥土へ金剛石を拾ひに行く方が却て爲易いと思ふんだね、可恐い奴もあつたもんだ。」

「それでよくまあ默つたぢやあごわせんか。夜叉殿が腕で、其のまゝ取られじまひは、些と分りませんぜ。え、何うでがすえ。」

「お前もね、家の周圍へは人が寄附かねえまでに身體を汚して拵へ上げた身代だもの、口惜さも

口惜からうし、其の、血が走るやうなあの氣象だ。自分の身體を痛めたが憎いとつて、お前、虱を捕へたのに、針を刺して、針の尖で、一日に七遍づゝ、七所突き刺して、三七二十一日目に烘り殺したといふ譬へやうのねえんだ。よく今まで活きてると思ふんだね、甚麽目に逢つたか、甚麽思ひをしたか、何を爲やあがつたか知れたもんぢやあねえ。いえ、此方等如きに分るやうな手ぬるい働きやうをするもんか。唯ね、短刀を懷に入れて新橋へ駈け着けると、汽車が出た、烟を見て、軌道を傳つて、お前、五六町追かけたは可いが、血を吐いて倒れたッさ。其の翌日だといふのに、何を何うした譯か、本郷の通をお前、持遁げをした亭主と相乘で、切通の方へ行つたのを見た者があるッて事だ。何う考へたッて理窟あ分らねえ。亭主が縛られたといふかと思ふと、今度あ反對に那奴が括られたといふ。拘留所から遁出したといふと、半年も行方知れねえ。然うするとお前、新聞に湯治さきから廣告が出るといふものだ。其の内に亭主が三階家を兩國向うに建てた。棟上といふ日に女房と娘と三人一時にまた捕縛だ。親子が一ッ繩だッて風説をするかと思ふと、夜叉が巢鴨の瘋癲病院へ入れられたといふ。病の爲か、啞になつたさうだッて、……話を聞く内に、……看護婦が二人、何の嫌疑やら、一人は捕つて、一人は毒を飲むで死んだッてよ。瀧夜叉は行方知れず。」

三十二

「聞いても身震が出るなあ、何うだい、尋常事ぢやあねえ。新網へ入つて那奴が乞食に賣つてたんだ。お前、五人と六人夜晝交る〴〵出入して買はあ。色の眞蒼なのが、根太板の上へがツくり仰向けに枕をしたまゝ、容色で賣るのに、髮が懸つちやあ惡いといふので、蓬のやうなのを片手でぐツと握り詰めたまゝ、物凄いほど蒼白い顏を見せて身動もしないで居たとよ。其處へ、お前、行合せた泊の乞食が一人、舊は上州の絲商人で、立派に暮してたのが此女に係つて、女房は去る、田地は賣る、家はなくなる時分に蹴出されたのが、三年めで尋ね當てた。で枕を竝べながら小刀を握り詰めて居たんだ。寢返をしちやあ、今こそと思ふ毎に、お前、起直も出來ない女が、顏を見ちやあ莞爾々々と笑つて見せるので到頭曉方まで手を懸ける事がならねえで、婦人の傍で、汝一人、仰向けに寢て居る、乞食の慰物になつてる、昔の情婦が、痩せ衰へて、目ばかり、ぱつちりとあいた、涼い、鋭いのに瞻られながら、首を縊つて下つたといはあ。お上から手が入つて、是も死だやうになつて、處々衣服を懸けて居る、生身な奴の髮を摑むで引起したのが阿禮だ、瀧夜叉だ、其のお姫樣だつたんだ。枕の下、肩の下にや、銀貨やら、紙幣やら、銅貨も取交ぜて、何の位とかあつたといはあ。其後銀座の裏の、何とかいふ辯護人がとけえ、杖に縋つた、婦乞食

の美しいのが來て、いきなり事務所のていぶるの上へ金を積上げたといふぜ。

二三日過ぎると、大丸髷で、肩掛にくるまつたのが、二人曳で、下谷、丸の内と駈け廻つた。是が其れお禮の方だ。直ぐまた亭主の肥滿が家あ珠數繋、何が何うしたといふんだか、肥滿とね、其の前の、それ、祕して養子になつた女房と、娘、伯父が二人、乳母だつたといふ婆が一人、醫師が一人、とそれだけ、丁度一緒にあげられてから、今ぢやあ半歲になるが、到頭殘らず赤い衣服だ。

それで究まる處、金子も、地所も、何にも取返しは出來ずさ。殘つたのは此處だね。此……番地の地所と、家だけ。今居る家は彼れが借りてるので、此處から取上げる店賃で、母親とあれと二人、住んで、食つて、着て居ようといふもんだ。それだつて、此通り、手が觸りや、廂が落ちる、板戸が倒れる、敷居が脫れる、格子戸が倒つて、戸袋が破れる、といふ情ない有樣さ。私あ知つてるから、お前達と言ひ合はせて遣ツつけたんだが、這麼に手嚴しく遣つたが、裂けたつて疊一枚表換へが出來るんぢやあねえ。何うだい此狀は。」といふ、井戸側は碎けて居る、井戸流は剝がれて居る、廂、樋竹、板戸、敷居、縱橫に入亂れて、空は曇つて來た。路地は一面に陰々として、覆被さつたやうな、黑い、どんよりした、蔓つた雲一團、じり〳〵燒けるやうな蒼空に日が斜で、蚯蚓は這つて居る、鷄は歩いて居る。

「恁うして此方人等で手入をしつちまへば、それを言種に御一統が又三月や、四月、店賃を拂はなくツても仔細はねえんで、何も罪亡しだ、功徳にならあ。何の道、これも抵當に入つてるんだから、長い事あ持ち切れめえ。色艶あなくなるし、肉が落ちるし、もし然うなりや、殘るものは、あの、毛深い、長い、澤山な髪の毛と、賣殘の煙草ばかりよ。然し可哀相だい、はゝゝゝ、」

「だつて、好氣味ぢやありませんか。」

「好氣味ですとも。」

「いや、何しろ親方御苦勞でがした。」と、源は女達と、皆居直つて辰に揖した。

三十三

「あなた、あなた、失禮ですが、」

襖を開けざまに後手で閉めた、其の手を引手に掛けたまゝ、膝を支いて、阿禮は少し調子早に言つた、が、顏の色も變らないで額が少し汗ばんで居る。路地で辰が喋舌るのを、障子の内から聞濟ました、襖も閉めてあり、西向で門に竝んだ三疊で暑かつたのであらう、辰が其の高聲を、聞いて居たか、居なかつたか、時次郎は山北を歸したあと、直ぐ又床の中に入つたので今少し横に寢て、泰に足を延した。帶の上あたりまで毛布を掛けて居る。身體は綿の厚い四隅の膨らんだ、

清潔な、小紋更紗の敷蒲團に深々と沈むで、枕を高く、片手を枕着けた方の肩に載せて、頰を押附けた、片手に水滸傳の浪子燕青月夜に宋公明に謁するといふ條、丁度其處を開いたのを、少し離して、忘れたやうに持ちながら瞻つて居るが、心を留めて讀むでるでもないらしい。涼い目は、ぱつちりと睜いて居るけれども、顏の色が、沈むで、うつとりしたやうに見受けられる。裾の方で、膝を着き、手を支いて、

「一寸お寢つて在つしやるの、あなた、お寢つて在つしやいますか。」

「あゝ、いゝえ、」と言つて枕を返した、時次郎は、水滸傳を蒲團に伏せて、寢たまゝ脚も動かず窮屈さうに顏を向ける。

「何卒其まゝにして在つしやいましな。」と、お禮は少し摺寄つて前へ出た。

「御免なさい、もう我まゝに育つたんです。」

「さあ、何卒、あなた、何も、あなたのお邸で、あなたのお部屋ぢやございませんか。好に遊ばして在つしやいましとも。私あ店賃を頂いて居りますから、」といつて微笑むだ。お禮は今辰に風說された其婦人である。時次郎も莞爾して、

「何うも勝手放題です。腕白な店子だから持餘すでせう、店子にや親見たやうなものだつてね、然うすりや此方の家主さんは女親だ、種々御心配でございませう。」

「は、女親ですか、母様ですね。いえもう、世話を燒かして仕やうがないんですよ。だけども飛だ御迷惑でございました。何うせもう役去者で、方々へ迷惑を掛けるんですから、あなた御不承なすつて下さい。而して此上御迷惑でございませうけれども、もう少しお邪魔をさして頂きませうね。」と身を片除けて、寢床の側へ落着いて坐つた。時次郎はくるりと寢返つて横顏で向合つた時、水滸傳を離して、ばたり置きかへた、手を投げたやうに蒲團に載せて、

「何うです、此節はお忙いの、何處かへ旅行でもしないんですか。」

「もう旅行も詰らないんですよ。隨分方々へ參つたんですが何時も時を限つた急な用を抱へてばかり居りましたもんですから、景色だか、雲だか、田畝だか、海だか、まるで分らずに了ひましたし、今ぢやあ隙になりましたから出掛けようとしますとね、何うでせう、もう新橋を出て、海が見えますと直ぐ、上野からですと、森が見えますと其のまゝ、何ともいひやうのない厭な心持がしますの、一歩だつて踏出されはしませんよ。」

三十四

「飽いッちまつたんですね、」といつて時次郎は頷いた。お禮も頷いたが、これは首を低れて溜息をしたやうである。

「飽きましたにも何も、三日にあげず用でもつてあなた旅行をしました。其がですよ、其が用の爲に旅行しました其の用が一ッとして足りた事はないぢやありませんか。皆鵶の嘴ですもの、何處へ參るんだつて新橋上野には限りませんけども、北からでも、南からでも、東京の地を離れませんければなりません。蜘蛛の巢のやうな道を、何方へか出ようとすると、もう何ともいへない心持がいたしますの。旅行處ですか、あなたね、段々烈しくなつて、門を跨いで、直ぐまあ、餘所の物干でも垣根でも、またね、犬が歩行いて行きますのでも、何でも、一寸目に留ります、其からが厭な心持なんですよ。仕方がございません。」

「何か厭な心持を誘ひ出されるものと、其の場合と、其時との記憶が澤山ある、其でそんな氣がさすんでせう、分つてます。よくあるもので、五六年前でしたつけ。家が燒けたッていつて來ましたから見舞に行かねばなりませんで歸省つたんです。」

「まあ。」

「路で海端を通るんですよ。海端だつてもね。海面は直徑、然う、まあ、三十丈ばかり足の下に、ぽつちりづゝ、綠晶色に、淺黄、淺翠、藍のやうな處だの、白波の立つ處だの、處々、九十九折の崖の間に見える上を、片一方が、大なだれの山なんです。其の下を、丈の高い車夫が曳いて、がた〳〵する車に乘つて通るんです。霜月の末ですから、澄渡つた、透通るやうな蒼空で、ひや

ひや身に染みて寒かつたんですが、風はちつともございませんでしたつけ。時々恁う海の方から白い波がさら〳〵と寄せて來ると、瞰下ろすやうな崖が、一面、漆の樹で眞赤な葉が、乾び切つて、カラ〳〵と音のするやうに舞上がつて、一齊に颯と高くなるのを見上げると、又舞下つて、ばら〳〵と身體へ浴びるんです。然うすると思ふと、森として、靜まつて、車の泥除だの、膝掛の上だのに、五葉六葉づゝ零懸つて、殘つてますのね。」

「おゝ、綺麗ですこと、そりや何處ですか、」といつて美い目を睜る。

「いゝえ、あすこいらでも名高い景色の好い處なんですが、其が心持ね、下から舞上るのも、車に懸つたのも、また見ると、向うの崖がまるで埋つて眞赤な土のやうに一面に見える中からぽろぽろと零れて、恁うね、崩れるやうに散つて落ちるのが處々に見えるのも、皆眞紅の漆、櫨などいふので、綺麗には違ひないんですけれど、燒けたといふので其の事ばかり思つてますから、不殘火の粉のやうに思はれて、炎を潛るやうで、ぼんやりしちやあ見惚れてる內に、ばら〳〵と身體に懸ると、ハツとして熱いやうな、何處か焦げはせぬかと思つて見い〳〵しました。其の心持つたらありませんでした。何か思つてるとそんなもんです。」と言つて、瞳を寄せておつと見た。

お禮は膝なる指の先を動かしたが、

「然うですねえ、」房々とした夜會結が、重く見えて差俯向く。時次郎は氣が着かなかつたらう、

お禮の顏色はこれを聞いて變つたのである。差配に火水を以て呪はれて居る人に、こんな談話をするのではなかつた。けれども何の心もなく、

「それで私ン家の此の家は何うです、何も心持の惡くなることはありませんか、」と微に笑を含むだ。

屹と顏を擧げて、

「何でございます。」

三十五

「いゝえね、垣根は倒れたまゝ、樋は外れかゝつたまゝ、そこいら打遣放しで、草茫々ですから、長者の邸の落魄れた跡のやうに見えて、また心持を惡くしやあ爲ませんかと申したの。」

「然う、まあ、なるほど、大變な草ですこと。」

手を入れないで唯繁るに任せた松の、屋根より高い、下竝びの葉は、殘らず赤くなつて、落かはり時から其まゝ地の上へ敷いたやう。二本左右から梢を合せて、庭前を限つた間を透いて見える、空地は一面の草の生で、左にはちら〳〵と百日紅の眞盛の梢。斜めに葉の大な玉蜀黍が一坪ばかり、突當りの藪は絡み着いた毒々しい蔓草の葉と、茗荷竹の大く伸びたので能くは見えぬ。

莖の先に小米のやうな花の咲いた、長が二尺三尺ばかりの草が縱横に生え竝んで、日のさす陰もない中を、見えかくれに一ならび紅白の花の入亂れて咲いたのは鳳仙花である。右の方には件の差配が家の緣の端が纔かに見える、あたりはたゞ、まだ色の染まぬ箒木の短いの、蚊帳釣草、犬蓼、天狗花、まだ咲亂れぬ鷄頭、白百合も二ツ三ツ、南瓜の花が日に凋むで、葉がまた草の上を這ひまはる。續さまに雨が來たらば秋にならう。草いきれは消えて、太陽の色が今赤い、濁つて灰のやうな庭の景色。園生といふと優しく聞える、これを葎といふのか、武藏野の、庚申塚までは裏つゞきの荒地である。

お禮は膝を摺らして、床の間と横に竝んで見通したが、

「隨分精を出して、手入れをなさいましたね。まるでこれぢやあ丹精をして草をお造りなすつた樣だよ。」

「お心持は。」

「はあ、其は何なの、一寸々々、路傍で、あの、家ならびの間に、斯うね、櫛の齒が拔けたやうになつて、一軒々々まるで草が生えて、垣根があつたり、池があつたり、車井戸があつたりするのを見ますと、直ぐ悚とする位、私は厭なんですけれど、あなたのお庭は本當よ、さつき參つてからも荒れてるといふ氣も付かずに居ました。其がです、母がね、前々から伺ひます度に、今日

は、浦里さんで恁うしてお在だつた、那して在つしやつた、昨夜からお歸宅がないなんて、串戲ですよ、然う申しちやあ、一々お風說をする次手に、お庭の事をいひますの。一月幾金づゝでもお借りなさりながら、費だ、可惜ものをッて、あの人は田舍出なんですから、畠が好なの。下谷の家でね、猫の額ばかりな處へ唐がらしを植ゑて、草を拷る、肥料を遣るといふんですもの。本當にお厭でなけりや、遊び仕事に去年まで手馴れた土だ。茄子だの、里芋だの、いろんなものを澤山拵へて、瓜なんざ、濡れたやうな綺麗なのを、緣前へ積んでお目に懸けようものをッて、一人で口惜がりますの。そしてね、申上げれば、運動場だから打遣つて置いてくれろッて、然う仰有るッて。何と間違へたんですか、浦里さんでは草がお好だ。まるで野原のやうな草がお好だお好だッていひ〳〵するもんですから、私は可笑くッてね、仕やうのない、腕白さんだッて、本當ですよ。さう言つちやあ呆れもします、笑ひもします。また地代を頂くのがお氣の毒なやうでもあり、其に限らず、餘りやりつぱなしにお構ひなさらないのが、さつぱりして面白いやうな、嬉しいやうな、心持の好いやうな氣がするもんですから、ちつとも氣にはなりませんの。」

時次郎は足で毛布を引いて仰向けになつた、掌を組むで眉を隱して、

「ぢやあまあ、ゆつくりお話なさい。」

三十六

「難有う存じます、飛だ好い氣ばらしをさして頂きますのね。何時でしたつけか、もう去年になりますね、暮でした、お宅へ參つて、大雨に降込められて、夜分遲くまでお邪魔をして、くだらない身の上ばなしをすつかりお談し申しましたねえ。そしてあの時は、熱がございましたの、覺えて居ますよ、大變お茶を頂きましたつけ。」といつてお禮は手をあげて襟に置いた。白い麻の肌襦袢の端に、衣服の藍が染まつて居る。衣紋は開いた方で、その端の見える襦袢の下に、白い胸、乳かとおもふ左から、青い筋の斜めなのも、辰がいふ如くである。面は窶れて、頤が細く、眉は鮮やかで、鼻は高いが、顏はやゝ扁い方、口は引締つて人並よりも小さく見らるゝ。額はいまも汗ばんで居るが、但其の目の涼しさといつたらない。阿禮は下目づかひに、見ないやうに、熟と掌で目を祕して居る時次郎の顏を見て、フトいひ淀むだ。

「こいつあ滅法界だ、旨えのなんのッて、尻を賣るんぢやないが、菊座がぐッとメつてら。」

辰が聲で、

「お前の尻のやうぢやあねえぜ、」と言つたが、哄と起る笑聲、人の氣勢。また南瓜屋の荷に長屋中集つたのである。

うつかりして居た、目を瞑つたやうな阿禮が、是を聞くと眉が動いた。少し顏色を變へたが、口を結んだまゝで、膝なる兩手に力が入つて、肩を落すと、また首を低れて、もの思ひに沈むだやう。

何を考へてたか、眉と目を兩子で祕して、仰向いて默つて居た時次郎は、思ひ出したやうに枕を擡げて。

「どれ、それぢやあお茶でも入れませうか。」

阿禮はこの挨拶をするのにはあまり外の事を思つて居た。でいひおくれる、と返事をせぬ先、時次郎は片手を外して、肱で、蒲團をおさへると、矢庭に半身を刎起きて、片手で卷附けた帶の弛むだのをぐいとメめた。美しい鶸茶の靴下を穿いた足は、竝んで、胸にかけた毛布を洩れた。

「何、そんな御造作にはおよびませんよ、」といつた時、お禮は常に復した、そして、笑ひながら、しばらくして

「澤山我儘にしていらつしやいましよ。さあ、」と、膝を刻んで寄つた、腰を浮かして、手を擧げて背から着せかけるやうにして、

「ね、熱でも出ると惡いわ。あなた、さゝ、お寢つて存らつしやい、さうでないと惡いからさ、私が困りますよ。」

「可いんです、何、それぢやあかまひませんから、お遊びなさい。でも、もう起きませう、鬱陶しくなつた。」

「可いんですかね。」と、暫らく默つて、ぢつとして居て、手を放すやうに膝へ引いて、舊の座に歸つた。

「まあ、今日もお話しなさいな。そして此節は御氣分は宜いんですか。」

「えゝ、もう、何ですか、無茶になつて、病氣も何も分りませんが、何處も痛くはないんですから、大方さつぱりして居るんでせうよ、」と言つて、お禮は、痩せた小さな、其の手の甲を見た。顏はそれだけ鮮明であるのに、譬へば衣服を着せた人形のやうで、見えない手足、身體の不完全なのが、危まるゝやうな肉附、恰好、舊はこんなでなかつたらう、年紀も長けて、浦里より八ツ上で三十三、殊に烈いりやうまちすが持病であることを、豫て其の母親から聞いてるものの目には、一層はかなげに思遣られた。

三十七

其に身裝が見すぼらしい。折目正しうは着て居るが、一度は水を潛つた、紺飛白も粗いので、年紀恰好にそぐはない、帶は繻子で、黑のやゝ色の褪せたのを、胸高に緊めて、太鼓に結んだ、

帶上ばかり美しい、ひも高な水色縮緬の清いのを幅を廣く、細い乳の下に卷いた、腋明の人並より多く開いて見らるゝのも、衣服がしつくりとしないのも、褄を深く引合せて、裾が廣う見えるのも、かほどの衣服を恰も羅と錦で着飾つた時とおなじ心持で、故とらしく極つたやうな、心榮も見える。起居に、滑布の足袋の少し汚れて、爪先の鼻緒に摺れたが見えるのも、單衣の裄の長いのも、細つた指に拔けて落ちさうな黃金の指環の大いのも、派手好の、見得坊な、打上つた、權高な、恰も貴女の如く崇められようと思つてして居たらしい、當時の心狀がおもひやられて、渠を憎むものの目からは、言ふまでもなく憎まないものはない、いづれも現世から、將たあの世から、幽明相通じて、いまにお禮がかういふ身になるであらう、して遣りたい、させて見たいと、思ひ込んだ呪詛が叶つて、これからはのたれ死をする、其の階梯だと喜んで居るだらう。嬉しからう。好い心持だらう。躍りたいのであらう。

けれども――――家賃は月々に納めるから、催促を受けて怨むだこともなし、高利を借りたことがないから、其肉を食ひたいほどな何んな、責方をするか、其も知らず。また其の綱にかゝらず、術に乘らず、手管を知らない、唯其の持家を借りて住むで居るといふだけの身には、婦人だけに、却て優い家主だと、浦里は思ふのであつた。

內氣な世間知らずのおとなしい女に慕はれるよりも、人を殺した、火を放つた、天下に容れら

れない強盗に可懷しがられる方が心持が確ではないか。星の下で小羊と睦まじうするよりも、暗夜狼を友とするのが却て愉快だ。お禮は母親を寄越す度に、浦里の安否を問うた。そしていつも店賃の滯らないのを感謝する由を慇懃にことづける。

何が感謝だ。家を借りて、其の爲に價を拂ふのは當前のことだのに、分けて、特に、禮をいふやうな樣子では、大抵他の者が思遣られる。

尤も四月五月と滯らして、朝の內に一車道具を積んで遁げるのが一寸々々あつた。勿論、長屋中、心を合はせて爲ることなんだから、現在引越の手傳をした、正に其の竈と、澤庵桶の壓石を預つて居るものが、店賃の取立てに來て、戸の閉つたのに驚いて、聞き合はすと、一切存じませぬで以て白を切る。おや、とばかりで、其の鬼だ、蛇だといふ婆さんが、情なさうに顏の色を變へるのを見た。

かほどのことで、顏色を變へるやうなのではあるまいのに、實際、食べるにも、着るにも、今は此處だけの收入を當の母子には、驚かずには居られまい。

其のしよげるのが好い氣味だ、吃驚するのを見ると痞がさがると、皆でいふ。

既に彼の辰の如きは、些もこんな長屋に居る用はないが、弱目に祟目だ、家主が下坂に附け込むで、店立を食はさうが、板戸を釘づけに爲ようが、尻に敷く藁一本でもある內は、テコでも動

くまい。無二無三に出來るだけ借倒して、ギウといふほどに踏むでやらう。其の時の顏は何んなだらう、皆が樂にしてお附合なさい、と始終いつて居る。

三十八

そして其が、渠等のための罪ほろぼしだ、功德になる、好いことだ、先祖のお位牌がお喜び遊ばされる位のものだといつて、威張つて居る。

とは知らず、お禮は勝氣で弱々しい落目は語らぬ。今の境遇を知らないで高利を借りに行つたものにも、無いとは言はず、當分しばらく止めて居ります、と言つて斷つたさうだけれども、年寄は愚痴ッぽくて、女には內々だと言ひ〳〵、口說話をする。あんなに家賃を滯らすものは、片時も置くわけではござりませぬが、世盛の時分には些とも然ういふ氣は付きませんけれども、今かうやつて、自分でもあちらの借家の店賃の催促をされて見ますと、出されずば立てとも言はれませぬが、不殘滯るには困り切ります。屋根が傷んだのも、勝手が損じたのも、存じて居りません。嘸困るだらう、可哀相に、氣の毒だ、とは思ひますが、全く屆きませんので、家賃で繰合はさうとすれば拂つてくれず、責めれば理窟を言はれますので、無理でもなし、家主は立つ瀨がございませぬ。それも傍について居てなら、また仕やうもありますけれども、巢鴨と下谷の隔つた、

及腰では、十ウの九つまで及ばぬ勝だ、といつでも言ふので。

この及腰といふのが、其が浦里を立たせて、母娘が此家へ入らねば居附で世話は出來ないことである。世盛の頃、づッと乘込めば、やれ御新造、それ、奥様、お嬢様で、顏も上げられなかつた者と、おなじ九尺二間に住んで、水仕業は出來ないわけなり、門の一ツも附いて居ようといふ此家ならば打つてつけだけれど、此處が人情で、氣に入つて住んで居るものを、手數も懸らう、引越してくれとは言ひ出せない。で、そんなに不便利でありながら、邪魔だとも思はぬか、迷惑だとも思はぬか、汗になつて來る。母親を、お禮が用達しに寄越す度に、暑さ、寒さをことづける。宜くといふ、御不沙汰をして濟まぬといふ。慇懃にいふのである。

心弱いではないか、優いではないか、女らしい、しをらしいものではないか。

此處の事だ。

浦里といへども、あの位な、名高い、惡黨、毒婦、鬼、畜生、夜叉、其は知つてるが、ものの可懷さうに見えるのは、慈悲深い差配に店賃を免ぜられたよりも嬉しい。乳母に抱かれたよりも、安心だ。姉に慈まれるよりも、心強い、いゝ心持だ、愉快だ、壯だ、爽快だ。

毒蛇は人を殺すものだ、けれども、我に馴れ、我に親み、我に事へれば、猫よりも賴母しい。惡鬼は恐るべしだ、けれども、我がために働き、我がために行へば、愚直な僕よりも賴むに足ら

う。

大蛇は厭ふべしだ、けれども、觀世物になつて、はじめは人を觀て眼を怒らしたのが、力失せて、到底敵を倒すことは出來ないのを斷念めた時、只害せられまいと思つて、死んだやうに頭を垂れるのを觀れば哀でないことはあるまい。虎は恐るべしだ、けれども、鐵柵の中に蟄した時、檻の前は人だかりで、棒を突込む小兒、目を剝いて見せる者、舌を出す者、わッといつて囃す者、目金を掛けて見る媼、深張の涼傘を翳ながら襲着で立つて見る孃、一たび嘯けばの、其の威も計らず、害も恐れず、力も知らず、三百出して見物するのは、嬲るのだ、冷かすのだ、侮るのだ、馬鹿にするのだ、辱しめるのだ、愚にするのだ。

三十九

無禮だ、生意氣だ、不都合だ、猪口才だ。殊に、媼なぞが、特に、腰の曲つた奴が、特に、目金をかけて覗くとは何の事だ。特に、婦人が、特に、襲着をして、特に、澄して、特に、涼傘を翳して、熱帶地の猛獸を遠くから伺ふとは何だ、特に若いものが、特に小兒なぞが、檻の外で動いてるのは無禮であらう。

渠は、其の檻を碎いて、其の小屋を破つて、一たび蛇と虎とを市中に放つて、生意氣な、卑怯

な、臆病なのが、其の大屋根を卷いて頭を擡げ、其の格子戸を破つて爪を磨ぐのに驚倒し、絶叫するのを見たいと思ふ、實際、鐵柵の中に絶ゆべからざる恨を呑んで煩悶し、頭を垂れて憐を請ふのを見ると口惜くつて堪らぬと――――いつも山北にのみ言ひ〳〵する、浦里が目には、衆の見て快とすべき、お禮が爾時の風采が、いかにもあはれに感じられたのである。が、何もいふことがなかつたから、

「まあ、おゆつくりなさい、」とたゞさういつた。浦里は、世に山北唯一人知つて居る。社會に、制裁と、法律と、宗教と、道德と、腕力と、いろんな二字のものがあるから、ために、年紀は二十五で、單身で、ふらんねるの衣服を着て、鶸茶色の毛絲の靴下を穿いて、毛布をかけて、蒲團に寢て、水滸傳を讀むで、お禮に呼ばれて起返つて、そして、こんなことをいつてるのである。

「何うもありがたう存じます。」とばかりでしばらく默つた、お禮は顏を擧げて居直つて、

「いえ、しかし、もうお暇にいたしませうと思ひましてね。」

「何故。」

「不可いておつしやれば、も些と經つてからにしましても可いんですが、」

「不可いつて、」と、時次郎は聞違へではなからうか、と思つたやうなことをお禮が言つたのであつた。

「分つてますわ、あなた、お聞きなさいましたか何うですか、今も戸外で、植木屋のが、私をあんなに言ひました。一體長屋中で何な事を言つてるだらうと思ひまして、其に、何時も母樣が此番地へ參つちやあ悄げて歸るんです。今日あたりは方々の修覆を切詰められるだらうツて、宅から出ともながつても居りますし、何んな樣子だか見たかつたものですから、本當に私は、今まで人の風說なんぞ構つたことはありませんが、愚痴になつたんでせう。人間なみに、あなたね、そつと聞いて見たくなつて堪らないもんですから、あゝやつて、誰も見ない內に、まつたくは母にも申さないんですよ、推附けてあなたに御迷惑をかけまして、お宅にかくして頂いて、よく見ました。よく聞きましたが、さつきも母が泣出さないばかりに苛められました時、餘程私が出ようとは存じましたけれど、あんなに言ふものを、此方へ參つてる事が知れますと、嘸ねえ、浦里さんの、お住居が汚れたやうに申しませうと思つて、控へましてね。そして晩までお邪魔をさして頂いて、人顏が見えなくなつたら、密と路地を拔けようと思つたんですが……」

しばらくして、

「ねえ、あまり口惜いから、一ツ死ばなを唉かせて遣らうと思ひますの。」と云つて、戸の方へ屹と目を注いだ。阿禮が眥は動いたのである。

四十

時次郎も聞いてやゝ色を動かした。其の目が冴えて屹と見て、

「そして其は何うするんです。」

「いゝえ、此のまゝづッと出れば宜いの。ですけれども、あなたに悪うございませう、何かいはれると厭でせう。」

「何をいふもんですか。」と事もなげに言つた。

「いゝえ、そりや屹度言ひますよ。あの通りですもの。お悪ければ何、私は、あなたのお爲にな

ら我慢をしても可うございます。」

「お出掛けなさい、何、構やしません。」

「可いんですか、」とお禮はおさへるやうな聲でいつた。

「左様、何、そんな御心配にや及ばなかつたのに、道理で、さつきからも、小な聲でものを言つてらつしやるやうだと思つた。くだらない、構ふもんですか。そんなことを、可いから、威張つてお出かけなさい。それぢやあお留め申すのではなかつた。」

「何ういたしまして。」

「さあ、御遠慮なく、皆が見えるやうに、門まで送つて出て上げませうか。そしたら猶の事驚くでせう。あんなのは些少驚かしてお遣んなさい。銘々が好で義理を缺いて置きながら、勝手な事を言つてまさあね、いろんな熱を吹いてら、暑さの所爲でせう、浴びせ掛けてお遣んなさい。」と快ささうに笑つていふ。お禮もいそ〳〵して、

「それぢやあ、濟みません、何うも、」と早や立たうとする。

「さつきの今だから氣を着けなくッちやあ不可ませんが、可いんですか。」と、きつぱり問うた。

「はい、」と言つたお禮は、打たれたやうに俯向いて胸を見て、其の胸をおさへながら手を擧げて、目に近けて指環を見た。

「こんなですけど、長屋の人達なんざ、まだほんものだと思ふでせう。あなた、ねえ、こりや嘘なの、鍍金なの、可笑いでせう、馬鹿々々しうございますのね。」と言つて淋しげに笑つた。時次郎は答へないで居る、ト房ある件の背負上げの結目を爪さぐつて、

「皆まやかし、これも然う見えてて縮緬でも何でもないの。をかしいぢやありませんか。こんなになつても見榮を爲たいもんですかねえ。」

二人とも言を絶やした。路地内には、またわや〳〵人聲。

お禮は面正う顔を擧げて、衣紋を繕ふと、胸を斜に、肱を張つて、兩手で脇の下を、繻子の帶

の上から押へた。

「何ね、これでもですよ。私が今迄仕置いたことで、相良禮といふので、もう一度ぐらゐ壓は利きますよ。あゝ見えても、辰の野郎なんざ、私には口も利けますまい。皆ひつそりしつちやひますよ。今に御覽なさい、失禮、」と言つて身を引いて立つた。お禮は小く疊んだ手拭を片手に握つて、手先を鬢にちよいと觸れると、横にすツと立つた姿で、裾を折屈める、片足、踵が上つて、足袋の裏が見えた。

「どれ、妖術でも行つて遣れ、」と片頰は淋しく、片頰には笑を含みながら、つか〳〵と緣へ出る。足の輕さ、爪はづれの尋常さ。彼がと、時次郎の見返る時、婦人はフト心付いて、戸袋の陰に祕して置いた、象牙の柄の細い、御納戸色の絹の深張を持つて出ようとする。出合頭に、庭口から入つて、

「奥樣。」

「え。」

「お暑うござります。へゝゝ、」と、薄氣味の惡い、何だらう。

四十一

年紀の頃は三十八九で、日に燒けた、頤の細い、唇の薄い、眉の薄い、髮の延びて額にかゝつた、顏の暗いのが、脚絆、股引、尻端折で、小倉の帶、前垂をメめたのを引上げて挾むで、黑の絆に襯衣を着て居る。背には風呂敷包を背負つて、肩にかけ、手には團扇を持つた、荷の輕い、身の輕いのが、足は重たげに疲れたといふ風、草鞋がけで立つて、お世辭笑をすると、腰を屈めた。

「へい、御免下さい。」

お禮は深張の柄を、兩手で取つて、向うへ差出しながら空を仰ぐやうにして、下目で見つゝ呆れた狀だつたが、背後を一寸見て、向直つて、

「お前、此處は入口おやあないよ。表からお廻り、」と、きつといふ。

又お辭儀を一ツ、矢立を差した腰を低うして、

「えゝ、遠國他鄕のものでございまするで、」と、容子に似ぬ克明なもののいひぶり。

「御當地は方角が分りませず、勝手が違ひました、戸惑をいたしまする。眞平はや御免下さりまし。」と丁寧に頭を下げる。

「何ぞ用。」

「へい、へい、飛だお邪魔をいたしまする。へい。」

「何です、」とお禮は出端ながら、若き主人が、挨拶を面倒がるのを知つてたから取次いだ。
「えゝ、……」
「何です。」
「えゝ、奥様。」
「何ですよ、」と聲を優しくいつて、お禮は破顔して微笑むだ。振返つて、また笑つて、
「若旦那――浦里さん――」
時次郎は蒲團の上に背後向のまゝ、見返もしないで、
「お出掛なさい。」
「まあ、可うございますわ、何だね、お前。」
「用なんか、」と殆んど一緒に聲を懸けた。
「へい、少々、奥様、」と力を入れて、
「若しも其の貴下様方で、人を一人お見懸けなさりませんでございませうか。年配は私より八ツばかり下なんでございますが、老けて見えまするで、上に見えまする、實は兄弟。えゝ、弟なんでございますが、似ては居りません。顔は丸い方で、色は白うございます。へい、髪は短く刈込むで、兵兒帶をしめて居りまするで、商人のやうにはございません。へい、まるで書生さん、學

生と申しまするやうな様子なんでございますが、ツイ其の、何致したのでございまする。」
鋭い婦人だけれど、お禮は茫乎して聞いて居る。
「私どもは、實其の北海道……者でございまして、織物を家業にいたしますもので、先頃、京都で開かれました共進會に、其の出品を致しました。一體、親どもは内地の生でございますが、私どもは產れまするとと、彼處に育ちまして、故郷は山の形一ツ見ませぬので。丁度幸ひ、其の賣殘りましたのを受取旁々、見物をいたしますつもりで、弟と二人出て參りまして、京都に半月ばかり逗留をいたしましたが、國には二人とも妻子がございまするので、然やうに長居は出來ませんわけで、今年のはじめに、むかうを發足いたしまして、汽車で、新橋まで參りまするとと、停車場のな、あの人ごみの中ではぐれました、其ッ切で今に弟の行方が分りませんので、」といひ〳〵、身をかへして緣に腰を掛けた。足を伸ばして、背の包を解いて、引附けて置く。

四十二

お禮はぢつと立つて默つて見て居る、と旅商人は向うむきで、内を見ようともしないで、いひ續ける。
「唯た一人の兄弟でございまして、土地不案内の私ども、唯力にして居りましたが、何處へ何う

參りましたか、もう、朝晩かやうに駈けづりまはつて探しまするけれども、皆暮行方が分りませんで、心細さは心細し、國には妻子の者が明暮待ちに待つて居りますものを、私一人弟にはぐれたと申して、歸りますわけにも參りませず、そちこちいたしまする內に、路銀はなくなります、旅さきで難澁をいたしますが……」お禮は何か言はうとした。旅商人は立續けて、

「いえ、それが東西も分りません小兒と申すでもござりませんが、生憎と、弟めは其の啞なんでござりまするで、字は書けませず、目が眩みますやうな、烈い人通の中を、田舍者の茫乎で、また何んな目に逢ひませうやらと、へい、不具者だけに不便でなりません、心配でなりません。餘り唐突でござりますが、へい、奧樣、もしそんな風體の者を何處ぞでお見懸けなさりはいたしませぬか、旦那樣、如何でございませう。馬車に轢かれたとでもいひますやうな凶事を、新聞にでもお見あたりはなさりますまいか、飛だお尋ねで恐縮に存じまする。」といふと俱に、くるりと腰を外して、兩手に額を埋めて緣側の端に額いた。

何を當に、何處を見當に、此家へ入つたか、餘りなものの問ひ樣を呆れるばかり、詰ることも出來ない。お禮は長々とした繰言に釣込まれて、自から眞面目に、我知らず答へねばならないやうにされたので、

「お氣の毒だねえ。」

旅商人は額いたまゝ、

「へい〳〵、御深切樣に難有う存じまする。」

（お氣の毒だねえ、）と口の裡に言つて、暫く默つて、思ひ立つたやうに、

「へい〳〵、御深切樣に難有う存じまする、何うもお難有う存じまする。」と染々といつて、哀なり。

お禮は手に疊み持つた手拭で、襟のあたりを二ツ三ツ煽ぎながら、

「そりや何だよ、お前、早速警察へ屆けると可いよ。都はね、こんなだかはりに、田舍より警察が行屆いて居るからね、探す人なんざ、直分るよ。何うして一軒々々歩いてちやあ、三年かゝつたつて廻切れはしないよ、大變なこツたもの。」

「いえ、もう其れは存じて居りまする。何にも係合のござりませんお方、何が、毎日一ツづゝのやうに人殺がありまする位な御都會でござりますものを、與太郎の迷子になりましたのなんざ、お氣に留るわけのものではござりません。それは早や、よく承知をいたして居りまするけれども、之は、」

と顏を擧げて、自から其の愚を嘲けるが如く、情なささうに笑つた。

「ほんの心やりでござりまする、唯居りましては氣が濟みませんので、御存じないとは存じなが

ち、恁うやつて方々廻りますが、行をいたしますやうなもので、お百度を踏みまする願掛のやうな氣で、病氣のお呪ひに米と小豆を一粒づゝ千軒貰ひまするな、宛然あれでございますよ、そして啞だ、啞だといつて業を曝しまする、ハヤ情なうございまする。」

「だからさ、そんなことを爲るより警察の方が疾いよ、病氣の時はお呪ひより何より醫師でなくツちやあ、お前。ねえ、あなた。」

浦里は默つて西日を背にし、薄影のさす向うむきで、水滸傳を取つて二三枚緩やかに開けた。

四十三

「へゝ、仰有るまでもございません、交番へも參りました。警察へも願ひまして、そして何でございまする、辻々の派出所へ電話をかけてくれましたので、あの、柱が建つて線が架つて居りまして、彼が其の電話でございますよ。ま、何かと計らつては下さりますが、唯義理一遍、氣の毒だとも、笑止だとも、思つて爲てくれるではございません。願出まするとは、嚴しく尋問をいたされますで、事馴れませぬものはどぎまぎしまするばかり、はら〳〵いふ目に逢ひまするな、又恁うやつて、方々のお宅へ伺ひに出ますると、それこそ强盜が化けてでも參つたやうに、劍もほろゝで厭がられまする、嫌はれますな、薄氣味を惡がる人もございます。尤かやうなことを隣の番地

を尋ねますやうに、人樣のお宅へ聞きに出ますわけのものではございません。其は能く存じて居りまするけれども、以前も申しました願掛でございますので、爲なければ氣が濟みませず、參れば其通りで、一日に幾度となく、極の惡い、飛だ思ひを致しまする。で、おのづと氣がひけますので、人樣の敷居を跨ぎますと、はツといたしちやあ、冷汗が出ますやうなわけで、おのづと、空巢狙ひ、掏賊、詐欺、騙取のやうに人相も胡散臭くなりましたでございませうで、可恥い、面目ない、顏も上げられません。只今も御近所のツイ此先の下駄屋樣の店で睨まれて、こそ〳〵逃げて參りました。ツイ貴下樣のやうに優しいお言葉を下さりましたものは今までにお一方もございませんなんだに、眞に此樣な嬉しいことはございません、奧樣難有うございまする。」

「何さ、」とばかり、お禮は分外な人の難有がりやうを打消さうとするに言葉も出ず、突放しても此處を立つて出惡いなり、恁る人の恁る狀は、憎いとも、蒼蠅いとも、面倒だとも思ふ氣もしないで、唯立つて視めて居た。

「はツ、」といつて旅商人はまた一禮して、

「けれどもまたお目に懸られまするやら、何とも分りませぬ。誠に難有うございました。然やうならお邉を頂きまするが、何な御緣がございませうも、知れませぬ。私は柳田藤太郎と申します

る、北海道……づッと奥の方でございます、函館から汽車に乘りまして、其から馬で參りまして、又蒸汽に乘ります。あとを船で渡りまして、やう〳〵山の麓に着きますが、未だ〳〵六十里ばかり、駕籠も馬もございませぬ、山越で參ります處。」

「心細いのね、」と、お禮は呟くが如くに然ういふ。

「あゝ、何だか考へましても、豆粒ほどな海の蒼いのが見えまして、小な山の下に、芥子粒ほどな人形が、一人で、遠い、遠い處に、立つて居ります。それが私のやうに思はれまする。全く心細うございまする。いま考へますと、よくまあ此處へ參つて、此方で、貴下の前に、お緣側に、恁うやつて腰掛けて居りまするよ。唯見物がいたしたいばかり、其の上織物をいたしまするので、蝦夷錦を京都の共進會へ出品いたしました、其の賣殘りましたのを受取りますので。」

「然うですか。」

「へい。」

「結構なものだつてね。」

「へい、いえ、未だ御覽になりませんか。」

「あゝ、あの種々あるけれども、本物は少いッさ。」

「然やうにございますとも、價を出しましたとて、ざらにありまするわけのものではございませ

ん。然やうでございましたか、ほんものは、然やうでございますとも。」

と言つて猶豫はず、旅商人は其包を解きかけて、

「私ども手を觸れる品ではございません、息を掛けますも勿體ないわけのものでございますが、家業冥利に、恁うやつて、迂作もなく、小汚い風呂敷に包むで持つて居ります。丁度宜しうございますで、お目に懸けませう。商賣物だと申しましても、私ども持傳へましたのが五品しかございません、三品出品いたしまして、一品だけ殘りましたのを取つて參りました、帶地でございます。あとは小切で、それは國元に藏つて置きますが、またお求めになります時のお手本に御覽なさりまし、蝦夷錦といふのは是でございます。」

一帶の金襴、恰も輝いて射す夕陽に映じた。金色は却つて赫と燃えて、眞赤に火のやうで、てらてらとして眼を射た。見ると面もほてるばかり、思はず、

「おゝ、綺麗だ、」と言つて、お禮は膝を折つたが、下がひの褄を引合せて手を疊に支いた。

四十四

「お緊めなさい、緊めて御覽なさい、其の帶を上げますから。」

「え。」

「可うございます、緊めて御覽なさいな。上げませうよ！」
「私に、」と言つて驚いて目を放した、其の膝なる錦の帶に、日の照つて添ふ晴々しい、目覺しい色が映つて、寥れたお禮の顏が美しい。
「上げませうと思つて買つたんです、氣に入りませんか。」
「あなた、何うなすつたんでございます。」と沈んだお禮の顏に血が動いて見えた。
「氣に入らなくツても綺麗だから可いでせう。輝いてるから立派に見えますよ。何うせ七十圓のものを二十圓に負けて行つた位ですから、まやかしものにやあ違ひないんでせう。けれども、此際、銀を持つてるより鉛で間に合はせる方が謀を得たもんだ。失禮だけれど、腹を立つちゃ不可ません。私は何も構はないけれど、家主のあなたが、傲慢な、無禮な、殘虐な、酷薄な、生意氣な店子を取つて占めようといふのに、其の身裝では餘質素だ。內端だ、陰氣です。一ッ花々しく行りませんか。若返つて、緋縅の鎧といふのだ、ぐいと緊めてお起ちなさい。」
默つて手を支いて、少し俯いた形で聞いて居る。
「御遠慮には及びませんから、お辭儀をなすつたつて買つちまつたものを、取つてくれなけりゃ私に何うするッて事もないんですから、あなたの方ぢやあ何とも思や爲ますまい。誰も知らないんだけれど、私はあなたに其の位なことをしても可いことがあるんです。

あなたは過般馬車の方で貧乏人の、汚い、繼だらけの、浴衣を、袖疊にした事がありませんか。
爾時、下から請取つたのは髮の蓬々した、痩た、血色の惡い、而して目のぐるぐるした、憎體な、拗ねた、ねぢけた少年ではなかつたですか。
それは谷中の傍でしたらう。溝の側をお通んなすつた時でせう。
少い男が一人なんで、人の口が蒼蠅うございますから、一所にや一つ家には置かないけれど、此の長屋に、別に住まはせてあります。あの澄……從妹ですがね、那の女が浴衣を洗つたのを干棹に掛けて置いたのが、外れて居たので、風に吹き攫はれて、丁度來懸つた馬車の中へ落ち込んだのです。あれ、といふので狼狽へたけれど、馬車だからつて、恐がつて取りに行く事が出來ないつて言ひます。尤も馬車に乘る身分の人だ、殺されようも知れないと、世馴れぬ女は思つたでせう。
何を！といふので、何ういふ氣であつたものか、私は今でも床の間に置いてあります、其の短刀を引そばめて、二條ぱつと立つた砂煙の中を轍に引添うて追懸けたんです。馬車が停つた時は、拳を握つて、事といつたら突かゝる氣、激したからものも言はれないで、たゞ瞻めて突立ちました。何んな顏をして居たでせう、其頃は境遇で、顏を見て笑はれても直ぐ飛蒐つて殺したいやうな氣がしました時分ですから、何んな劍幕だつたか知れません。

ちやんと膝の上に、袖疊にしたのを置いて居て、兩手で、下へ渡しながら、母衣がくれの、氣高い面影で、片頬笑をなすつたのを、あなた、忘れはしますまい。」

といつた、時次郎の目は冴々した星のやうであつた。

四十五

「其時、曲けた、僻んだ、役去者の心持は何んなだつたでせう、渡された浴衣を受取つたまゝ、暫く立つてる内に、しみ〴〵と涙が出たんです。馬車はもう見えなかつた、其ッ切、何家の夫人だか、姫様だか、知らないで居ましたつけ、去年あなたにお目に懸りました時迄、片時忘れないで、ちやんと覺えて居たんですが、場合でないと思つて今まで默つて居りました。

あなたは忘れてる位でせう。氣に留めるほどの事ぢやありますまい。けれども、私には大なる事件なんです。到底も品物でお返し申されるやうな、そんな御恩ぢやあないんですが、式ばかりなんです、志だから受けて下さい。而して臣下か、下人か、奴隷に向ふやうな氣で、奴等を取占めてお遣んなさい、私も其處まで出て見ませう。」

お禮が頭は聞く内に次第に垂れて、膝に疊み累ねて堆い、蝦夷錦の帶の上に附くばかりになつた。美しい錦に日の光の射した輝く艶に、濡んだ目の涙を拂つて、射られたやうに、はッと顏を

上げた時、涼い、黑い、ぱつちりした、大な瞳を据ゑて、キッと時次郎と目を見合ひ、

「何にも申しません。それぢやあ占めさして頂きますよ。」と那の幅の廣い水色の背負上げを胸のあたりで解くと、脇の下へさらりと其の片端が懸つた。おさへて、膝を上げたが、お禮は身を一搖搖る、ト黑繻子の帶は下つて、環になつて、拔けて落ちて、細腰を卷いて長くなつて疊から疊へ渡つた。下〴〵ばかりですらりと立つて、お禮は蝦夷錦を胸にしつかりと當てて、蛇から遁げるやうに、絡ひかゝる古帶の中から拔けて、つか〳〵と緣端へ出た。帶は金色の細い瀧を流したやうに、片端を室の中に曳いて、綺羅美やかに颯と靡いたが、見る〳〵さら〳〵と手繰られて、裾に絡ひ、褄に懸つて、厚く、しつかりと、幾重にもお禮の細い胸を卷いて緊めた。庭前なる二本の松は梢ばかり夕日を浴びて、樹の間、草の根は薄暗く、茫々した草の葉は、一面に白けて、藪、玉蜀黍の葉は黑く、百日紅の花が薄い烟を浴びて一面に暮色を籠めた。廂を潛つて颯と射返す夕陽を受けて、光は眩いばかり、一抱の帶は黃金の彫刻を見たやうに、堅く、透間なく閃々とお禮の胸を鏤めた。俊秀なる將軍が直垂を裝つた時も恁うであらう。結目を上げて、引廻した、背負上をぐいと緊め、手にこま結の端を控へて、肅然として庭に面して、腰を輕う、爪さきを揃へてすつくりとして立つた時、襟足は淸く雪のやうで、眞白な耳朶に、房々と艶かに濃い夜會結の後毛がゆら〳〵として戰いだが、黃昏の緣の端に落ち懸つた廂の下に、垣根の倒れた草の茂つた、

凡そ三百坪ばかりの草の生、秋近いのを前にして、何となくもの淋しい、人の末路が來つたやうな、あはれな後姿を、ぢつと見て、時次郎は面を背けて、蒲團に肘をつくと、頤を支へながら、水滸傳の讀さしに挾むだ前刻の莨の上包の、朱で書いたIsabellaの像を瞻つた。

四十六

「不可いよ、誰だ、惡戯をしては不可ません。」

丁度お禮が緣側に立直つた時、黄昏かゝる園生の草の中に、裸で動いて居る小兒の天窓を見た。而して干棹の折れたのが空に舞つて、柿の枝を潛りながら、柿の實の青いのを打落して居るのに心着いたのであつた。叱つても夢中だから、

「不可い、これ惡戯をしては不可いよ、」と嚴く、凛とした聲で呼びながら、お禮は一歩出て屹と見た。

小兒の目に燒けた、眞黑な、目の光る、長い顏は、これを聞くと此方を向いたが、痞せた銅色の胴が叢の中から半身を露しながら、ざわ〳〵と水を渡る形で、遁げず、却つて、三間ばかり進んで來て、赤い口を開けると、

「わあい、私窩子のな、高利貸のをばさん、何を言つてんだい。此家はな、書生さんの旦那樣が

借りてるんだから、書生さんの、旦那樣の家なんだい。手前のな、をばさんのな、知つたこツちやあないぜ。やあい。」

と頤を出して、一ツしやくツて、手を掉つて、

「樣あ、書生さんの旦那は何とも言やあしないや。をばさん叱ツたつて駄目だい、やい私窩子、樣あ見ろ、やあい〳〵やあい、」と鯨波の聲を揚げて、膀誇つた、小兒は敵の最後まで確むる氣か、安心して立つてけろりとして居る。もはや運命が恁うなつて居ようとは思はなかつたお禮は、辰等一輩が雜言も、正しく陰口に留るので、面と向つては苦い顏さへ爲はせまいと信じて居たのに、小兒までこれだと氣を落したのではないか。肩に當てて、緣の柱に身を絡むやうにして力なげに支へたが、緒摺のした、足袋の爪先を襲ねて、指を忙しく動かすと、膝の邊が、心ほど震へて、悄然として首垂れた。

留を刺した氣か、またばさ〳〵と草を踏むで、間近う寄つた、向脛のあたりまで、草から伸びて出て、兩手を擧げた。

「わあい。」

突然鬱し怒つた聲で、

「何だ！」

驚いて見ると、時次郎は色を作して、
「小僧！悪戯をしちやあ不可ん、誰だ！」と鋭く言つた、浦里に恁ういふ聲は出ようとも思はなかつたから、庭前で砂の浴せ合をしながら、時次郎の耳を引いてさへ、ツイ咎められたことのない小僧の驚きやうといつたら、干棹を取落すと横ざまに飛んで、少し隔つた處で、草の中に踞んだが、首を縮め、兩手を胸の處で握つて、膝を曲げて、蛙のやうな身で目玉をくる〳〵とやつて、捻首で此方を見つゝ、鞠の如く縮むで、遠まはしに向うの垣根の際を、烏瓜の葉隱れに擦附くやうに忍び足をして、うそ〳〵と忍んで出て、目が屆かないあたりから一目散に遁げた。
「失敬ださ、」と呟いたやうにいふ、浦里は山北が氣遣ふ病が又起つたのであらう、拗ねたやうに本に臨んだ。お禮は掌を合はして伏拜みたいとも思つたらう。
「お止なさい、今出るなあお止なさい。あなたが一人で出るより私が一所にくッ附いて出た方が皆驚く。一層其よりも直ぐにお在なさい、而してお泊りなさい、其方が驚くでせう。一層蚊帳の中へお入んなさい、一ッ蚊帳の中に寢たといつたら、猶の事驚きませう。皆私を信じて居ます。自分の口から言つちやあ可笑いけれど、私が病氣だと長屋中心配する位だから、面白い。若旦那で、學者で、情深い、優しい、深切な、そして金子のある、此上もない者だ、位なことを思つてますからね、私窩子で、高利貸で、人の生血を吸ふ、鬼だ、夜叉だといふものと一緒に寢たとな

れば、こりや驚く、長屋の者にや限りませんさ、膽玉の小さな、根性の吝な、奴等、驚倒せしめてお遣んなさい、可いから、ね、構やしない。私はあなたが可哀相だ。」

四十七

二本繁つて葉が重なり、梢を合した間から、洋燈の灯がさして、水をかけたやうな黑い、艶やかな緣板に、白く映つた影が、地を這つて赤く草にさしこんで、しら〳〵と灰汗のやうな末は、夜の色に紛れた、薄月の、ぼやけて暗い庭の隅を、影法師のやうな婦人が俯向いて歩いた。雪のやうに掌二ッ合せて、ぴつたりと顏をかくして居る。前髮が稍亂れながら額に懸つて、叢に裾を祕したのが、忍足で、すら〳〵と垣の際を傳つて、藪の前で消えた。
暫くすると、がさ〳〵と搖れて、靜かになる玉蜀黍の葉の陰、莖の間に、其の姿が現れたが、灯の名殘を受けて、鮮かに見えた。小造な、尋常な、あはれな、ふつくりした女の姿は、流るるやうに中形の浴衣の色を松の葉越に見せたが、眞蒼な蚊帳の前を、摺り拔けるやうにして、庭を出ると、ぢゞぢと油蟬が一聲聞える。
門口から氣立たましく、
「大變だ、旦那、一寸出て下さい。」

四十八

「旦那、わざ〳〵恐入ります、難有う存じます、夜分お呼出し申しまして、こんな處までお連れ申しまして、飛だ御迷惑でござりますが、大變つて、慌しい、何も外のこツちやあござりません、あれなんでございますよ。あれね、あれ、あの、お月様は、あれは何う遊ばしたのでござりませう。」

「最初に私が見つけたんですよ。それから皆で騒ぎ出しましてね、それからそれへ、誰も來い、彼も來いで、到頭此處へ此人數で集りました。第一、よく全然拜まれますぢやありませんか、何でございませうね。」

「まあ、氣味が悪いことよ、」とまた一人。

「はい、若旦那様、私なぞは、此年紀まで活きまして、飢饉年にも三度逢ひました。ハヤ人死がござりました、種々なものも澤山見ました。彗星も然やうでございます、後前で五度。人魂な、扁たい豆が大屋根へ降つたこともござりますなり、また稻蟲だと申すものが、西の方から、雲のやうに中空を飛ぶのも見ました。其時なぞは、白晝眞暗でござりましたよ。日蝕も、月蝕も存じて居りますが、お月様にこんな輪の懸りましたのは始めてでござりますで。」

「此お婆さんさへ知らないといふんですわ。皆ね、變なことを申しますの。やれ、大風ぢやあないかの、雪が降るのぢやあないかの、稻が枯れるのぢやあないかの、何のつてね。夫にお天氣がこんなで、まるで蒸殺されるやうでございませう、前刻地震がありました。お晝過に出た雲の跡もございませんから、何の道何か變があるんだらうツて、皆騒ぎなんです。」

「それでね、旦那、まるでもつて見當が着きませんから、これは一ツ、あなたに伺ひました方が可からう。何でも御存じないことはないんだから、御迷惑でもツて、然う言ひましてね、皆が集つて居ります處へお呼出し申しましたんでございますが、得心が參りますやうに、お講釋を遊ばして下さいまし。」

「旦那、大風でございませうか。」

「私は何處かに海嘯があるんだらうと思ひますがね、」

「嘘よ、雨が降るんだわ。」

「雨が降るなあ、お前違ひますね、あれは眞中に星がなくツて、當前の暈なんぢやあないか。」

「だからさ、大雨だらうと思ふの。」

「大雨なら結構だけれど……」

「だから、結構さ。」

「何を言つてるんだ。」
「お竹さん、默つてお出でよ。お前。」
「はい、」と大きく言つて默つてしまふ。
「私にや分りやしない。」
「そんなこと仰有らないで、何卒お敎へ遊ばして下さいまし、何うせ私達に理窟は分りますまいけれど。」
「だつて知らないもの、私もはじめて見たのだ。」
「それでも御本にはちやんと出て居りませう。」
「浦里さんの旦那は、いくら知つたかぶりがお厭だからだツて、恁ういふ時お敎へ遊ばさないのはお怨みです。」
「ねえ、私が言つたつて誰も取合ひはしませんけれど、私はエレキの所爲だらうと思ひますがね。」
「おや、エレキなもんだ。」
「お竹さんは、默つてお出でよ。」
「はい。」

「朋友にこんな事に悉いのがあるから、其に聞いて談して上げよう、私は本當に知らないから。」
「いえ、御存じのない筈はございますまい。」ときつぱりと言つて、後馳せに來たのが一人、つかつかと出た。

四十九

路を開いて、
「おや、おかみさん。」
「はい、これは皆樣。」と、眞中へ出て來たのは、あしきを拂ふの、かみさん、植木屋の辰が女房で、玆に繰返して言ふまでもない、鷄の宵鳴、犬の遠吠、天火、人魂の識者である。
襟を合はせて時次郎に立向ふと、然もものありげな樣子で、
「御存じない、お知んなさらないッて、旦那もまあ、あなたが御存じなくツて、誰が知つて居るものがございます。人は恁うやつて居ります內に、我身の知りませぬ種々な業を造りますものでございましてね、一搦づゝ僧に供養した米、一錢づゝ貧乏人を賑はした錢が積ると、冥土には、いつの間にやら米の庫、金の庫が出來て居ると申すではござりませんか。それでございますから、もの事といふものは、仇や疎に心得らるゝわけのものではございません。もし旦那、」と極つて、

更めて時次郎を呼び懸けた、女房は前に進み、

「旦那、お宅にお客様とお二人でお談話をなすつて、何にも御存じない間に、この世の中には何んなことがあつたと思ひなさいますね。」

「何。」

「いえ、お月様がこんなにお成り遊ばしたではございませんか。むかし孝行な女が、身を投げて死にました、そのために三年旱をしたと申します、佐用姫は石になり、鬼になり、蛇になつた例もございますよね、あなたが御存じなくつて、誰が知るものですか。

忠義なものが無實の罪で斬られます時に、雨が降つたと申しますよ、お天道様の涙でせう。いつかもお葬式の時に曇りました。人の身體は天地もおなじだと申します。恁うやつて果も限りもない空も、人一人のために、其の色の變る時がございますよ、旦那。私はね、お月様が、こんな不思議な笠を召しましたのはね、長屋に人死があるしらせだと思ひますが。」

「厭な、おかみさん。」

「飛んでもない。」

「おゝ、鶴亀だ、」と口々にがや〳〵といふのを、きちんと帶を緊めた、麻襦袢の襟を襲ねた、毛

一筋亂さない、胡麻鹽の小な圓髷、目に濁のある、面長な、頬の凹んだ、恰も市巫のやうな顏色で、見廻して、

「其が何うでせう、只今參ります道でも、氣を付けて見ますがね、何處にだつて、這麼にわあわあ言つて騷ぎ立てて居るものはございませんよ。道を歩いて居ります人も、知らぬ顏をして、ちらほら此月夜を通つて居ります。其といつて一ツお長屋ばかり恁うやつて氣に懸けますといふのが、ソレはや何かの前兆だらうではございませんか。同じ處を一ツ時、一緒に同じものを見て歩いて居て、天火を見る者も、見ない者もあります道理で、これが定つた因緣ごとでございます。」

と憑ものしたやうな調子で、宣り示すが如く說いた。占も見る人のことだから、皆寂然して顏を合はせる。

と頷いて、

「ですが、何うもお前様方にかゝつたこツちやないのですよ。心持を悪くなさいますな。氣遣はれるのは、もつと、年紀の少い、美しい、おとなしい、內氣なお女でございませうね、私は思ひますがね、旦那、御存じで在らつしやいませう。」

時次郎は驚いて默つた。

五十

「ですから、旦那、あなたが御存じでないことはございますまい。是が其の知らせだとして見ますれば、お月様をこんなになすつたのは、あなたなんでございますよ。」

「可哀相に、あのお澄さんを、何だつてまた、旦那、あなたは、早く世話をしてお上げなさらぬのでございます。

お長屋中が、寄ると、觸ると、心配をして居ります。氣の小い、心細い、あんなお女ですから、それはもうねえ、あなたの事だといふと、甚麼だとお思ひなさいます、朝晩佛さまいぢりまでして、可愛いんぢやありませんか。

髪の毛一筋でも、あなたのお氣に觸れまいと、謹んで、嗜んで、然までに思召しはしますまいけれど、夜だつて、おち〳〵寢ついてお出でぢやあないやうですもの。御飯炊きに參るばかりで、別々にお住居は餘り情ないつて、然う申しますのでございますよ。

先刻、日が暮れたのに、灯も點さないで、座敷の隅に突俯して泣いて在つしやる。小さな弟さんは、おど〳〵して、をばさん〳〵つて、呼びに來ましたから、何事だと思つて、行つて賺して聞きましたがね。

旦那、いつになく、いえ、今迄に例のない、あの女の弟さんが、お庭を荒らすのを、お叱りなさいましたさうでございますね。

何かお氣に障つたことを申したさうで、あなた、お眼に留まらなかつたさうですけれど、背後にお澄さんが一緒に着いて居たんだから、お叱りなすつたのを聞くと、正直な、氣の小い、あのお女の胸には、甚麼にか、其が應へましたでせう。

姉の根性が根性で、爲つけが惡いから弟があれだと、まあ、然う思つて、はつとしたもんでございますね。

是が、いつも荒々しい、邪險な、亂暴なお方なら、恐いばかり、あやまるばかりで、甚麼氣の小さいのだつて然程迄に思詰めはしますまいけれども、ツイ大な聲でものも仰有らない、優い方ですもの。叱言は仰有らないと知つてながら、お氣に障るまい、御機嫌を損ねまい、と始終はらはらして居る處へ、さつきのことで、あゝ、もうこれは愛想を盡かされたと、心から然う思つてお了ひなすつたんださうですが、こりや然うでございませうとも。三年に一度言はるれば、一寸した叱言だつて、よく〳〵の事だと思ふと、申譯のない處へ、お顏を見るやうになつてから、始めて、然もね、どぎつく仰有つたから無理はございません。で種々お氣の休まるやうに賺しましてね、長屋中が立退いても、旦那の御機嫌が直るやうにお詫びをして上げますからつて、宥めた

んですが、(いゝえ、をばさん、何もお叱りはなさいますまいけれど、那様奴がと思はれたのが情ない、もう取返しがつきません)ッて泣いてばかり居るのでせう。お澄さんの思ひぢやあ、千日の行を一時で破つて了つたくらゐ、氣落をしておしまひなんでございますさ。たゞもう背を撫でて置いて、是非お目に懸つてと思つて、駈出して來たんですが、旦那、あの女は覺悟して居りますよ。」と眉を顰めて目を睜つて、其の巫女のやうな人間でないやうな、憑物のしてるやうな、蒼白い、痩せた顏で、ぢつと見たが、月あかりでぼんやり枕上に立つた嫗の姿をした鬼のやう、語り果てて眼を瞑つた、人に聞かせるでもなく、

人は變り、水は變り、變らぬものは五尺の弓、一度鳴らせば寺々の佛壇位牌に響くなり——

と唱へて屹と見て、

「あなた取返しがなりませんよ。」

五十一

悚として、時次郎は身に染みて其の言ふ處を聞いて居た。

「屹度、長らへては居ない氣なのでございます。此まゝ打遣つてお置きなされば、いつとも分りませんがいかゞでございます、氣に懸るお月様の變つたお姿ではございませんか。」

「そりや何とも分らないわ。」

「お月様は兎も角、そんな様子ぢやあ、そりやあの娘なら全くだ。」

「ね、いえ、全く其の知らせに違ひないのでございます。石になつた例もあり、蛇になつた例もございます。雨の降つた例もございますもの。それが私達のやうな者なら、死んだつて、生れたつて、犬が一ッ吠えるぢやありますまいけれども、其があなた、あの無垢な、可愛い、お澄さんのことなんですから、あはれにお感じ遊ばしたのでございますよ、其に相違ないのでございます。」

「那様事があるものか、」と時次郎は、詮方なげに苦笑する。

「いえ、もし其でなくッちやあ、滅多に這麼事があるものではございませぬわい、私は此年紀になりますが、」

と、先刻から曲つた腰で、殆ど鼻を地の上に着けながら、むく〳〵白髪頭ばかりを振つて、張子のやうに耳を傾けて巫女の說に服して居た嫗はいふ。默つて居ると、—また、例の、豆が降つた、蝗が飛んだ、水が出た、梅干が腐つたと言ひ出すだらう。

時次郎は遮つて、

「何を下らない、婆さん。」

「それぢやあ旦那何うしたんでございますよ。」
「ですからお聞き申すんぢあございませんか、何ういふ譯で、あんな。」
「エレキよ、」と小さな聲で背後から言ふ者あり。
「お竹さん、默つておいでよ。」
大きな聲で、
「はい。」
「番ごと凹まされますね。
「叱！」
「だから私は知らないから、朋友が知つてるから聞いて上げようといふんだ。何、左も右も不思議な事でも何でもない。」
「そりや、不思議な事はございませんとも。何の不思議な事がありませう。あなた當前のことでございます。お澄さんの思なんで、天道樣がお知らせですよ。本當にあなた、皆あなたの所爲ぢやございませんか、」
「何を下らない。」
「ん、やね、ものは爭はれませぬものでございまして、私が十六の時でござりましたが、」と八十

の人がまた始める。
「困るな。」
「何もお困りなさることはございませんよ。」
「本當に旦那、串戲は止して、お澄さんと一緒になつて、お上げなすつて下さい。」
「お長屋中の者あ、そりや、あなたとお澄さんの事と言ふと、那樣ものぢやあないんですから。」
「お竹さんさへ、あれですからね。」
「また。」
「叱！叱！」
「皆お心一ツなんでございます。あゝやつて氣落しをして在つしやるんですから、あなたがお心で愛想をお盡かしだらうと言つて、鬱いで在つしやるんですから、叱られたといつて泣くのとは違ひますよ。優いお言葉をお懸けなさつた位で、彼のお娘の命の綱が取留まる譯のものぢやあございません、一緒になつて、安心をさしてお上げなさいまし。まあ。お月樣を御覽なさい、恁うして居られはしないではございませんか。」
「何も。」
「いゝえ、其れぢやあ何うしたのでござりますよ。さあ。」

「だから山北に……弱るな、」と言つて、時次郎は、束ね髪、丸髷、銀杏返のばさ〳〵した、女達の天窓を透かして出るにも出られない、向うの破築地に沿つた一筋の小路を望むだが、目を留めて、ぢつて見て、伸上るやうにして嬉しげに叫んだ。

「山北、山北。」——

月の影に、脊の高い男の黒い服は、大跨につか〳〵橋杙が歩いて、おのづと流を瞻める眼に近づくやうに大きくなつて、月明に傍へ來た。

「何うした、時さん……少し談話があつてな。」

言葉を拂ひ退けるやうに手を掉つて、

「可いから、聞くけれど、まあ、これを一番聞かして遣つてくれないか、あれ、あれだ。」

背後には藪がある、周圍は短い薄の葉が一面に茂つた三角形の小さな丘で、月は、目の下の徑を隔てた向ひの小高い崖の、樹と、草と、眞黒な燒跡の外圍の煉瓦が鼠色になつて屋根もない、切支丹館の上の處に、どんよりと出て居るが、薄ら蒼い其の圓い形の外に、かすかに、紅と、紫と、綠と、藍など、水の中の虹の如き輪がかゝつて、少し間を置いて、モ一ッ懸つて居る。二重で五色の暈であるが、針の尖で突いて、一點づゝ彩つたやうなものが、幾百千萬億ともなく群つて、そして、びつしより空一面霧をふいて濡れて居る。まるでうつし繪のやうである。

山北は無造作に、

「これか。」

「ものの前兆だの、何のッて、いろんなことをいつて困つちまふ。」

「む、」と少し仰向いた口許に微笑を含むで、間近だが、ちらほら、ちらほらする、人々の、蹠つたり、立つたり、斜になつたり、横に向いたり、足を揚げたり、まばらに見ゆる影法師の中に、長い影を薄の上に淡く浴びせた、理科大學の學生は莞爾として立つ。途端に月の前を烏が二羽、黑い十文字になつて飛んだ。

「あの、黑い烏、それからお前さん方は、これを、不思議だの、奇代だの、と言つて騷ぐ前に、赤い色、翠の草、紫の雲、白い蝶々を見て、何故吃驚しないのだ。」

五十二

「何だつて、こりや、待つておくんなさい、待つておくんなさいよ。交番へ屆けるなあ見合はす事だ。辰さんなんざあ。何、此奴がこッた、巡査さんが來たつて留めるんぢやあねえ、叩き殺したつて、お政府でも大目に見て下さる。官許殺人犯だなんて豪氣な事を言つてるましたけれど、さうなると、お前さん、一番に足袋屋の裏口から戸外まで、身體を突通したやうになつて遁げた

ぢやあありませんか。うつかり屆けたり何んかして係合は恐れまさ。
え、然うさ、辰さん、油屋ね、交つて居ました。然うさ、未だ七八人も居ましたぜ。妙な月の色なんで、女小兒がわあ〳〵いふのを幸に、浦里の旦那をおびき出さしてしまつたもんでがす。
(大變だ、一寸出て下さい)なんて大手から連れ出した時分にやあ、搦手へもう人數が廻つて居たんでね。いきなり蹈み込むと、ばた〳〵といふ騒ぎ。洋燈が危い、ソレといふ間に、眞暗になつた。油屋が聲で、(若旦那の家だ、座敷を荒すな〳〵)ッて言ひました。然うする途端に、どやどやと人頽で、土間へ、お前さん、ずる〳〵と引出した、敷居の上を横倒にして、夜叉殿が髻を引摺つてたなあ辰さんだ。私あ格子戸から覗いて居ましたッけが、唐突だから驚いたね。騒ぎが豪いんだから、退つて見て居ましたがね、打つか、蹴るか、高が袋叩きだらうと思つてますと、折り重つて、井戸側で、お前さん、畜生！ アレエといふ悲鳴だ。野郎が黑だかりの中に、手と足が、ちら〳〵動いて、お前さん、底光がして照々してたのは、帶ですぜ。
阿魔あ、此家の旦那を誑し込みやあがるやうぢやあ、合點がならねえぞッて、辰さん怒鳴つてました。
お澄さんが可哀想だ、汝を、と油屋がまた喚きまさ。彼奴あお澄子のことといふと命が入らないんだつてね。ばた〳〵して居ると、重が懸つて、これだ、此の井柱が地響を打つて、お前向う

へ打倒れた、柱あ輕いし、細いから、何でも、これで、一ッどんとやつたらしい。やり方が總て手暴うがす。尤もね、打處が悪かつたと見えて、其切だつた樣でがすよ、脆いものだね。え、お前さん、皆賭場へ風が吹込んだやうに遁ッちまひましたさ。嫣々手合はお月樣の騒で彼處へ詰めてますし、旦那は勿論だ、長屋中まるで明巢だね。寢てるなあ病人で、何うすることも出來ないんでね。差配さん、お前さん唯名義だけで、長屋の事あ何にもお構ひなさらない事は知つてますけれども、外に相談相手はなし、それ尋常事ぢやがあせん。
人一人の事だから、お呼立て申したんで、何ね、何うせ此人なんざ、惜くも何ともないけれど、向う見ずで皆が餘り亂暴でさ、いくら浦里の旦那の爲だつて、是ぢやあ長屋中珠數繋で、下手人に出にやあなりません、大事だ。お前さん、何にも知らねえ事だけれど、それでも何でさ、矢張、まるで町が違つたやうな譯にや行かねえんですが、交番へ屆けるなあ見合はせる事にして、醫者でも呼んで參りませうか、出來る事なら內々にしたうがすが、こいつあ屆きますまいね。」
と少し震へながら慌てて居る。源はさま〴〵にして呼活けようとした亂暴人が、多人數で汲上げて置き去つた釣瓶を見て、踞むで突込むだ掌に水を掬つて、死體の口へ注がうとする。
お禮の死骸は、井戸端に竝べて、仰向けに倒してあつた。

五十三

づッしり水に濡れた土を枕にして、横さまに捻られた、摑み餘る黑髪は、井戸側に支へて鬢の浮いたやうに膨らむだ末が、肩に懸かつて亂れて居る。新網の空屋で、仰向に寢たまゝ、亂れ髪を片手で搔摑むで、眞蒼な顏を見せながら、身動きもしなかつた時もこんなだつたらう。衣紋は亂れて、眞白な胸は月明に蒼ずむで現れて居るが、肱を曲げたまゝ、乳の下で背負上の彼の幅廣な縮緬を、兩手でしつかりと持つた、胸を反らして背を浮かした蝦夷錦の帶は、結目も解けないで、身を固く爪先を揃へて居る。あたりは薄白い、どんよりとした月明で、月の下に、廂、樋竹、敷居、格子戶、眞黑に口を開けた戶袋など、畫のまゝで、路地の隅々、眞中、死骸の枕邊には、井の柱が二ッになつて、十文字に組違へて倒されて居た。

色の變つた死骸の顏は、たゞ其の仰向いた高い鼻のあたり俤に立つて見えるのを瞬もしないで、ぢつと見て居る。目が窪んで、汚點だらけな、額の小さい、天窓に薄毛の生えた、肩幅の狹い、腹の膨れた、何をするか知れない隣家に住む者のない、滅多に戶外へ出ぬ、日が暮れても灯を點けない、疊の上へ火を竝べる、焦げて燻ぶるのに水を掛ける、ぢゆッといつて消える、また挾み出して、また竝べる、三百六十五日が間、同じ事を爲て居る異樣な差配は、其の夏といへど

も雨戶を開けない、濕氣臭い、蜂の巢のやうに鼠の穴が縱橫に開いて居る、襷のやうに蛇の居る、黴だらけな、蜘蛛の巢だらけな、疊のぶく〳〵した、燒焦で充滿た、じと〳〵して薄暗い、壁で燐火が光りさうな、薄暗い、殊に灯を點けないから眞暗な、奇怪極まる家から、お禮が殺されたといふのを聞くと、とつかは、路地內へ出て來たので。

出た後では、一時霰が亂打つやうに鼠が騷いだ。

蛇が這込むのを見て、屑屋は背後へ寄つても、動きもしないで閉めて置けと言つた親仁だから、差配が人に呼ばれた爲に戶外へ出たのは、其の時がはじめてであらう。

出る時、口の邊で、指の先ほどな眞赤な火を一ッ、火箸で挾むで、吹起し吹起し、七色で二重の輪の懸つた月の下を、井戶端までやつて來たので。源がしどろに顚末を搔撮んで語る內も、絕えず、氣を注けて、吹いて、吹いて居たが、顚倒した女房孝行な人は、死骸に目が眩んで、ちつとも氣が付かずに居たらしい。

談話を聞き〳〵、火を吹きながら、井戶端に立つて、一幅荒涼たる長屋の畫の中に、赤と、青と、紫と、藍の薄りとした輪の二重に懸つた月明で、面影は白く、髮は黑く、帶の錦も幻のやうに橫はつた、此名だたる夜叉の末路を目も放たないで見て居たが、何を慌てたか、源が釣瓶から水を掬つて、死骸の口へ水を注がうとするのを見て、

「馬鹿め、水を浴せたつて活きるか。其は死んで居る。死ぬ事になつて死んだものが、水を掛けたつて活きようかい。辰が手を下ろした、誰ぢや彼ぢやというて、長屋中の者の知つた事ぢやない。ちやんと死ぬやうになつて居て、死んだのぢや。で、心配をするな。下手人は一人も出さぬ、退け、其處を退け、退け、」

と言つて、拂ひ退けるが如く片手を掉つた。

五十四

差配が口ぶりは、恰も測り知るべからざる、力あり、能ある魔神が、人間を邪魔にして搔退けるやうな可恐く威のあるものであつたから、源は思はず屈んだなりに退いて、目を睜つた。

其には目を懸けず、差配は、悠々と落着いて、死骸の傍に踞つたが、乾びた皺だらけの固い手で、衣紋を開く、と、見る間に、火を、其の眞白な胸の上に載せた。赤いのが、じり〳〵と鳴つて乘る。カラリと火箸を棄てたのが井戸端に當つて落ちた。

源は呆氣に取られた。

「お禮、何うぢや、見ろな、到頭おれが言つた通りになつた。人の怨といふものは可恐いものぢや。汝は、此姿を見せる爲に、今迄俺を殺さずに置いた。な、飼殺しにして置いてくれた。汝の

持家に置いてくれた。な、我は又、汝の恁うなるのを見ようと思うて今迄活きて居つた。何うぢや、言ふ通りになつたではないか、何うぢや。」

と、錆のある聲で言つた。が、白い唇の突出たのを押向けて、ぶッ〳〵と赤い息を吹いた。じりじりといふ、お禮が雪のやうな胸の肉は煮えた。其の胸に渡つた青い筋も、中絶えがして燒けたであらう。息の懸る毎に、パッと薄紅梅に咽から頰の邊半面に火が映つた。

「何うぢや、お禮、お禮、俺はな、汝を燒殺して遣らう〳〵、といつでも然う思つて居つた。其の位な事をされる覺はあらう。」

血の湧く音がした、肉の焦げる、臭がする、又吹き起した時、顏は明るくなつて、紫色の唇を洩れて、前齒がちらと見えた。ものを言つたやうな、死骸は頷いた如く、水晶のやうな目を開いたと見たが、仄になつた。

「可、可。」と言つて、火から唇を放すと、差配は衝と立つた。手に釣瓶を持つたが、倒にして注いだ。一幅の銀の布はお禮の胸へ簾のやうに分れて懸つて、金色の錦の帶の色と亂れ合ひ、姿は判然となつて、濡色を帶びて、つら〳〵と全身に艶を帶びて、絞つたやうに細くなつて瘦せた。

風一陣、サラ〳〵と來て、其の黑髮を動かした。が、死骸は冷灰の如く横はる。

ぢつと瞻めてカラ〳〵と笑つた。差配は直ちに口を結んで、目を瞑つて、空を向いて嘯いた。

丁度、釣瓶を返した時、月の暈は拭ひ去つたやうに消えたのである。

はじめは、回生のお呪だと思ひ誤つた源は、餘りの事の凄じさに、顏の色を變へて掌に脂汗を握り詰めて火を吹くのを見て居たが、水を浴びせたときに、頭から寒くなつて、思はず目を塞いだ、軈て心付くと、差配の姿は既に見えなくなつて居た。

此處へ、薄の丘から——一行はどやく〳〵と歸つて來た。が、山北は彼の二重にして五彩なる月の輪に就いて、如何なる說明を與へたらう。

要するに、其の學說は知らず、巫女がお澄のあはれさを天が感じたと言つた說は當らなかつた。此夜は、お禮の罪惡が滅した夜で、又差配が彼の家に住んで彼の行を積んだ、其の呪詛の念が達いた夜であるから、恐らく其等の氣を受けた月夜の虹であつたらう。

さて其の虹が消えた時のお禮の姿は、渠が肉體の此世にあつた中に就いて、最も優美な、最も高尙なものであつた。

だから、其の姿を見た時、山北はつく〳〵感じて、

「浦里、一層此死骸と結婚しないか。」と言つた。

山北は一切、時次郎が敢て然なすを憚らない事を知つて、且つ其非を知る人物である。

さらく越

一

「じやつく、じやつく。」と高らかに呼びかけて、人指を折屈めつゝ、うつくしき髯生ひたる唇に齎らしたるが、口笛を吹きも鳴らさで、其まゝ力なげに手を垂れぬ。

結束したる一個年少き威儀ある銃獵の客は、雪深き山のトある崖路に彳みて悄然として首垂れたり。

渠が率ゐたる猛犬は、今朝未明の雪吹の中に其行方をぞ失せしなりける。

（じやつく）だにあらばと思へる狀にて、客は前後を見廻はしけるが、詮なげに何やらむ口に呟きつゝ、衣兜の中、搔探りて、一葉の繪を取出しぬ。

此山中の圖なるべし。白紙に鉛筆もて縱横に細き線を敷きたるに、處々朱もて圓き點つけたるを、立ちながら渠は左右の手をのばして開けり。

猛獸打の獵銃を斜に負ひたり。銃口は鋭く天を指して、漆黑なる雪雲を貫くが如くに見ゆ。長き外套を被りて、ずつくの扣釦、草鞋の紐、引緊めて堅く結びたる、たけだちよきほどなる姿、

甲斐々々しく、圖を瞻りて俯向きたる深々と被れる頭巾に籠めて、眉のあたりこそくらけれ、面わかうして、鼻隆く、頰痩せて唇の色朱きなり。

銃獵の客は、圖を瞻りつゝ、一たび眸を放ちて、前面、脚下に、深さ千仞にしてさゝやかに蒼き海面を遙に望み、背後の方、高き百丈の峰雪を被ぎて、頭の上まで一なだれなるを仰ぎしが、雪一山を封じてより幾日ならむ、右の空にも、左の天にも、日の光洩れざるに、轉た愁はしげなる色あらはれて、其眉を顰めしが、またうつむきて圖面に望みぬ。

時に沈々として轍の音、積れる雪の上に近々と聞えしが、幾もあらず、一列を造りて、黑きもの、長く、きれ〴〵に、一個づゝ五十歩が程連りて、こゝに彳める獵者が前を過らむとして、いまあとさきになりて、鼻の前に來れるは、炭薪などの燃料を堆く積める荷車を、大なる牛に曳かせる漢なり。おなじものおなじほど積みて、齊しく牛を曳きたる荷車二輛、これよりさき獵者の前を通り拔けつ。またおなじ荷車、また二輛、あとよりぞ續き來たる。こは蓋しこのあたり約六里が間、近き頃切通したる幅狹き新道にして、高嶺の半腹を通ずる一條の新道なるが、一山いたる處、人の丈より高く雪の積れるにもかゝはらず、此徑のみ前なる海面より吹上ぐる風と、高嶺より吹おろす風と相擊つて、冲天に渦き、渦き、轟然として舞去る吹雪のなかに、積れる雪を拂ひ行くにぞ、鳥の通ふべくもあらざる時も、雪は行人の膝を沒するに到らず。牛に曳かすれば車

を横ぎることを得べきが故に、山間の孤村より、次なる驛に風なき日はかく炭薪などを曳出すなり。

これにこそ便を得けめ、打わびたる獵者は面をあげて、今恰も其前に來れる五輛の荷車の眞中なる、件の牛引を呼懸けて、

「一寸、一寸ばかり、」とせはしくいへるを、牛曳ける漢は、頰冠したる耳に聞き留めつ、ともあらで此方を見たり。

「……大枝までは此處から何の位あるね。」

「あんちう、大枝だ。」といひかけて向直り、綱引留めて立停まれる牛曳の、眼は窪み、頰こけて、眉太く、面長く、色黑き年配四十有餘なり。

「まだ餘程あるか。」と、一足前に出でし時、斜めにかけたる銃の口は、一搖れ空に搖めきて、白く閃然とせり。

二

懇に問ひ寄りたる年少き獵者の狀を、天窓より爪さきまで、つくづくと見たりしが、牛曳はこれに答へむとはせで、いそがはしくあとさきなる己が仲間を見まはしつゝ、

「權、こら、七、やい、待てやい、待てやい。」

と聲高に呼留めぬ。

獵者は其淸き眼を圓にしつ。

呼留めたる牛曳は悠々として、太く落着けるものいひなりき。

「やい、大枝迄何里あるとけつからあ。はゝゝゝはゝ。此奴がよ、何うだ。己をばとらめえて、少し、少しか、大枝までは何里あるとけつからあ、何うだい、權。」

といひかけて、冷かに其あとより續ける脊の低きを顧みたり。

「四里ばツかりぢや、何うした。」

「馬鹿だな、鼻ツ垂。」とばかり、ぎろりと睨めながら、牛曳はくるりと前を向き、

「やい七、手前は分つたか。」

「何がよ。」

「分らねえ、かう、此處に立つてござる此人がよ。聞きねえ、大枝まで何里あるとおつしやるから、それで其の、分つたかといふことよ。」

「何がよ。」

「え……止しやあがれ、分らねえ、チヨツ、おう〳〵、そつぱうのおぢい、些少承りませうか

い。」と、のびあがりて眞先なるに言ひかくる。
振返りて北叟笑みしは、老いたる小さき爺なりき。
「十萬億土といふからの、途轍もなう遠からうよ。」
「はゝゝゝ、」と快げに打笑ひたる、眞中の牛曳はしたり顔に、
「なあ、權、何うだ七、分つたか、一番あとの山の芋、何うだい。」
「謎でぶたねえで、やツつけろ。しち面倒だやい、引導渡せ。」と喚きもあへず、綱引すててつかつかと轅二ツ縫うてぞ寄りける。
「ゆる〳〵とやれよ、せゝつくと咽喉につまらい。」と、眞中なるは立塞ぎて摑みかゝらむず一人をおさへながら、嘲けるが如き音調にて、故らに獵者の前に腰を屈め、
「へゝゝゝ、お前樣がお尋ねなさります路は、いかうハヤ、遠い遠い處ぢやげにござります。」
一個は背後に拳を握り、他は額づくが如く故とらしき狀したる、彼と是とを瞻りつゝ、獵者は身動きもなさざりき。
「其代りぎやつといや、スウとの間だ。わけやねえ。」拳を上げて一人は打たむずべく裝ひたり。
「お前達ア何をいつてる。」と、一歩の前ながら片手に地圖を握り持ちぬ。
「何もいふんぢやねえ。こいつをくらはせるのだ。こいつを、」とて、また其拳をぞ掉上げたる。

一人は楯になり、身を以てこれを押へながら、
「騷ぐない、かう靜にしろ。此方人等が手を出しやあ皆かゝり合だ。お商賣もんで、こゝに牛がそれ五頭居らあ。背後は崖だしな、前は海よ。あとさき押圍んで並べて置いて、皆が一齊に獸が臀を引ぱたいて、刎返して、打飛ばすんだ。己が此胸にちやんとあらあ。これ、やい、汝達が下手鐵砲でポン〳〵遣れるやうになつてから、此方人等おちついて山ン中あるかれねえ。狼でも、山豺でも、屁でもねえが、何處から逸れて來るかも知れねえ飛道具をぶらさげて、惡い道樂をしやがる。
女房や、小兒なんど毎年よ、彼處でも、此處でも怪我人だらけだ。汝、何の故だと思ふ、いゝ處で出つくはした。五疋の牛ども一齊にけしかけてやる、覺悟しろ。」と凄まじき血相するにぞ、獵者はものともせざりしが、こゝにいたりて惑へる色あり。

三

さりながら、いふことのあまり意外なるに、半は、眞に然か成さんと思へりとも推し得ず。五人の牛曳等のものありげに眞顏つくりて、われを弄ぶこそ可笑しけれ。獵者は莞爾として微笑みていふ。

「つまらないことを！」
「何がおツつまるか、見ろやい。」
「やッつけろ！　やッつけろ！」
「構ふことあねえ。」と、開き直れば、權、七といへる二名の牛曳も、やゝ其意を得たりけむ、身構へして、
「やれやれ。」とぞ叫びたる。戯言とは覺えずなりたり。
獵者は色をやゝかへながら、事もなげに叱りのけむとす。
「馬鹿な！」
「馬鹿が、何をするか、見やあがれ。」
「えゝ、馬鹿。何をするんだ。お前達は……」
と言やゝ急になりぬ。
「何をするも彼をするもねえ。下手鐵砲の見せしめだ。汝が手と足とウ別々にして打ちやつて置いて見ろ。うつかり山ン中へ入つて、鐵砲なんか放したが最後、天狗様あ裂しやるちッて、あとの奴等寄附かねえちゆうもんだ。貢に上つただ。因果ぢやで、斷念めろさ。」
「此山に入つたのははじめてだ。」と獵者は面を正しうしつ。

「昨夜はじめて此地へ來て、大枝の鍵屋といふのに泊つて、夜中から此山へ入つたが、去年も、一昨年も、ツイ來たことはないから、お前達の家内の者に決して迷惑をかけはせぬ。
また狙も極ないで誰が彈丸を放すものか。昨夜、私が大事の（じやつく）といふ犬が雪吹の中で、何か熊とも思はれる大な獸に取られた時、追懸けて一度打つた。それッ切、彈丸を籠めても見ないんだから、無法なことをいふもんぢやあない。」
と諭すが如くにいひたる面色、其身に害迫の加へられむとするを危むよりも、むしろ山賤等の癡愚にして說き易からざるを憐むが如くにぞ見えたりける。實に、其言へるが如けむ、背に横へたるは正に猛獸を打つべき筒なり。狼か、熊か、誰か覺なくしてこれを擊たむとし試むべき。この人蓋し雀を打たむとして、物洗ふ女を傷くる亞流にあらず、渠等もし識ることあり、獵者が言を確めんとならば、其腰に帶したる帶革を見よ、幾十個の彈丸唯其一を逸しあるのみ。
人を喰ふ鬼こそなけれ。山深き片田舍には、かゝる輩もある國なり。逸りに逸りたる牛曳等、何とてこれを肯ずべき。
敵怯めりと見て、いやが上に勢づきぬ。
「何をいつてるんだい、やい、これが人を喰ふ、これが人を喰はぬといふ、狼に二種はねえ。喰はねえけりや、いつか喰はうとしてるる奴だ。何がよ、汝の其毛色が氣に入らねえ。飛道具ウ擔

いで、筒服を着てる奴あ、どれもおなじ狼だい、合點ならねえ。」
「そりや、お前達、理不盡といふもんだ。」
「何だつて構ふことはねえのよ、何うだ何うだ、やい。」
「一番、お見舞申して見ろ。」
「此方人等知らねえぞ、五頭一齊に暴れ出すだ。ぶつかつたら其までよ。」
「愚圖々々いはねえでやつちまへ！」
と口々にのゝしり合ひ、綱を曳きすて、持場を亂し、寄合ひたる徒はら〳〵と別れ〳〵になりて、おのが牛を、皆見て、其心を得させむとす。一度其こたへある處を打たば、牛は直に狂躍せむ、あはれ、免れがたくぞ見えたりける。

四

「まあ、主公、此家にいらつしやいましたか、もう大抵お尋ね申したことではございません。」
嬉しげに、且つ懐かしげに、忙しくいひかけて、爐緣ににじり寄りたるは、獵者とおなじ年配なるが、こは脚絆、足袋穿にて、いま此處に入るとて、外套をば框に脱ぎて來つ。爐のむかひなる先刻の獵者にものいひ齋負ける狀、從者なるべし。

「御苦勞樣でござる。づッと寄つてあたらつしやれ。」
と顧みつゝ、獵者とむかひ坐して、背を此方に向けたり。こは此孤屋の主人にして、六十ばかりの老夫にこそ。若き從者は慇懃に會釋して。
「いや、もう、お世話になります。方々駈けまはりましたので、却つて暖いやうでございます。まあ、何にいたせ、主公御無事で、」といひて、恭しく額きぬ。
主公は面の色極めて好からず、うつくしき顏に憂はしげなる狀見えて、頷きながら、
「三吉、殘念なことをしたよ。」といひかけて、楫のさきに手をかさねたり。
「爾時、お見はぐし申したのでございますが、諸所方々探しまして、せめて死骸でもと存じましたけれど、かいきし分りません。」
「まつたく熊にでも捕られたらう、三吉。せめて(じやつく)でも居たらばと思ふよ。已はな、銃も失くしてしまつた。」といきつきて、氣高き顏をうつむけぬ。聞くと齊しく、從者は驚きたる色見えて、片手つきざまに膝を進めぬ。
「えゝ、それはまあ、主公、何う遊ばしたのでございます。」
「かさねぐ〳〵、もう話になるのぢやない。」と詮方なげなる微笑を含みぬ。
「こんなことを人にいつちやあいかんよ。」

「否、しかし何うも。」と從者はいと口惜げなりき。われもし傍にあらば、然はあらまじかりしを
と思ふらむ。
いま其あらましを聞きたるなり。
「處でぢや。」と老さらぼひたる孤屋の主人は榾焚き添へつゝ言を添へぬ。
「主公さまは何がソレ鐵砲をおかまへなされたね。若い奴等牛をしかけようとしてをるかい。こりやどつち道怪我がなうては濟むまいと思うたでの。ありや〳〵待たつしやれ、というて爺は通りすがりでござつた。眞中へ入つて、まづ、孰を是いとも非いとも親仁は申さぬ。なれども、それ彈丸で怪我をするは毎度ぢやで、此山に住むなればこの私とても鐵砲打は難有うないが、何も此人が必と其ぢやといふではなし、わけも見境もなく、途方もない、牛をかけるといふも滅相ぢやで、これは一番、其怨のある、おつかない鐵砲を、此方へお渡しなさるが可い。皆もそれで我慢しておけ、といふと、其で異存はない、とのことでの。
さあ、其道具お渡しなされませといふと、これは與られぬとおつしやる。牛曳等はそれならばというてせり立てをる。
何が素手で追拂ふ法もないではござらんだが、私がハヤえらう鐵砲嫌での、第一見りや立派な、品のいゝ、少い方が、御身分も定めしと見えたに、何のくらゐの價か知らぬ、鐵砲一挺、何程の

ものぢや、命がけにせいでも可いに、吝いと思うたで、故で渡さつしやい〳〵、とせりつめての。
鐵砲が大切か、お前様身體が大切か、とまで私の口からいうて、たうとう此方へ受取つて牛曳にやつての、荷車五臺追返したが、さて、聞いて見ると思の外でござつたよ。」
と片膝立てたるに兩の掌を合はせて組みぬ。
「お前さんの前だけれどね、ぢいさん、主公はねらひ打が、お上手だ、それは名人と申上げて宜いんだね。」
老夫は聞きつゝ點頭けり。
「さうぢやげな、さうぢやげなの。」

五

「まつたくなんだ、闇がりに針をお打ちなすつたことこそないけれども、銀貨を投げて短銃で宙をお打ちなさるのは見て居ますわ。
其位なお手並があればこそ、かう申しては何だけれど、人と喧嘩一遍遊ばしたことのない、全く腕押をなすつたこともないといふおからだで、猪でも熊でも來いで、山狩に一人、私のおともでおいでなさるといふもんだ。」

「さうぢやげな、さうぢやげな。」と老夫はまた深く頷きたり。
「氣恥かしいぢやあないか、三吉、もう此處でそんなことを言つたつて仕様がないよ。」と草臥さへ出たりけむ、うつとりとしたる狀なり。
「御様子もの、何か、まるで憑物が離れたやうに、茫乎なされて、いままでりん〳〵として天晴とお見上げ申したのが、急に弱々とおなりなされる。何か單身で、この山ん中を踏むでおあるきなさらうといふ見事な魂が、このやさ形なおからだから拔けてしまつたやうぢやつたで、いかゞなされましたと問うたらばの。
遠くで風が吹くのか知らぬが、それも獸の吼えるのかと思はれて、こんな奥山の雪の中をもう一足もあるかれぬ、と力ないお言ぢや。老夫もつけたらしいと思つたれど、よく〳〵尋ねると、いかさまさういふわけぢやげなよ。」
從者は面に血を漲らせて、
「かけかまひなし申上げれば、主公はお弱くツて、大の大のそれは呆れたほどの臆病でいらつしやるが、そのかはり不思議なほどの御手練で、御自分にも確に、それこそ神佛の加護があるとおんなじやうに信じていらつしやるから、鐵砲さへお持になると、何な處でも何ともお思ひは遊ばさぬ。なまじつかな腕前なんぞ、私は切物一個持たないでおともするよ。それでも、主公と一所

だと、何が來ようと恐いとは思やしませぬ。それほどの獲物だもの、定めし何なにお困り遊ばすか知れやせぬ。なあ、ぢいさん。」
「いや、さうでござらうとも、こりや、然うなうてはならぬ事ぢやよ。惡いことをしました。然うとは知らぬで、飛んでもない。何しろ一歩もあるかれぬとおつしやるから、いたはしうてなりませぬで、とやかう、ハヤすかすやうに申して立縮まつてござるのを此處までお連れ申したぢやが、家來と分れ〳〵になつたのぢやとおつしやるで、門に印をして置きました。まあ、よく來てくれさしやつた。何かの、主公はお前様がござれば、安心してお歸りなさらうか。」
「三吉。」
「はい。」といらへて、從者は其色をぞうかゞひたる。
「困るな。」とばかり主公は力なげにまた息つきたり。
從者は逸早く其心を得て。
「私一人なら、何とも思ひませんから直こゝを出立いたしまして、あしたにも皆でお迎に參るといたしませう。まさかとは存じますが、お心の進みませぬ路は、お見合せの方が宜うございませう。」
主公は沈吟して未だに答へず、さもあらばあれ從者に別れて、一人この孤家に夜をあかさむと

思はぬなるべし。さはとていふが如くむば、いかで一歩も戸外に出づべき、いたく鬱屈してぞ見えたりける。

「言つたやうなわけだから、御卑怯のやうだけれど、左様ではない。何百人といふ人のにかゝる大切な身體なんだから、一のものは半分でも御無事の方が可い、老夫さん、氣を注けてお泊め申してくれないか。」

折から一陣颯然として山風疾く吹起れる。

六

風の音凄まじく、深谷の雪を捲いて上げ、一團になりて吹あつる戸外は浪のあるゝに似たり。

「(じやつく)が捕られたのはこの風だつた。」

「こんな暴風でございました。」

主從は顔を見合せて色を變へたり。從者はまた、

「かう荒れ出しましては、一層お泊が宜しうございませう。ねえ、老夫さん、賴むから。」

膝頭に掌を組みたるまゝ、爐の隅つ方に小さくなりて踞れる孤家の主人は、打傾きてもの案ずる狀なりしが、風の音に耳を欹て、むくら〳〵と頭をあげたり。

「お泊りなされて構ひませぬがの、まづ、待たつしやれ。些少聞かせます事がござるよ。やつとな、」

腰をのして立ちけるが、覺束なげに歩みたる、左の片足跛ひきずり、且つもたげて、やせたる身體もてあつかふばかりに見えぬ。主從心ならず其後姿を見てあれば、やがて、襖の蔭より切尖を紙もて卷いたる一口の短刀を持て歸りて、どさとまた舊の座に着きぬ。

このおやぢ、こたびは兩膝をたてて兩手を組み合せたるが、語るやう、

「毎度でござる、此山の下を流れまする川上には、澤山其鮎が捕れますで、村の者が連立つて出懸けるでござります。尤も深入すると、尺のものは捕れるげなが、其處はハヤ此うしろの谷に近いで、夏でも山狗、狼など出ると、云うて近寄りませぬに、太い膽な奴が一人、夏になりかけのことで、まだしら〳〵とばかりになつたのにやつて來ますと、唸つて近う來るのが其山狗といふ奴で、得物は持たず、力づくでは叶はぬと、ちつと怯えた處へ、ハヤ眼を光らして一間、五尺と、じり〳〵じり〳〵と寄つて懸るので、九死一生、煙管を片手に握つて、づいと突出した處を、ぐツと嚙む。齒さきが煙管摑むだ拇にあたるにもかまはずに、足で脾腹のあたりを蹴つてくれた。此方も一生懸命なら、急所をあてられて飛退つて、立直つてまたかゝる、おなじやうに煙管を突出す。これへくらひつく處を、ハタと蹴る。また退く、またかゝる。で幾度か揉んだげにござり

ますが、あの獣もそれで弱つて、たうとう逃げてしまつたと申すことを、老夫が小兒の時ぢや、親どもの口から幾度も聞きました。

それを忘れずに覺えてをりましたので、毎度これで、」といひかけつゝ、主從が前に差置ける件の短刀を手にしけるが、右手に柄を取りて、刃さきを唇にあつると見えし、卷きたる紙を筒むくやう、くる〳〵とむいて取れり。

唯見れば切尖にこぼれありて秋水やゝ淀める見ゆ、近く血塗りたるなり。爐の上に翳しながら、見て片頬笑み。

「老夫と、里に居りまする女と二人が一年のくらしぢや。毎年この寒の中に熊を一頭宛これで突きますが、鐵砲ぢや槍ぢや、松火ぢやと、がや〳〵何か騒々しい。穴までぶら〳〵と出懸けて參つて、これを逆手に取つてのッそりと入ります。段々身體が暖かになる時分、奥の方に光るものが見えると一所ぢや。うゝワと吼つて飛懸りますワ、あゝ熊は獣の頭領ぢや。煙管如きの甘手は食はぬで、うしろへ胸をそらして置いて、」と其つむりをひきざまに、破風の方仰ぐやうに、右の足を膝つきて身構へながら、跛ひける其左の膝を前に衝と出せるが、ものとも知らず、縱横、刻刻に深き疵ありて、殆ど其形を辨ずべからず。

「不躾ながら、この小法師を突出してやると、いきなりわんぐりとくひついて、振切らうとする

處を。」

皺びたる掌をうちむけざまに、ものを按ずるまねしたるが、見る見る筋張り、しゝ肥りて、皮は破れむばかりなる、片手に劍を擬したるが、勢巖を貫くべし。恁る時、膝頭より垂々と血汐畝り流れて、痩せたる黑き向脛に垂れかゝる、トタンにはた〳〵と破風を煽りて、一道の吹雪一幅の白布の如く粉を亂し吹入りて、まつさかさまに老夫が頭上に浴びせたり。時しも下伏になりたる榾燐と燃えて、あかきなかに、粉雪を被げる老の顔、又唯一個の樵客にあらず。眼の光射るが如く、面の赤さ醉へるが如く、躍然として猛獣を搏する概あり。

驚き見たる主從の眼は、やがてまた一個の老さらぼひたる樵客を見き。座はハヤ正したり。短刀もさし置きぬ。風もやみて、爐火寂然として、灰ぞ冷かなりける。

「月輪をねらつて刺しますぢや。二刀とは用ゐるに及びませぬわ。年々のことでござりますから、何かハヤ料理でもするやうでござる。尤も引つけて、膝を嚙まして置いてする仕事ぢやで、武藝もなにも用るものか。突きはづす憂慮はなし、仕損じはござりませぬ。膝小法師が楯で、また餌でござるよ。昨夜もちやんと一ッ刺留めました。何時でも熊を突きますと、斯う山あれがするもんでござります。二三日經たねば留みさうもござりませぬ。惡いたづらが、はゝゝゝ、御免なさりまし。」とて、またちよこなんと踞れり。

眼まじろきもせで聞きたる二人、主公は肅然と座を正して、
「三吉出立せう。ぢいさん、……此刀を貸して下さい。」

湖のほとり

一

「何うした、何うして出來た。といふのか、此島が。然れば、先。」

脚絆、股引、草鞋の旅扮裝、小造なのが鳥打を頂いて踞つてる身體が小さい。斜に革鞄を引懸けたが、これは又度外れに嵩高で、譬へば此人物に釣合の細君を嚢に入れて、口を結へて携帶に及んだやうなり。着付は綿入に、書生羽織、裾を端折り、縮緬の手扱帶を緊乎と締めて、眞紅な裏毛の着いた、茶の鞣革の手袋を嵌めて居るが、新らしく艶なもので美しい五本の指が、透通つて見えるやうに、月影を浴びてきら〳〵する。と地摺に茂つた蘆の葉に、薫の高い卷煙草の尖を輕く當てた。

「腹を立てないで、お聞きなさい、よ、腹を立てないで。」

「何故、また、」と中折の黑の帽子を深々と被つて、傍に立つたのが俯向いて言つた。此の脊の高いのは運動靴を穿いて、背廣を一着し、新式の外套、袖は羽衣のやうなのを上に羽織つて居る。これは近ごろ新たに東京から赴任した、美術學校の教授で、紀夏信といふ畫の先生。

「何故つて、私のいふことが眞面目でない、人を愚弄するものだ何のつて、腹を立つと惡いからよ。尤も、私は恁と信ずる處を疑はないで言ふけれども、怒つちやあ不可ぜ。此石川縣河北郡の八田潟、其の花の形に似て居るから芙蓉の湖ともいふ、周圍六里の湖の、乾の方に、今朝、突然島が一個湧上つたといふものは、惟ふにこれは、鐵道工事のために、あの俱利伽羅の山腹を崩した、彼處の其の土、」

「お待ちなさい、腹は立てないが、もう分つた。御說は屹度其の土が、えゝと、大なる土龍に變じて、遙に地の中を潛つて、此處に形をあらはしたものだといふ。……」

「能く御存じで、」といひかけて、見上げる、見下す、顏を合せて、二人とも莞爾やかなり。

この一人は、東京のなにがし新聞の記者で、號を牛若三郎といふ、十六の時國を出でて九年の星霜を經た、今年二十六の秋、少しく志す事があつて歸省した。北陸道の敦賀線で、午前十一時三十五分、金澤の停車場に着く、直に其の親友夏信の寓居に、草鞋を脫いだが、道中恰も喧しく、八田潟の一隅に突然島が湧いたのを、今朝未明に發見したと傳はるので、豫て氣脈を通じて居る土地の新聞社の社員に使を走らして、二三聞合はせる處あり。軈て意を得ると、冠者牛若が其を嬉しがること〻いつたら無い。ちやうど晩秋の好い下物、此地の名物としてある黑鶇の附け燒で、ビールを馳走になつて居たのが、箸を置くと、件の新らしい、綺麗な手袋を嵌めて、脫い

たばかりの草鞋を穿いた。好事はこれに劣らず、夏信は江戸兒で、優美溫雅の人品にも肖ず。金澤人は落着いて居て粗相が少なく、火事のないのを殊の外遺憾がつて居るのであるから、後れじとこそ續いたが、いづれも健足、靴と草鞋と相讓らず、河北郡に着いて、爾く八田潟の畔に立つた頃は、既に初更を過ぎたから、それといふと、直ぐに群つた近廻の漁師、農人などは、不殘見物の地を拂つて、あたりに人の影法師もない、城下のものは明日、明後日を期して居よう。田舍は氣が長いから、何、又其内にといふのもあらう。

二

牛若は衝と立つて、

「いや、しかし、其の何だ、月明で判然とは見えないけれども、島の形が土龍に似て居ようも知れない、土龍も眠つてる形だ、何でも恁云ふ事は、弗としたことが緣を引いて其の要に當ることがあるものだよ。譬ひ土龍にやあ肖なくツても土龍と書くから、然うだ、龍のやうな形かも知れないね。いまに御覽なさい、屹度然うだよ。」

「又卓論を承ります。」といつて、夏信は笑つて唇に手をあてた。

「何恁麼事は私は無責任だ、豫言者ぢやあないのだから、辻占が違つたつて構やしない。別にま

た何うして恁麼島が湧出したらうと云ふ學說がお聽きなさりたければ、此處の高等學校に來て居る專門の地質學者で懇意なのがありますからね、それへ紹介せてあげませう。何しろ故鄉へ來なり早々、火事が無くツて貴方には氣の毒だけれど、浦島の殿樣と、櫻の乙姬、いえ、醫學士の二番娘、待ち給へ、私はこれを加越能のクヰインといひます。あの桂姬と結婚をしたといふし、ここに又島が出來た、大分面白くなつて來ましたな。」

茲に牛若が、浦島の殿樣といつたのは、國內隨一の大長者で、且つ德望家で、又未曾有の慈善者で、あらゆる乞食を救濟して、之を養ふ者數を知らず、城北の野に矮屋八十六棟を有して、養育院と稱へてある。然ばかり夥しい茱食の民を養ひながら、浦島家に食を乞はんとして赴くのに、隣國他鄉の者といへども、未だ一度も姓名を問はれた例がない。從うて此の大慈善者は、己が養ふ者の名を一人として知らないといふので、其の隱德の大なる一端が伺ひ知らるゝ。單にこれのみならず、橋を架け、堤防を築き、道を拓き、且つ暗がりの小路には到る處瓦斯燈を建てた。其他學生に資金を與へて文學と、政治と、法律と、醫科と、理科と、何等を論ぜず、好む處に從うて學ばせ置くのが、高等學校、美術學校などに數多ある。又名家の倒れむとする者には資本を與へて、祖先の祀を絕たしめず、本堂の修覆、屋根瓦の寄進、釣鐘の建立、其等にまでも行屆く上に、博物館の考古美術部には主なる出品主で、それで年紀三十七といふ異數の名士である。山林、

田地、株券を、爾く徳を布くべく多く有した上に、衆が浦島の旦那、と渾名する所以は、仔細あつて此の八田潟の半を自家園中の一名勝となし得る特權を有して居るからで、向うに一帶の白壁の望まるゝ、湖畔の城廓は卽ち其の別業。

「それが何も君の新聞に出して、然ほど價値のあることでもないぢやありませんか。」

と教授は恰も記者の頓興な言葉をたしなめるが如くにいつた。

聲も終らず、

「何、那等が二人が結婚した位、憚りながら私の社では、鼠の嫁入より珍らしくない。また此處へ此の島が出來た位、水道尻へ鯰が泳いで來たとも思はないけれども、線を引張つて、二人が結婚したのと、其の持地だといふ湖の一面に島が出來たのとを、結び合して御覽なさい。こりや縫へるでせう。尤も太公望の使つたといふ眞直の針で縫ふのぢやあないので、鉛筆で以て、僕が、」

と、輕快な高調子。

三

牛若は教授を顧みて微笑みながら、

「先づ其の天象と人事を、手帳へ恁う、」

左の掌を開けて月に向けると、意氣昂然として右の人指の先で字を書す形をして、

「さら〳〵と遣着けると、ものになります。此の記事を又待つてゝくれる最員があるのだから難有い。」

といひながら手を動かすと、手袋は月の影に白銀の如き指を透通すかとばかりなり。

秋こそ長けたれ、未だ毛皮の手袋を要するやうな時候ではない。牛若の之は又仰山な。萩に伏し、露に寢て、沿道の勝地、舊跡を線路に添ひつゝ跋渉し來つた、草鞋に似ず、服裝にそぐはぬ美しい手袋に目をつけて、夏信の令閨は文筆に趣味を有つて主人の親友と懇意なので、遠慮なく、前刻、可笑いぢやありませんかと、道中衣の綻を縫ひながら逸疾く尋ねた。

（これは前々から御存じの通、私には親もなし、兄弟もなし、小兒の内から可愛がつてくれた、年紀もおなじ位の中好しの叔母さんが一人ある。故郷には居るけれど、一家流轉の當時、今居所が知れないから、今度の歸省は、ひらき封の通信を兼て、主に其人にめぐり逢はうと思ふので、逢つた時、私此の手の質が荒れて居ると、苦勞をしたと思つて深切な人が悲しがるから、風にもあてないで大事にする。）といつた、曰附の一品。

教授は、唯單に、一個、氣輕な、あどけなさうな、旅客でない、牛若が神采躍如たる今此時の風采を、賴母しさうに瞻めて居たが、打頷いて又唇に手をあてた。

「で都合よくゆきますか。」
「參りませうとも。丁度何だね、まあ、君が仰向けに寢て居る時、天井の節穴を一ッ〳〵睨んで居て、其を合せると梅の花になつたり、美人の目になつたりするやうなもんだよ。お商賣でなけりや、那樣ゔるい根性は起しません。いつか君は、佛樣の御飯にお箸が突立つてるのを見て、帆柱を工夫したぢやあないか。御供物だつてたゞはしないんだ。いつて見りや怪しからん譯だよ。」
「それだつても、事あれかし、事あれかし、と狙つてる人もないものだ。事となると、これで、隨分人の泣く事もあれば、悲しむこともあるし、又迷惑する事もありますからね。」
「其が面白い、いや其奴が結構だ、誰も東京から名題役者が新下をしたといつて、其で人死があらうとは思ひますまい、處が、末廣座へ九藏が來て、熊谷を演つた初日といふのに、可いかい、君、九ッになる男の兒と、十六になつた娘と二人、餘りの大入だつた人いきれで蒸死をしました ぜ、電信の始めて出來た年には、何だ、電線に凧を引掛けた、其の小兒の親が首を縊つたね。そりや死んで命乞をした譯で、實際また電線に妨害をした者は死刑に處せらるッて馬鹿な風說をしたからだ。大變ぢやあないか、那の銅像だけれども、それでもあの公園の銅像を鑄た細工人は發狂したしね、辰の口の溫泉を掘つた時は、熱湯に爛れて君、七人死んだ。すべて那樣だよ。」此の天下に新いものが現れる時には、何にしろ人死があるものでね、一夜島も一種土地の革命だよ。

さて、さうなるとおもしろい、づつと氣の利いたひらき封が此の手で出來上らうといふもんだ、あの島なんざあ、見給へ、いまに何か不知、始まるから。」と、此の邊に人こそなけれ。

四

仙冠者は傍若無人。
「僕、あへて、人の不祥を喜ぶといふ譯ではない。事の吉なるも亦可なり、但し價値のある報道の出來上るのを待つばかりだ。だから、又君の惚話でも謹んで承はる。」といつて、膝に手を垂れて斜に教授を見て一笑した。
夏信はしとやかに其の手を取つて見守りつゝ、
「若い先生、惚話を聽きますか。ぢやあ話しませう、君は今日着いたばかりだから未だ知らないのは尤だがね。聽給へ、あの浦島に輿入をした新夫人のために、殿樣が一花持たせようといふので、新婚旅行も可笑くない處から、丁度湖の其領分內に此島が湧いたのを幸、明日を期して、今度新調した二頭立で、新夫人がこの別莊に來て、恰も天から祝つて貰つたといふ格で、自ら島に名づけようといふのださうだよ。」
牛若は取られた手を拔くやうに拂つて取り、

「えゝ、」
「何うです、これは未だ知らなくッて居たんでせう。」
「申譯のないこッた、知らない、知らなかつた。へい、新夫人が新たに此島に名づけるために新調二頭立の馬車で乘込みますかね、命名式があるんだね。や、そいつは宜い。」
「何も無理やりに、其の君の腕で、人事と天象を繫ぎ合せるには及びますまい、丁ともう出來て居りますよ。」
「全くね。」といつて、牛若は其額を押へた。
「其にまだ、豫て浦島から學資を供給されて、德なりとして居る、高等學校の學生幾十名、これに有志の學友が加はつて、凡そ百人ばかり、背囊に村田銃、劍を帶して、すべて演習の裝で、馬車を送り込まうといふ催があるッていひます。これは、クヰインが新領地に臨むのを守るといふ意ださうだよ。」
「やあ〳〵、奇、絕、妙。恐入つたことになつて來たな。さあ、忙しい。なるほど、新婚、新島、新調の馬車だ。演習で命名式、新聞の一段ひらき封が三枚ばかり直處に出來上る。此處だよ、此處だよ、馬車が新しい上に、島が新しい上に、新婚の記念の命名式となると、此國にやあ開闢以來の出來事だ。既に九藏が來てさへ人死がある位なもんだから、こりや今に屹度難有いやうな譯

の事が始まるに相違ない。途中で馬車が引くりかへるかな、それとも轍に輓かれる奴があるかな、群集の砂煙の中へ肺病のバチルスが入つて舞歩くも知れず、譯のわからない血の痕が、足跡もまだつかぬ島に滴つて居ようも知れぬ。一寸想像した處で恁麼ものだ。何うして豫想外なことが出來上るから、おもしろい。何しろ、島の命名式は可かつたな。畜生、難有いことを思ひ立つてくれたもんだ、嬉しいことになりましたぜ。」
「見給へ、まあ、此の景色は何うです。」
と、醉狂な記者の毒言を、いつもの癖と聞流して居た畫工は飜つて聲を懸けた。

五

醫王山颪が身に染みて、月に一點の曇もなく、鰌、鱸、麪麭鮒、鮒、沙魚などの幾十億萬の數が此中に動いて居ようとは思はれぬ。湖は一面に中高な鏡を掛けて、兩人は其の周圍六里の大なる月を抱いたやうだ。乾の天に一星あり、其色綠晶の如く鮮に蒼いのが、赤錆を帶びては閃く、眞下に中つて、灰色の大なる鰻の天窓を見るやうなのは、新夫人の來るを待つ、寂寞とした一種の無名島である。牛若は立直つて、肅然として見たが、急にまた碎けていつた。
「恰もこれ紀夏信の水彩畫を硝子越に見るが如しだ。」

「さあ、其氣で歸らう、もう大分晩いやうだよ。」といひかけて、教授は衣兜から時計を出して見た。

「待ち給へ。」

「此處に立つて居て夜を明すでもなからう、火事の歸りも淋しいものだが、これは又可恐しく薄寒い、歸らうよ。細君が待つてゐるなどと厭味はいひッこなしだよ。さあ、」

「氣の疾い人だ、一寸、少し……」

「爲やうがありませんね、明日、又其の命名式に出懸ければ可いぢやありませんか。」

と背向になつてる牛若の袂を取つて、引くと、心此時此處にあらずで、

「や、船が出た。いや小船が現れたよ、現れたよ。紀夏信の水彩畫を硝子越に見て居る中、難有いものが出來した、待ち給へ、船だ。」

といつて、牛若は、はたと砂の上に小膝を支いた。透して屹と見ると、其の一點の塵もない、月を浴びた堆い湖心のあたりへ、恰も氷柱の中に黑い蟲が蠢いてる景色で、一艘の小船。

「始まつた〳〵。絲が見つかつたぜ、さあ、事件の小口だ。」

「そりや水の上だもの、船も出ませうよ。」と教授は夜寒が身に染む樣子。

「ものごとは然う譯もなく出來てるものぢやない。それ、船は、あれ、的面に島の方へ漕いで行

くぢやあないか、二人乘つてるやうだぜ。待ち給へ〳〵、船頭のやうぢやあない、何うです。え、何うです。」

「判然分りません。」

「そ、そ、そんな、阿漕をいはないで、後生だから、君の其の天井の節穴を綜合する特能をもつて被在しやる、清しい目でよく見てくれたまへ。而して婦人だとか何とか、いつてくれ。これが夜網に出た漁師の船ぢやあ、難有くもないが、あれ、段々島の方へ行くぢやあないか。」

小船は光ある濡れた艶かな銀の盤に輕く浮んで、紫の水をちら〳〵と、舷に絡み着けながら、湖の上を漕いで行く、と鱶の天窓が幻のやうに歩いて近づく。

「何うです、可けませんか、何うにかなりませんか、駄目ですか。」

「何だね、頓興な。」

「いえ、何か變つてちやくれませんか。何うも困つた、能く見えない、女ぢやありませんか——一生懸命だ。」

「女です。」

「えゝ！」

「一人は洋服を着た男のやうだね。笠ぢやあない、何でも鍔の廣い、帽子を冠つてるのは確です

よ。も一人は悪くすると、……女です。」
「むゝ、」といふまゝ衝と立つて、牛若は慌しく、教授の前に一揖した。
「感謝、感謝、お庇さまだ。こりや、大したことになつて來たぜ。えゝ、君、其が其の島の神様だよ。山にでも川にでも、靈妙な魂がある。其の人は島の靈だ。難有い、北陸道加賀國河北郡の八田潟に島が湧いて、男女の神が小船に乘つて天降つた。予が目のあたりこれを見る事や。」と、伸上つて見遣つた時は、早や月が傾いて、船は湖心の下になつて居た。其時、島の片端と思ふ處から、颯と白鷺の立つのが見えた。
「あれ、あれ、船が白鷺になつて飛ぶぜ。」
「これ、可い加減にしないかよ。」と、牛若の背中を輕く打つ。途端に二人は身を開いて、
「今のは？」
「銃聲！」

六

「あれ、」と、ばつたり、眞砂の中へ崩え込むやう、兩膝を折つて片手を支いた、睜つた瞳を熟と仰向けて、頭に近い小さな赤松の梢を瞻めたが、鼓膜を打ちし轟然たる響も殘らず、松の葉一葉

も動かない、唯彼の綠晶色に其の閃めく毎に錆を持つた、無名島の空なる星は、絶えずきら〳〵として、傾いた月の、かすれた輪廓よりも一際明るい。的面に其の星に面を向けた所爲もあらう、二十五六の婀娜たる顏が少し蒼ずんで居る。婦人は呼吸を吐いて、繻子の襟を幅廣く掛けた、小紋縮緬一ッ紋の着物の裾を、長く白砂に引いて、持て餘す身を起して立つ、裾にちら〳〵、足に絡る長襦袢を乘せて、砂に埋れたのは足袋も穿かずに跣足なり。
片足を爪立てて、砂をまさぐりながら、擽ッたいといふ眉を顰め、投出したやうに、
「驚いたねえ、今時鐵砲なんだよ、何のこッたな。」と何か力なげに、渠は自から呆れ返つたやうに呟いたが、
「あゝ、」
と草臥れた嘆息で、斜に面を低れて、骨のあるやうな肩の上へ頤を乘せると、片頰に張合のなささうな靨が入つて、
「ふう、これでヒヤアもないものだ、かしくさん、何う遊ばした。」といつて頰ぺたで小突くが如く頷いたのは、案ずるに此の婀娜者、自から其名を呼べるこそ。
「お氣を着けなさいましだよ、おや〳〵だらしがないねえ。」
片手を懐にしてだらりと袖をぶらさげた。指の先で頤をおさへて居る、折り曲げた肱は肉一顆、

裂けてでも居るらしい振のあいた處に、冷たさう。左手で胸を搔合せて、だらしなく左褄に取つて上げると、俯向いたまゝ蹌踉とする趣で、眞砂を蹈んで歩き出した。

恁て此の婦人は、其の姿で、其の形で、湖の邊を行くのである。

お斷り申しますが、八田潟は北海の濱續にあるので、八田、根布、元吉、などといふ漁村がちらほらある。在る處を、皆名付けて、元吉の濱、根布の濱などと、云ふ。湖はこの八田の濱に、其の方面の一半を有つ。

暫らく歩を運ぶと、早やものもない廣場に來た、背後は大浪の畝るが如く、ゴムを張り詰めたやうな砂山で、起伏凹凸處々、ほの〴〵としてあるばかり。渺とした白砂を、婦人が蹈應なく波にゆられるやうに、足を埋み、爪先を拔いて進むにつれて、音もなく荒されたあとを、あとを、平面にするために、ほろ〳〵ほろ〳〵と崩れ込むで、砂が一ッづつ、働くかのやうに、眞直に果のない濱地の中へ、形の見えぬ絲を引いて行く。……女の姿は、宛で婀娜なる中年增の魂が一ッ引添うて、藻脫の夢を連れてあるくやうであつた。

暫く、無心の體で、凡そ四五町も來たと思ふと、弗と其の魂が姿の中へ入つたやうな、婦人は恍惚した顏を上げて、目が覺めた風であたりを眴す。背後には白い砂ばかり。湖に星あり、光蒼く、行手を遙に橫にそれた濱つゞきに、あからさまな小屋があつて、影法師に齊しいのに、一筋、

淡紅色のあかりがかゝつたのは、透間を洩るゝ燈火である。

七

「釣すとも網をすな、網すとも宿鳥を擊つなよ。あゝ、あゝ、やれ〳〵殺生な事ッたぞ。なまだ、なまだ、なんまみだ、なむあみだ。」と、老一人、板敷に敷いた筵の上に胡坐を搔いて、かんてらの油煙の中に、しよぼ〳〵した目と鼻を一ッに寄せて、手先の働を瞳めながら、投網の破を繕つて居る。網は蚊帳の三隅を外したやうに、煤だらけの天井から颯と流れて、圓ッこい親仁が膝の邊に手繰りためられた。

其の繕はうとする處だけ赤々と灯がさして、一面に目のあらい蜘蛛の巢がかゝつたに外ならず、唯四壁ありといふ住居。

五ひらばかり敷いた筵が、一式の寢床なので、こゝで寢れば、こゝで起る、煮る、烘る、食べる、仕事をする、親仁は名を權七といつて、獨身の漁師、衣食住とも好放題な活計であるから、饑ゑず、凍えないまでの稼に留めて、名だたる上手だけれども網を打たない。一艘所有の小船を漕いでは、終日八田潟の蘆間に釣する、こゝに繕つてるのは賴まれ物である。

熱心に針を動かしながら、

「あゝ、雜魚一尾でも魚の生命だ。これが又生命となると、俺が此年でも欲しいものよ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、釣すとも網すな、網すとも寐鳥を擊つなよ、なまだ、なまだ、此處が敎ぢや、南無阿彌陀佛。」

「もし、もし、」

「殺生は罪ぢやけれど、人參買つて首縊る、雜魚一尾捕らいでは、食ふことがならぬぢやて。釣すとも網をすなよ、なまだぶ、なまだぶ。」

「何うぞ、一寸。」

「何か、又これを捕つてならぬ譯なら、海をかへ干しても盡きぬほど、天道樣が魚をお拵へなされる法はないてや。」

「一寸。」

「おい、」と答へた、戸外から音訪ふ聲のはずんだ拍子に、思はず權七は返事をしたが、首を捻つて、聞澄して、僻耳だと氣にも留めず。

「獸を打つ奴は、死んで畜生へ墮ちるさうだが、何の此方人等は沙魚か鰌だ。大海の波に揉まれた魚とは違つて、湖の代物は氣が優しうて鈍いもんだ、怨んだ處で嬰兒の亡靈よ。」

「もし、もし。」

今度は權七、何分か耳を傾けて居たから、よく聞いた、女の聲。

「人をつけ、今時分、婦女の來る處ぢやねえ、異な眞似を爲やがる。」

「一寸、濟みませんがね。」

「御丁寧な獸だな、何ぢやい、何處から迷つて來をつたい。俱利迦羅にやあ蟒蛇は居つても狸殿はござらぬさうな、寺中の狐も開化たで宿替をした筈ぢや。川尻から獺でも來せをつたか、何時ぢやと思つて居る、其處所か、忙しい。」とぶつ〳〵、云ひながら、早口に、南無阿彌陀佛。

「誰方ですか、何うぞ、もし一寸誰方ぞ、」

と慇懃に聲を懸ける。

「何、誰方ぢや、私が家には權七一人と、昔から極つて居るわい、拔作め。勝手も知らずに出て來るやうでは、獸め、橙の數が足りないな。それにしても何の變化ぢやい、此間上つた大鰻の化にしては、汝其聲が細過るぞ、松前から流れて來た膃肭臍ぢやないかいやい。」

「開けて下さいまし、後生です、よう、變つたものぢやあないんですから。」

「何ぢや、甘口な、何奴が又汝の方で、變化でございますといふものだ。これ些と新町通ひの若い奴でも苛めてやれ、尻尾の尖から、天窓の皿な、松の根こそげ草鞋の數まで、丁と御存じの爺さまぢや、畜生、其手を食ふものかい。」

八

「可厭だね、まあ、一寸串戯ぢやないのですよ。」

「汝、本氣に誑かさうッてな、はゝゝゝ、止にせい、出直して一昨日來せろよ。なむあみだぶ、なむあみだぶ。」と口癖の念佛で、一向にお構ひなさらぬ。戸外では切なるものいひ、

「開けて下さいな、後生ですッてば。もう寒くッてしやうがないんですから、助けると思つて、一寸、」

「待てよ、何、助けてくれだ。待てよ、」と手を留めて權七は振返つて、聲を高うして、

「誰ぢや、まづ、何奴ぢやい。」

「新町のものでござんすがね、」

「ふむ、何か新町の業、はての、」と暫く考へる。

「大事ないんですよ。」

「何の、湖の中へ島が涌いた處で、私が家に大事といふものはないが、此の木兎は小鳥めらがうるさいでの、惚けて取合はずに居たまでぢや。可いわ、其處を開けて入らつせえ。野良犬が、お前、人間のやうに兩足で立つて開けをるで、繩で結へて置いたけれども、一昨日の晩の雨風で、

他愛なう切れてしまうた、戸に掛金も何にもないわ。」

「おや、」とがつたり、きり〳〵と戸を開けて、

「御免なさいましよ。」

「や、新町の、道理こそ、美しい狐だわい。」

と目皺を寄せてじろりと見た。かしくは取亂した。さきのまゝ跣足で、ほつれ鬢。

「おゝ、寒、」と身をすぼめて、一寸あたりを見たが、

「遲いのに飛だこッてす、申譯のない。」

いひながら、かしくは居處に迷つて、土間の此方に立つたまゝ、夢に襲はれた人の心着いて、なほ覺めやらぬ趣で、疲れてうつとり。

窪んだ目で、かんてらの灯に透して、

「犬にでもおどかされたか、これ、きよとつかずと坐らつせえ、何の道、鮒や、鰡と雜魚寢をする私ぢや。狐ともやひでも大事ない。はゝゝゝ、其は些とも構ひはせぬが、又何の彼のと面倒ぢやで、變なやうすぢやが仔細は聞くまい。金に詰つた人ぢやからというて、私に工面の出來る譯もなし、犧牲にならつしやる女ぢやというて、猟々を退治るやうな力もないで、聞いたとて何にもならぬ。ひもじけりや食べさつしやい、二椀ばかり餘つて居るわ。附木も薪ざつぽうも其處ら

にあらう。見さつしやい、竈もあるでの、寒ければ燃すと可い。はて、これがお客様で來ようなら、其方は紋着で丸帶ぢや。然うなりやあ、肩衣でもつけて鰯の鮨でも壓して置く、跣足で駈込んだ此方だから、勝手に打ちやらかして構ひはせぬが、落着いてござるが可いによ、なむあみだぶなむあみだぶ。」

婦人は默つて聞いて居たが、頷いて、心安げに莞爾した。

「焦燥つたい譯をきかれたり何かされようかと思つて居たのに、とつさん何より御馳走様よ。恁云ふ譯があつて爲やうがないんですから、斷めて夜の明けるまで邪魔さしておくんなさい。可ござんすか、賴みますよ。」

「うむ、可し、七面倒臭い、手數さへかけねえ分にやあ、ゆつくりさつせえ、仔細はないさ。」

と親仁も極めて其の意を得たる面色あり。切つて放したやうに婦人から目を退らして、仰向いて、網を引張り、

「なむあみだぶ、なむあみだぶ、はい、はい、釣すとも網すな、網すとも宿鳥を擊つなよ。」

九

「どれ、何しろ、早速暖まらして頂きませう、寒いッたら、もう、」と、胸を張つて肩を尖らしな

がら、かしくは手を握つて、がた〳〵と顫へたが、裾を下ろして、濡れた緣側を傳ふやうに、浮足で土間を拾ひ、屈むで柴を摑むで、竈に臨むと、燃さしだけれどもコツ〳〵固さうな薪が二三本、突込むだまゝである。

手を伸ばすと屆く處に、恰も附木があつたので、剝いで取り、繻子の帶の結目の片端を、後ざまに抱へ上げながら、灯に附木をあてる。ト青い炎が、小さくかんてらの灯の黑いのと分れて、絲を引くやうに網の前を傳つたが、眞白な掌が竈の中で赤くなると、柴が燧と音して、ちよろちよろと燃えはじめる。其の前に前髪がぱらりと下つた、かしくは投首。

「決して構ふではないけれども、丁度水もはつてある、沸く頃には釜底の飯粒も溶けようで、澁茶でも入れてまるらつしやい、私も一杯つきあひたいでの。」

「難有うござんす。」

「何うぢや、燃しついたか。」

「今に、」

「なむあみだぶ、なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

今に、沸くといつたばかりで、火はなか〳〵移らない。馴れない故でもあらう。其の風俗でも、大概思ひやらるゝけれど、これはあまり下手なおさんどん。

「あゝ、燻るわい。これ老人の目ぢや堪るものか。吹なせえ、えゝ、埒の明かぬ、はゝゝゝ、妖怪め、汝が尻尾をいぶし出す奴があるものかい。こんた、煙つたくはないか、これさ、こりや堪らぬ。」

「何うして恁麼でせうね。」と美しい衣の綾に、煙を絡めながら身悶する、振をこぼるゝ紅彼方此方、親仁は針の手を留めて、大な掌で虚空を拂つて、

「吹かつせえ、吹かつせえ。こりやならぬ、目も口も開きやせぬわい。」

「私あもう、さつきから目をつぶつて居るんですよ。」と婦人は顔を背けて、白い咽喉を烟の中で仰向けに伸した。

咽び笑といふのをして、

「はゝゝゝ、こんた悧怜ぢや、年はゆかぬが話せるな。わけもない、煙たけりや目を塞ぐか、世話は入らぬぞ、來たり、恁う、」と權七もかはり者よ、端然として眼を塞いだ、二人とも暫らく無言で、身動きをしないと、森。——

風一陣さら〳〵と來り、八田潟を大きく一撫に颯と渡つたかのやう、沈々としてものの引入れらるゝ如き氣勢は、蓋し月が落ちるのであらう。世の中も暗くなるやうに思ひ取られた、更に森とする。

耳に近く、ギイ、ギイ、と艪の音が聞えて來た。

言ひ合せたやうに、二人は目を開けて、顏を見合はして齊しく笑つた。

「何のこッたい。」

「ほゝゝゝ。」

煙は如何なる形をなしてか、戸の外に吹攫はれて、網の目も判然と見える、竈の下には、螢火の、其の形長く、赤きが殘れり。

「貸さつせえ。私が。」といふので、打ちやり家の親仁止むことを得ず、向直り、土間へ足を下ろすと同時に、裾を取つて向うへ搔遣る、投網は一搖、細瀧の風に靡ける風情。かんてらの灯は下に曲つて、風が又打あたる、湖に臨むだ小窓の下で、幽に、ギイ——

十

框の筵に腰をかけて、向うざまに足を揃へ、ぐいと蹈伸すと馴れたもので、鐵火箸の長く逞しいのを巖乘に握り持つて、踞づてる婦人の、なよやかな肩を掠めながら、竈の下へ突込んで、抉るやうに搔廻すと、これなるかな。

途端に當つた。舳を着けた。渚を歩く跫音が忙しいのと、寛かなると、入違ひに、近づいて聞

える間もなく、板戸が飜つて顯れたやうに、朱を灌いだ、炎の影の投網に映つて、明い彼方へ、附着いて、竝んで二人。

男はしつくりした洋服で、無造作の身拵、鍔廣の黑い色の帽を目深に被つて、少し俯向いた目も眉も隱れて見えず、やゝ面やつれをして居るかと思はるゝ、頤に些の髭も蓄へぬ、年配は三十そこいら、筒袴の裾を高々と卷上げて、脚絆を固く緊めて革鞋がけ、銃を擔つて、革帶を帶し、白鷺を一羽仰向けにして、黃色い長い脚を倒に揃へたのを、桃色の切で縛つて、結目長く、之を左手に提げたり。右手をしつかりと衣兜に納めて、身内に隙なく立つた。鷺の嘴は長く垂れて、其の膝のあたりに力なげな、男の脊はすッきり高い。

女は小造で丸顏の、目は鈴を張つたやうで、色がくッきりと白く、鼻が高い。口許がキリゝと緊つて、氣だるみのない額つき、ふッくりした前髮が、櫛の目荒く橫ざまになつて、拔けむとして弛んだ投島田の髷の根を、櫛で留めて居る。俠な處ありながら、品好く、あどけない處の見ゆる、年紀は未だうら若い。赤毛布の雨露に打たれた風な、しよたれたので、すッぽりと體を包むで、小さな草鞋ばかり痛々しいが、件の白鷺の脚を結へた、男が左手の美しい切は、此の赤毛布の下なる幾分の衣の端を裂いたのであらう、見るからにあでやかなり。

「これはお客樣。强情張つて出さつしやつたが、お案じ申しやしたよ。旦那樣は漕げましたでが

んすかい。」

ほく〳〵もので聲を懸けると、男は手の尖も動かさなかつた、女は顏を斜にして、眞珠のやうな可愛い前齒を少し見せて、傾いて、二ツばかり頷いた、其容子といつたらない。此あたりでは人が耳を聳てる、生粹の、江戸言葉で、

「うまいものよ、ちやんと漕げて、」

「それは可うござりました、覺束なう思ひましたに。えゝ、何か美事なものが、ほゝう、」と目を白鷺に。

「これはねえ、」

調子に乘つて言はうとするのを、男は傍から目配で留めたやうであつた。

美しい星が瞬いた。女は目つきで心得て、

「いゝえ、あの、ドンと擊つちやつたんだよ。」

といひ紛らすが如くにして男を見返り、

「寒いわねえ。」

「煖らつしやりませ、丁度可うござります、これへ。」

「あゝ、些とばかし、」

つか〳〵と竈に寄つたが、先客の婦人に目を灌いで、猶豫つて、
「御免なさいよ。」
「何うぞ、」といつたばかしで婦人はもの思に沈むで居る。仔細あるらしい、其の身投から救はれたやうな派手姿を瞻つて、女は左右なく割込むで煖らうとせず、手を毛布から出しもやらず。
親仁は一切無頓着で、
「そして何は、あの島は見てござつたか。丁度月も良うござりやしたし、變つた景色もござりませぬかな。」

十一

問はれると、顏を向けて女は一寸眉を顰めた。
「お爺さん、人のものだつて。」
「島かね。」
「然うなの？」
「えゝ、然やうで。」
「をかしいわねえ。」といつて邪險な顏をした。

「致し方ござりませぬ。尤もな、魚どもは誰のものとも極りませぬ、捕つたものが錢に爲やす。湖ぢやからというて、皆ではござりませぬが、丁度あの島が湧きましたあたり、さればこの水を三ツに割つた一ツにばかり、御覽じやしたろ、大い城のやうな構の邸のありやす、あすこいら一圓は、浦島樣といふ大長者がものでの。」
「だツてこツたわ、私達がねえ、漕着けてさ、島へ上つて見ようと思ふとね、たつた一人で突立つてる書生さんがあつてよ。」
「へえ、島の上に。」
「あゝ、」
「一人で。」
「然うよ。」
「此の夜中。」
「大方まだ居るだらう、明方まで、番をするツていつたもの。」
「それは……はてね。」
「そして今度、緣組をした新夫人だツてさ、何だらう、其の、浦島、それ、其の浦島だといつた、其家へ緣組をした人が、明日島に名を付けに來るんだから、まだ其の女の足が此の島の砂を踏ま

ない内は、蟲一ツでも上げることは出來ない、一旦名が付いて、浦島の領分だと極つた上には、畠にしようが、生洲を拵へようが、各自の好にさせるのだけれども、式の濟ない内は、何てッたつて上げることはならないから、歸れ、ッて、然ういッてよ。爲方がないんだつてね、人の持ものなら手の付けやうはないんだつて、あの然うおいひだもんだから、私……」といひかけた顏にいふべからざる不平の色が見えた。親仁も乘つて出る。此の新しい話には、かしくも顏を擧げて耳を傾けた。

「それからねえ、」

「歸らう、」と沈んだ力のある聲をかけて、屹と女を見た。男も鬱し怒れる色あり。一言いふと齊しく、親仁の前を横に切つて、大跨につか〳〵と戸口に來た。

女は慌しく、

「貴方。」

此方も向かず、猶豫なく、早や戸を開けて、銚口を搖ると、振返つて、

「よ。」

「一寸、御祝儀を、」

「うむ、」といひすてゝ、早やしら〳〵とある砂を踏んで、濱へ出た。忙しく懷を搔探ぐると、懷

紙に包んだ緋鹽瀨の小さな紙入の中から、一枚の銀貨を出して、筵の上へ、

「あい、」

「滅相な、お前樣。」

「それぢやあね、」

と身を飜してかしくには目もくれず、小造なのが小刻に、つか〳〵と、草鞋も輕く追懸けるやうにして跟いて出る。

「えゝ、これ、姉さん、」

造り附けた船頭の置物のやうに動かぬ親仁が、そゝくさ身を起して戸に縋ると、後を閉めないで行つた、仄に白砂の目の行く果に、黑いのが二人、細く透る、今のが聲で、

さらばといふ間に早や松の陰
幽に見ゆるは菅の笠。

と北を指して唱うて行く。

十二

其夜、彼の綠晶色の閃々として閃く角に、鏽ある美しい星は、金澤一圓到る處に、心あるもの